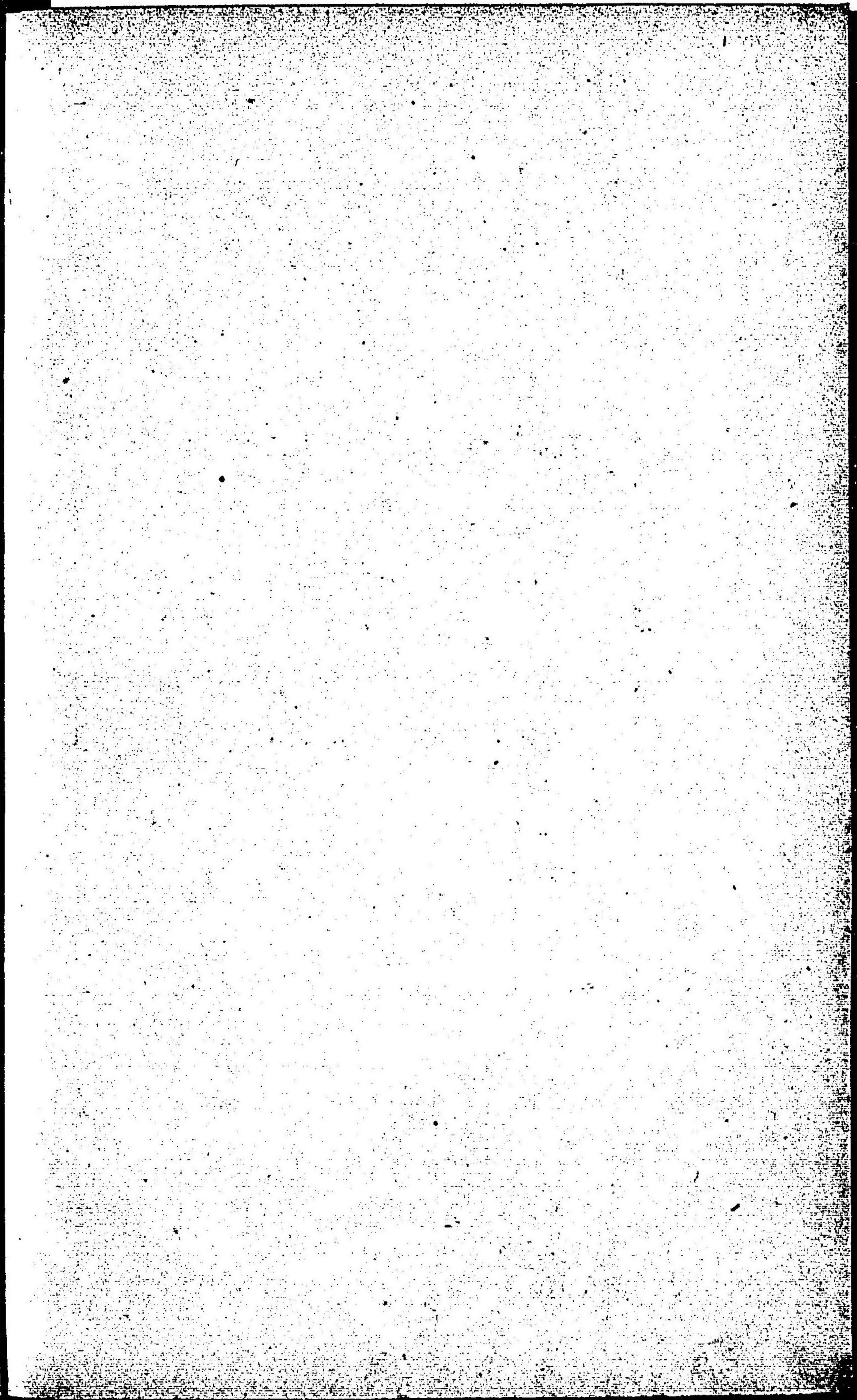
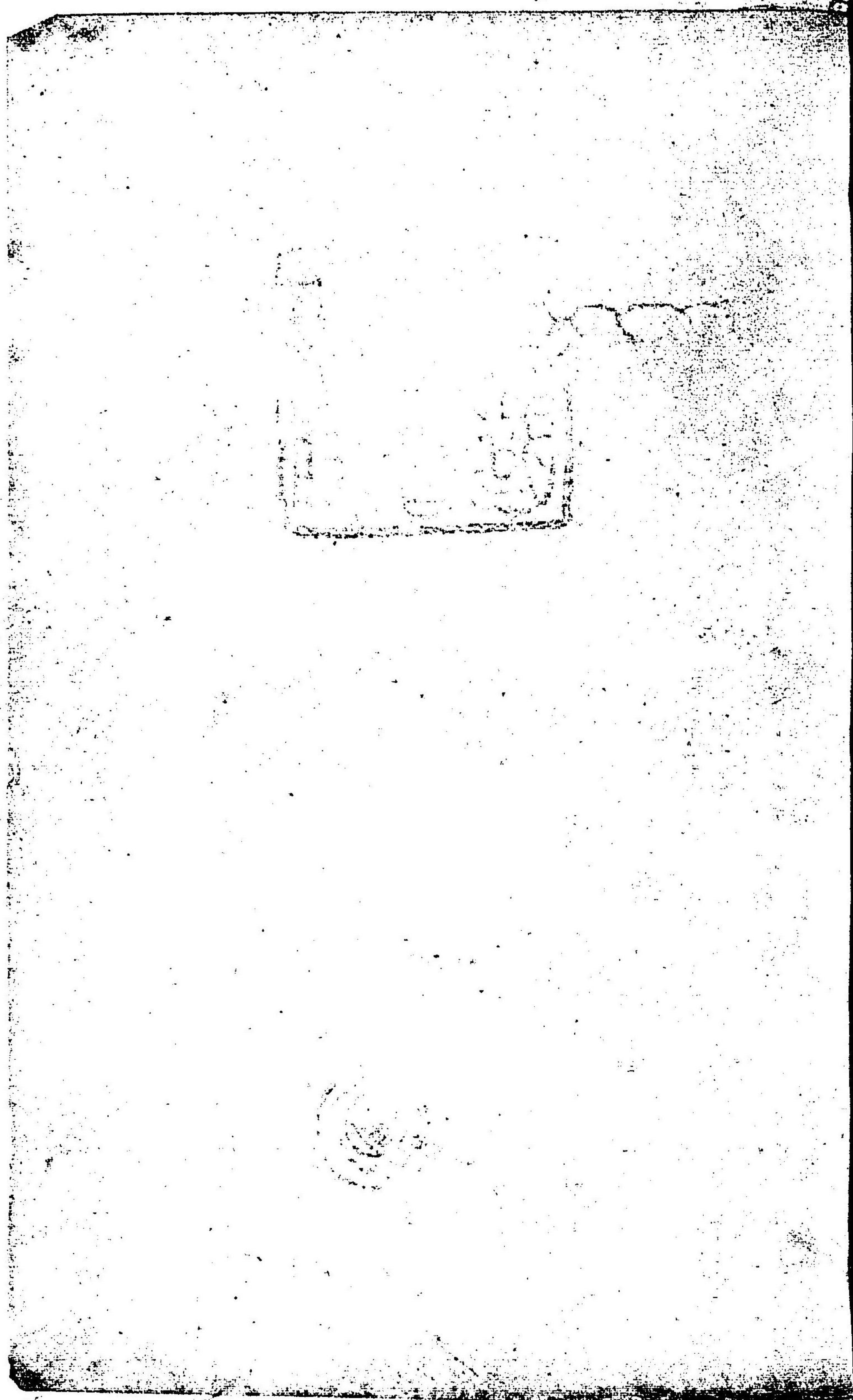


147

猪野惠空師	靈山諦念師	前田慧雲師	大洲鐵然師	足利義山師
講演	跋文	序文	題辭	校閱

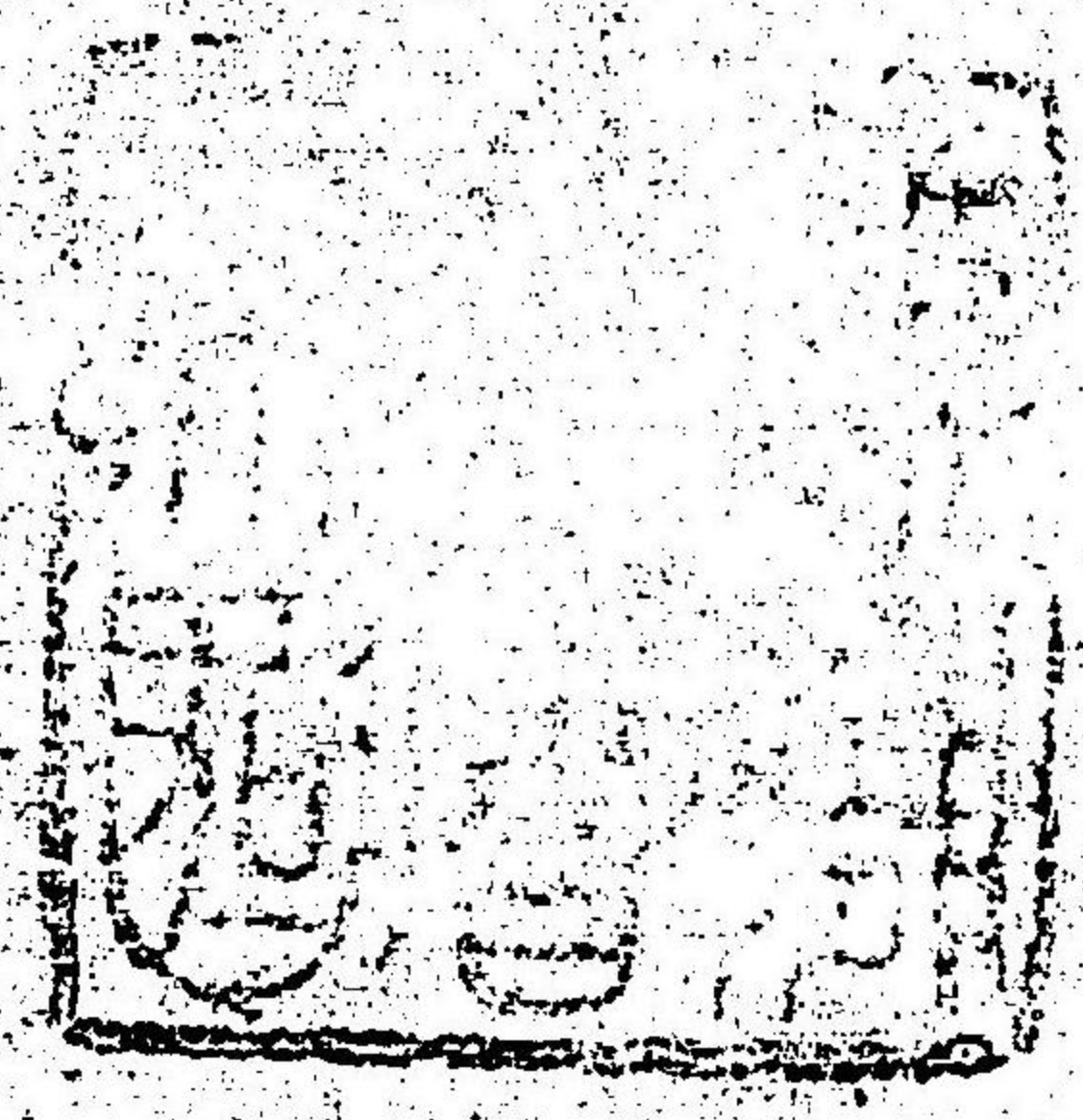
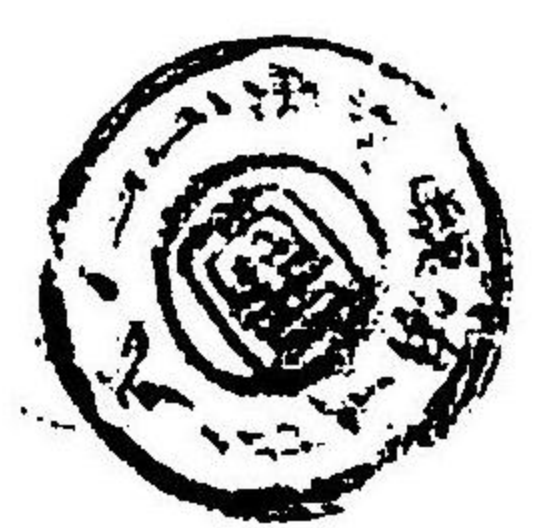
各教校教科用書
 敬師試驗參考書

二卷
 新編 江問對 全



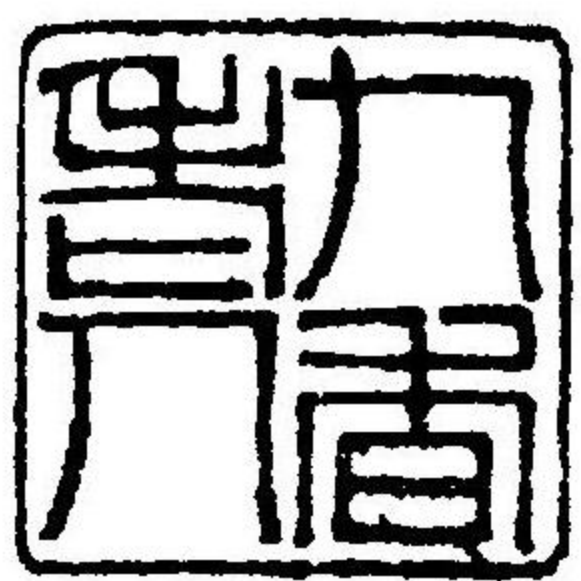
四橫

不取



戊戌年日

錢氏叔



79-149

一卷鈔條江問對序

儒者某氏有言曰。世之解六經者。多失之
乎深焉。吾宗侶之學。亦稍陷其弊。近來愈
甚。予竊謂。按文畢義。雖是佛所誠。而淺智
之者。不可妄深求義乎文外也。藝州昔有
石泉和上。其學一準祖訓。離情遵理。依文
折義。故余常喜之。吾快樂房空公。實和上
孫弟也。曾聞諸人。其講宗典。率由和上遺

範。頗與世之憤々者流異撰焉。惜哉。溘然捐館。不及矯時弊也。頃者。門人某。筆錄公之愚禿鈔講義。將以問于世。來徵序于。適道課無暇。不能執卷通覽。雖乃未知其所講能不乖于所聞乎否。思有亦足以警策後學者也。因辯一言其首。

明治三十一年六月下院。識于東山
莫老館樓窓之下。含潤道人慧雲

凡 例

- 一、本書は。亡師、嘗て進徳教校に於て演述せられしものなり。校、廣島城北、三篠江涯にあり。故に題して篠江問對といふ。
- 一、本書は。元、出版の意なし。若し師をして今日に在らしめば。多少、改竄推蔽せらるべき點あらん。而て業に已に幽明遠く隔て、望むべきにあらず。是れ編者が最も遺憾に堪へざる所とす。
- 一、亡師。強記雄辯、其講筵に臨むや。草稿を携へず隨筆隨演。故に文辭、自ら雅俗雜駁稍々体裁を欠くの感なきにしもあらざれども。義門簡明、條理整然、一種の特色を存す。
- 一、本書は。亡師生前の知己、足利勸學の精密なる校閲を経たれば。錦上添花を添へ得て光彩轉た陸離たり。讀者の補益、亦た莫大なるを信す。
- 一、編者。非才不文。且つ塵事勿々久く筆硯に親まず。漢語の助字虚字、和語のナニハの類、率ね誤謬たるを免れず。粗漏の罪、敢て避遁せず。
- 一、本書出版の舉に關して、鷲山南隨君の幹旋、太た至れり。茲に其厚意を鳴謝す。

贈司 教快 樂房 之碑

吾宗教、盛行于安藝國者、蓋因弘傳有人也、昔者、東岳、首興宗學、龍象接踵、以至今日、惠空老人、大開於世、老人、姓猪荳氏、安藝郡熊野村、西光寺主、証道之長子也、幼失恃怙、其義父了心者、愛其才、育之太謹、年甫十四、入泰巖和上門、刻苦研鑽、經十有餘歲、遂爲其上足、文久元年、侍和上、入叢林、登科得業、明治八年、進助教、官設教導職也、累補至中講義、嘗爲進德學校教授、誘導後進有方、廿三年、安居在叢林、與諸耆宿討論、衆服其學有淵源、造詣精確、乃命輔教、廿六年夏、徵爲叢林教授、且命安居都錄、適罹疾不能就、七月卅一日、寂于廣島僑居、享年六十四、大法主、特贈司教、賜諡快樂房、老人、性溫厚而剛毅、恬淡而勤勉、嘗起本堂再建之工、檀越子來、不逾年而全成功、方是時、老人、接人督工事、頗繁劇、而未嘗一日手廢卷、其精進如此、又慨世布教者、學匠則偏于高尚、唱導家則流于膚淺、欲使之長短相補、是以、居常用意唱導、以救其弊、衆悅之、入寂之日、皆莫不嘆惜、曰、若假數年、竭力叢林、則藝國之學、亦將紹述大傳、可勝嘆哉、頃者、門人檀徒相謀、建碑于西光寺庭內、使予銘之、予、受業于龍華門人、即與老人、學同其源者、因不辭而爲之銘、銘曰、

藝於山陽、學者淵叢、謹確研精、今推空公、講學別微、唱導啓蒙、涵素同歸、永仰流風、
 明治廿八年第七月 勸學義山篆額 司教連城撰文并書

二卷鈔篠江問對 上篇

勸學 足利義山師 校閱
 贈司教 快樂房 猪野惠空師 講演
 武田 智達 筆記

二卷鈔篠江問對 上篇

問て曰く今鈔は何の爲に作るや。答ふ此に通別の二あるべし。一に通由とは佛恩報謝の爲に。相承の祖師各書を製し。傳法利生し玉ふと報謝佛恩の外なし。已に高祖自ら本典偈前の文及び略鈔の序分に示し玉ふが如し。是は諸部の通意あるが故に通由と云ふ。次に別由とは爲欲開導學文類者也。先に文類の作ありて廣く眞宗の法義を顯はすと至れり盡せり。經論釋を大成して往生淨土の因果を顯はす。依て此を一宗の本典と稱す。然れども一部の文義に於て廣博多含にして。愚昧の下機其義理を得難き處往々あり。一を學て云へば教卷の初に眞實教者大無量壽經是也とあれども。觀小二經は捨るや取るや分り難し。能く一部の文義を通鑑せば三經の教義知るべしと雖も。愚鈍の下機其義を了解するに苦む。今鈔の如きは各主要の目を擧て三經に就ても一致

(一)

と差別の二途ありて。其差別に約せば三經に各三宗三往生の別あり。其一教に約せば三經は一の選擇本願を開闡すといふ義をば。名目を作て知り易からしむ。此れのみならず佛身佛土機教相對三心の眞假を判する等。各對待の目を作て本典を稟學する者の爲に。文義を開導するの楷梯として。今鈔を作り玉ふと知るべし此を別由とす。問ふ略鈔の如きも亦た本典依學の者の爲に開導するの鈔に非ずや。されば本鈔の別由としがたし是れ如何。答ふ然らず。略鈔も素より本典を學ぶ者の爲に作り玉ふと雖も。彼此其主義を大に異にす。彼は廣を略にして。概して四法の大意を知らしむるを要とす。此は強ち略を好む者を目的とせず。文義を領得し難に困む者を開導せんと欲す。換言せば本典を解釋する字典の如し。文の通し難きを開導するを主とす。

問ふ愚禿鈔とは云何が解すや。答此題目は非常の立題なり。先名目を解さば初下右二行愚禿の二字は高祖卑謙の別稱にして。建歷元年十一月勅免に報する受書に。

初て此名を用ひ玉ひしより遂に終身の別稱とす。愚は愚昧魯鈍。内心の非なることを明す。禿はカムロと讀む非僧非俗の義にして外相の是ならざることを明す。之れ卑謙の極なり。此目の所依を經文に求むれば。北本涅槃第三三十二に三種僧を説く。一愚痴僧二犯戒雜僧三清淨僧。同第三三十二に我般涅槃後濁惡之世人民饑餓而爲饑餓發心出家是名禿人とあり。此中愚痴僧の愚と禿人の禿とを取て別稱とす。次に鈔とは鈔録又は鈔寫の義。愚禿之鈔の依主釋也。問ふ此目云何か下の所顯を票する立題となるや。答ふ機無を語て法有を顯し人に就て法を表するの目也。我は是れ愚禿にてし是非も知らず邪正も辨へぬ身なり。更に心に持つ所の法なし。然るに今下に明す所の法義は皆是れ佛祖より授かりたる法にして。更に私を雜へず佛祖所述の眞宗の教行證を傳へ顯す也と機の空きを語て法の有を顯はし。愚禿の述るに非ず佛祖の述る法なりと顯す心なり。其法とは何を指すぞなれば。即ち眞宗の教行證を敬信する他力の三法なり。故に愚禿とは眞宗の三法を鈔録することを票する題目となる。

問ふ聞賢者等の二十四字如何なる義を顯すや。答ふ此は題意にして上の立題初下右二行の意を釋す。廿四字中初め聞賢者等の八字は正しく辨す。次の十六字は所聞所顯を轉釋す。先文を解さば初に聞とは耳頰を義とす耳に觸れしむるとなり。

賢とは賢才賢哲と續く。又は賢善と解すの二義あり。今賢善の義に約して解さば。賢は柔順の義柔和にして理に順ふ。其柔順の徳身に備るが故に賢者といふ。總じては七祖を指し別しては吉水なり。吉水は正しく高祖親受の師なるが故に。信とは實義を忍許するをいふ。此信は他力信心のことに非ず理義を能く心得たる義解信なり。次に愚禿心とある心は集起を義とす。煩惱妄念の競起るが心なり。上の信は修得の信之を七祖に配す。修得に依て能く實義を忍許し給ふが故に。下の心は性得の心無始以來情習の心なり之を愚禿に配す。賢者の信を聞て愚禿の心を顯すといふ顯すは反顯なり。七祖の信の是なるを聞て自の愚を顯す。是を聞て非を知る非を知て取らず。只七祖相承の是を承て鈔録す。愚禿が顯すにあらず。賢者の顯し玉ふ所の法義なるが故に。下の所明を題して愚禿鈔と名く。題意を註釋し玉ふが今の文也。次に賢者信等は此は上を轉釋するなり。内賢外愚は賢者の故也。其智には及ふべし其愚には及ふべからずの類。又内愚外賢は是れ愚の故也。轉釋して賢愚の相を釋す。七祖の行蹟を以て内賢外愚といふは。例せば三昧獲得の善導は我等愚痴身。横川は如子頑魯者。元祖は十惡の法然愚痴のものなりとのたまふ。是れ皆内賢外愚の相なり。

問ふ今鈔上下兩卷の所顯云何が分科するや。答ふ大に分て二とす。上卷は通じて眞宗の義門を明す下卷は別して觀經の三心を辨す。初中三。一に題目二に正明三に記事安名。第二に正明の中大分二。一に聖示四法二に引文証誠可

信十一丁右光明。初中又二。一に顯教相二に分別佛土五丁左就。初中二。一に據定分齊二に當相辨義三丁左大。初中又二。一に判釋二に結示二丁左。初判釋の中又二。二に總票二に別釋大乘教。先つ分科一應斯くの如し。

問ふ聖淨二門の名義如何。答聖淨の判目は源と西河に出づ。安樂集上第三大門の中に一代教を判じて一を聖道門と名け一を淨土門と名く。此を撰擇集の初に引て具に二門の分齊を判し。高祖之を承て化土卷に聖淨二門彼此入證難易別あることを釋し給へり。此元祖高祖の意に依て此二門の目を解さば。聖は證なり正理を證見するを聖といふ。此は所期の果を指す。道は能通の義なり其證果に能通する修因を指す。聖に至るの道にして依主釋也。聖に至るの

道と云へば聖は体宇道は活字となる。即ち因を主として名を立て修因感果の法なることを票す。撰擇集に四乗の道を修して四乗の果を得る之を聖道と名くとあり。以て知るべし。次に淨土門とは具に往生淨土なり。往生とは捨此往彼にして此土入證の教義に簡ぶ。淨土とは清淨土の義。自性潔白を清と名く諸垢染を離るゝを淨と名く。即ち無上涅槃を清淨と云ふ。土とは大乘義章十九に身を安する所を土と名くとあり。清淨即土の持業釋也。此穢身を捨て無上涅槃の証を開く法なるが故に往生淨土と云ふ。而て此聖淨の對目は影略互顯にして。一を聖道門と名く修因感果の自力なることを顯す。此に影顯して淨土門は修因を論せず他力回向の法なることを反顯す。又往生淨土と云ふに影顯して。彼は此土入證の法なることを知らしむ。彼は此土入證の自力法此は彼土得證の他方法なりと。各二義を顯はすの對目なり。而て門と云ふは通入の義。共に証果に通入するの法なるが故に。又門別の義あり彼と此と法門別なるが故に各々門と云ふ。問ふ往生淨土の目獨り彌陀法に限らず。他の諸佛の上にも之れあり。大品經往生品或は十方隨願往生經等の如き。聖道門

の中に往生淨土の法あり。然れば此目を以て彌陀法の別目と判し難し是れ如何。答ふ往生淨土の目一往再往の義ありて自ら與奪あり。一往彼が當分に於て談すれば與へて往生と云ふべし。再往此を彌陀法より望むときは決して往生淨土にあらず。何となれば大品經等の如き。往生淨土と雖も實の如く彼の果徳に至るにあらず。所謂維摩經に隨其心淨即佛土淨の雜にして。己が因たけの果を得て皆自果報に住する者なれば。一往與へて往生と説くと雖も。今我より判すれば尙是れ此土入證の教義を出です。今家の往生を此と大異あり。一毫未斷の凡夫毫末も自力を雜へず。佛の願力に依て實報土に證入せしむ。往生即成佛にして其佛の自證に證入せしむる也。如斯の往生は十方法界に會てあることなし。是れ即ち彌陀本願より成する所にして此の本願を往生淨土門と名く。問ふ二門を以て判すれば要眞二門の如き方便法は何れに攝するや。答ふ彼は淨土方便の法なれば固より淨土門に攝屬し。而て後に廢立するなり。下の二雙四重の判の如し。假令淨土門に攝すと雖も。淨土の目を均等に被らしるに非ず。彼は淨土方便の假門にして十八願王の命を擧し。道聖の

人を誘引するの楷梯なり。故に淨土之要門淨土之方便等と釋す。
 問ふ總票の文に大乘小乘とあり此目如何が解すや。答ふ此目は諸宗に判する
初六行所なり。大とは普廣の義乘は運載を義とす。物を載せて運ぶ也。小は狹劣の
 義也。大小の二字人法に通ず人に約せば菩薩と二乘也。無上の佛果を求むる
 大菩提心の人なるが故に大と云ふ。大人所乘の故に大乘と名く依主釋也。小
 乘は二乘小劣の機の所乘の故に小乘と云ふ。二に法に約せば教理行果の法大
 小勝劣あり。小乘は僅に三界を離て無生を證れども。小涅槃にして無上涅槃
 に至ること能はず。大乘は無上涅槃にして二利圓滿の極果を窮むるの大法な
 り。大即乘小即乘の持業釋にして。大小は法を判するの目とす。問ふ聖道淨
 土に就て大小二教ありと票し玉へば。淨土門にも亦小乘ある乎。答然らずこ
 れは言總意別なり。例せば三經隱顯ありと雖と云ふが如し。隱顯は觀小二經
 にありて大經にはなし。今も言は總じて小乘迄も係れども。意は聖道に限り
 淨土には小乘なし。何が故に言總するかなれば西河二門の判を受けて。之を
 主として一代教を判釋し玉ふか故なり。問ふ末燈鈔に方便假門の中に大小權

實の教ありと云ふ。然れば淨土門の中に亦小乘あるに似たり。答ふこれは所
 引に約して明すものなり。觀經中輩の人元を論すれば聖道にありて小乘戒を
 修したる人なり。夫を誘引して願生の人とす。元の所引の人に約していへば
 。全く小乘人なるが故なり。能引の法は要門と雖も佛果に到らしむるの方便
 にして大乘なり。二乘小劣の法にあらざると知るべし。
 問ふ大乘教を別釋する中頓漸二教あり。此頓漸の義相如何。答頓漸の名もと
初八行佛說に出つ。楞伽經に曰く頓者如鏡中像頓現非漸々者如沓摩羅果漸熟非頓と
 。此を以て一代教を判すると。武都山劉虬に始る。後の釋家之を承くるもの
 多し諸註に論する如し。此頓漸の判釋に化儀化法の二あり。天台四教儀等の
 如し。化儀の頓漸を佛攝化の次第に約して頓漸の名を扱ふ。華嚴の如く直に
 大乘を説くを頓教とし。始に小乘を説き後漸々に大乘を説くを漸教といふ。
 他師の上化儀に約して判する者多し。大乘義章一大乘玄論五法苑珠林七等
 の如し。化法の頓漸とは法義の分齊に就て。其法体圓滿して證果の速疾なる
 を頓といふ。菩提の因満足して速に成佛するが故なり。歷劫修行して證果に

至るを漸教といふ。漸は即ち權教にして不了。頓は究竟にして實法なり。斯く二途ある中。今家相承の義は化法の頓漸にして證果の遲速を判するの言也。鷲師以上の三祖には義ありて目なし。安樂集下廿二に頓漸の目はあれども。未だ判教の釋相の用ゐず。明に之を用ゆるは終南吉水なり。而て高祖之を承け玉ふ。玄義分宗旨門に今此觀經頓教菩薩藏也。又般舟讚には瓔珞經中說漸教万劫修功證不退觀經彌陀經等說即是頓教菩提藏との玉ふ。此等の釋相法の利益に就て頓漸の教を判するなり。然るに今家相承の上にも各立と縱奪の二途あり。各立とは二雙四重の判の如く彼此共に頓教にして只橫豎二力の別あるのみ。四家大乘は共に頓教にして實教と判す。此を各立門とす。縱奪門とは他力不共の頓教より望めて。彼の自力の頓教は法体は即身成佛なれども。機に約して論する時は。斷惑證理の故に速疾に證を得ず。彌陀法は一毫未斷の凡夫。三祇を一念に超えて速に極果に至る。聞信の一念に即得往生の大益を得る。故に頓中之頓といふ。今鈔二雙四重の判の後に唯除云云との玉ふは。獨り彌陀法を以て究竟眞實法とす。是れ縱奪門の扱なり。

問ふ頓教を別釋するに二教二超あり。其二教を釋するに。一を難行聖道と云初丁左三行ひ。一を易行淨土といふ。此難易の目如何が解すや。答ふ難易の判は。源と易行品に佛法有無量門世間道有難有易等と一代佛敎を判し玉ふに出づ。先名目を解さは。難とは艱難の義にして行し難しと云ふ意。所謂安樂集に機教背時難修難入といふ如く。又險徑遙長じて昇進すべきと難し等。即ちムツカシキといふ意なり。又思難の義あり易行品に若隨聲聞辟支佛地大衰思也と。論註に五難を擧ぐる中に外道相善亂菩薩法等といふ如きは。思難の義にして難題といふに同じ。行は進趣の義即ち行徳に就て判す。因地より果地に進趣するが故に。又修行の義なり即ち行相をいふ。次に易行とは難の裏にして不難の義。モヤスイと云ふこと。又樂易の義あり。水道乘船は樂しき如しと云ふ。即ち是れなり。道は能通の義にして各所期の處へ通する故なり。問ふ南天の所明を何ふに難易の判ありと雖。其易行なるもの眞假に通じて。廣く七段の易行を以て諸佛易行を明せり。豈廢立の意を盡すべけんや。答南天の時は機緣未熟にして顯然弘願の正意を説くべからず。尙他の華嚴經を釋する中に

於て難易を判し。密に彌陀本意の別意を顯し玉ふが故に。易行といふも一往諸佛に通じて言句を從容寛大に明す。されども其本意は諸佛易行は假にして彌陀本願が眞實なること。歴々として見るべきものあるなり。其高祖の著眼を論ずるに。古來前後の諸佛易行と彌陀章との所明に。六異四異の別ありとす。今要を取て眞假の別をいはい。一に本願有無の異二に自歸有無の異三に總贊別贊の異なり。彼に稱名不退の願なし此は阿彌陀佛本願如是と。本願を擧げて即得不退の益を明す。又彼は南天自らの歸入を云はず。此は我歸命或は我常念等と云ふ。又彌陀に限て他の諸佛と共にせず。特別に讚嘆せり。是南天の本意既に眞假の別あると。明瞭なる所由なり。

問ふ佛心眞言等の四宗の名義如何。答ふ佛心宗又禪宗といふ。禪は禪定なり釋左三行入定三昧を宗とするが故に名く。佛心宗といふは佛の心印を傳ふるを宗とするが故に名く。此宗は直指人心見性成佛以心傳心教外別傳不立文字とて。教言に依らずして直に佛心の指揮を受て傳ふ。言説を離れて思慮工夫するが故に佛心宗と名く。此宗過去の毘婆尸佛より七傳して釋迦に至り。又廿二傳し

て達磨に至る。又六傳して惠能に至る。其後五派を分つ雲門臨濟曹洞等なり。眞言とは眞實の言語なり。此宗は諸尊の陀羅尼を誦呪して瑜伽の行を成ず。故に眞言宗と云ふ。選擇集に相傳を明して大日如來金剛薩埵龍樹龍智金智不空等とあり。法華とは所依の經に約して宗名を立つ法華經を所依とするが故なり。又能弘の人に約して天台宗と云ふ。天台大師の所傳なるが故なり。詳に選擇集の如し。華嚴とは此も所依の經に約して立名す。華嚴經を所依とすが故に。此宗杜順至相に初る。惠苑澄觀等之を承く。等は向内等也。此四宗は皆頓教一乘の法なれば四家大乘と稱す。向内と見るは銘文の意に依る。曰く頓は娑婆世界ニシテ此身ニテ忽チ佛ニナルト申ナリ。コレ即チ佛心眞言法華々嚴等ノ證ヲヒラク云云。問ふ佛心宗は教外別傳と立て、言教に依らずして得證すとせば。教外の宗なるべし何が故に教相の判釋に攝するや。答ふ假令言教には依らされども。法理を開顯して機に被らしめ益を與るは即ち教なり。所謂維摩の一點に雷聲ありの義なり。唯文字のみを教とは云はず。玄義分釋名門に佛は六根通じて説くと云ふ。可知。且つ不立文字と云へども

。何ぞ一言の文字に依らざるを得んや。既に不立文字と云ふを是れ教言なり

。此理あるを以て教相の判を免れず。

問ふ頓教を別釋する中二教二超を出たす。其中二超の判目は高祖何の釋に依り玉ふや。答ふ二超の所依を辨するに就ては。只此目の所依のみならず。惣して横豎超出の所依を辨せん。此一段教相の判釋をなすに大乘教に頓漸を出し。其中に二超と二出あることを明す。二教は教体を判し超出に利益を明す。超に横豎の一變あり出に横豎の一變あり。この二變四重を以て一代教と判す。四重の判目の所依玄義の横超斷四流の文ならん。今鈔下文に引証し玉へり。高祖深く此文意に悟入して横超の二字に四重を含むことを知り玉ふ。何となれば横は豎に對し超は迂出に對す。自余の三重此二字に蘊蓋す。信卷末に横超者横對豎超豎出超者對迂對廻之言とあり。横にして超あらば横にして迂出もあるべし。横の迂出なるものあらば豎の出もあるべし。表裏影顯して論すれば必ず四重を成するに至る。之に由て横超の二字より四重の相對を問ふ玉ふ。問ふ嘆徳文に擇映法師の釋義に依て横豎二出の言を取ると明せり

。法師の釋樂邦文類第四に出つ。今汝の所説と祖語するは如何。答ふ愚昧の者に知り易からしめんが爲に。一往幸に文句の似たる者を指て、所依を示せども而も其義は採らす。法師は法相宗の人にして我宗意を知らず。たゞ其目ありと雖も。偶中にして高祖の所顯と大に異なり。何ぞ此を所依とし玉ふの理あらんや。問ふ此判目如何が分別するや。答ふ此判目の所顯を分別せば。先超と出とは出離生死の遲疾を判す。横と豎とは自他二力を分別す。豎はタテなり道理成佛の法なる故に豎といふ。修因感果の法は次第順序を経る故に豎といふ。是即ち自力なることを顯はす。又横と云ふは字書二義に順せずといふ。道理を超過したるが横なり。修因感果の理を超過して感染の凡夫を無作に生死を離れしむると。全く願力不思議の然らしむる所なり之を横といふ。銘文に横は如來の願力他力を申す也と。可知。横と豎とは自力他力を分別するの言也。超は超越超過にして次第漸次の修行を経ず。即時に究竟成佛する頓悟の法なるが故に超と云ふ。この超の字に二力の別あることを判して横豎の立目あること知るべし。

。法師の釋樂邦文類第四に出つ。今汝の所説と祖語するは如何。答ふ愚昧の者に知り易からしめんが爲に。一往幸に文句の似たる者を指て、所依を示せども而も其義は採らす。法師は法相宗の人にして我宗意を知らず。たゞ其目ありと雖も。偶中にして高祖の所顯と大に異なり。何ぞ此を所依とし玉ふの理あらんや。問ふ此判目如何が分別するや。答ふ此判目の所顯を分別せば。先超と出とは出離生死の遲疾を判す。横と豎とは自他二力を分別す。豎はタテなり道理成佛の法なる故に豎といふ。修因感果の法は次第順序を経る故に豎といふ。是即ち自力なることを顯はす。又横と云ふは字書二義に順せずといふ。道理を超過したるが横なり。修因感果の理を超過して感染の凡夫を無作に生死を離れしむると。全く願力不思議の然らしむる所なり之を横といふ。銘文に横は如來の願力他力を申す也と。可知。横と豎とは自力他力を分別するの言也。超は超越超過にして次第漸次の修行を経ず。即時に究竟成佛する頓悟の法なるが故に超と云ふ。この超の字に二力の別あることを判して横豎の立目あること知るべし。

問ふ即身等の註釋如何が解すや。答ふ上に票する所の二教の物体を出したる初丁左八行なり。超とは證果の利益速疾なるが故なり。四家大乘は即ち豎超の教なり。其超たる所以を釋して即身是佛等と云ふ。即身とは父母所生の現身を動せずして證るが故に。即身是佛と云ふ。因徳圓現するを成佛といふ。煩惱即菩提生死即涅槃と證る也。次に選擇本願等とは横超の体を出す。選擇本願とは吉水所立の目にして第十八願を指す。信巻に斯大願名選擇本願とありて十八願の別目とす。一往論するときは四十八に通すれども。尅論すれば特り十八の別目たり。何となれば。選擇とは取捨の義。取捨の要は自力を捨て、他力を取にあり。其他方法の根本は第十八願なり。自力の行を選捨て他力の名號を撰取するは本願とす。これ即ち第十八願也。一往は四十八願に一一誓願爲衆生故の他力願たる意あれども。他方法の根本は只無上大利の名號を選ひたる十八願の外なし。余の四十七願は十八願の徳義を開示したる枝末なり。此義撰擇集に明なり。名號に勝易の二義を立て、選擇の所以を論す。名號は功德最勝にして機の趣入を云は、易行無作なり。毫末も自力を雜へず只他力に

乗するのみ。又万徳圓滿の故に勝なり。已に勝易の二義を具するか故に名號を撰取する所にして。一切の選擇は此中に攝す。此一願の選擇を具さに開て徳義を顯さんが爲に四十八願と説き。異譯經には廿四願と説く。開合本末あると可知。餘願の他力は根本十八の爲の枝末なり。是を以て選擇本願の目を第十八願の別目とし玉ふ。眞實報土とは方便化土に簡ふ。即得往生は今は現益にて明す。聞信の一念に即得往生するなり。成就文の即得往生と異なり。横超願教の利益を顯して上の豎超に對するが故なり。問ふ聞信の處を往生といふは何の義に約するや。答ふ此は下文の前念命終後念即生ノ處ニ於て論すへき也。因に此義を辨せば。執持鈔に歸命の一念發得すれば此時をもて娑婆の終等とあり。最要鈔に無始以來の迷情の自力の心命の盡くると命終といふ。攝取不捨の光益を得て正定聚に住するが即ち往生なり等とあり。是等の意によるに今家の所談。往生に体失不体失の二途あり。体失の往生とは此穢身終て彼土に生ず。不体失の往生とは此現身を未だ捨てず。聞信の處に正定不退に住す。信徳に就て自力疑心の盡たるを死といひ。正定聚に住するを往生

といふ。即身成佛の頓教に對して。横超眞實の利益を明す故に。聞信一念の
場合に於て往生と顯はす。

問ふ漸教を明す中二教二出の義相云何が解すや。答ふ此一段漸教を明すに總
二右二行
票と別釋とあり。先總票に二教二出といふ。二教は聖道の權教と淨土の要門
となり。歴劫修行して漸次に證を聞く此を漸教とす。淨土の漸教とは要門等
の權教にして直に實報土に入ると能はず。定散の諸行を修して漸く化土に生
ずるものなり。又出は超に對し。三界生死を出離するの證果頓速ならず。漸
次に出離するを出と云ふ。二教は能詮の言教二出は所詮の利益を判す。問ふ
出の言は出離生死の義なれば上の頓教に通ずべし。頓教亦た生死を出離する
が故に。何ぞ超に對して漸教の證果を顯はすとせんや。銘文に超は迂に對す
るの言なりとあり。然れば超に對するの目は迂又は回なるべし何故に出とい
ふや。答正しく超に對するの目を票せば所難の如く迂回を用ゆべし。然るに迂
回の目は唯漸次を顯はすのみにして。出離の義を缺く。迂回は歴劫修行を票
して證果を判すに足らざるを以て。今は出の字を用ゆ。而て若し出の字のみ

に就て論せば頓教も亦た出といふべけれども。今は一を超と判して其超にあ
らざる出なりと顯はすが故に。超より望めて迂出なることを顯す。超出對映
して證果の遲速を判せるなり。問ふ二教を別釋する文如何解すや。答ふ二教
者の三字を徵す。一に難行等は正釋也。聖道と淨土の二を分て各漸教の教体
を出す。難行聖道の目は上に既に辨す。權教とは實教に對する權巧にして。
佛の隨自意に非ず。他の機縁に應して假説したる法にて。佛の正意は四家の
大乘なり。頓教は直に機縁に相應せぬ故に。二乘三乗の法を與ふ此を權教と
す。法相とは又有法宗と云ふ。諸法の性相を決判するが故に法相宗と名く。
五位百法等の名相を判して小乗の機縁を誘引す。解深密經瑜伽論等を所依と
せり。等は向外等にして三論攝論等を攝す。三論は無相宗といふ。有相無相
共に中道の實教にあらずして權大乘なり。彼より判する時は三乘眞實一乘方
便と判じ。此宗こそ究竟成佛と雖も。華嚴天台等の圓頓教より判すれば。全
く權教にして佛の正意に非すとす。歴劫とは歴は經歷劫は時節なり。多劫を
經歷して修行を成就するが故也。瑜伽論起信論に三祇を経ると説けり。二易

行道等。此中要門を攝す次下に之を論せん。

問要門の名義如何。答要は肝要門は通入の義。而て持業と依主の二釋あれど

二丁右六行

も詮する所は一なり。先持業釋にて解さば要は觀經所説の定散を指す。聖道

に對して要といふ。一代八萬の法門凡小の劣機之を修して証ると能はず。之

が爲に釋迦十九の願意を開説して。觀經に廣く定散二善を説く。此を淨土に

回向すれば九品の諸機淨土に通入す。是れ聖道法の能はざる所。十九願力の

法なるが故に歎して肝要の門といふ。此時の門は淨土に通入するの義也。定

散二善の要即ち淨土に通入する故に。要即門の持業也。又要に入るの門とて依

主に釋せば。要とは弘願なり。門は觀經の定散なり。觀經に定散を顯説し聖

道の機を誘引して。遂に肝要たる弘願の眞實に通入せしむる故に要門といふ

。此二義共に證文に見ゆ。凡そ八万四千の法門はみなこれ淨土方便の善なり

。これを要門といふこれを假門と名けたり。即ち無量壽佛觀經一部に説き玉

へる定散二善これ也。是れ持業の義なり。次に證文に上の要門假門より諸

の衆生をすゝめて。本願一乘圓融眞實の大寶海にすゝめいれしめ玉ふか故に

。よろづの自力の善根をば方便の門と申なりと。これ依主の義なり。如斯要

門當分と要弘相望との義あると知るべし。

問定散の名義如何解すや。答定散三福九品等は上に要門と名くる。觀經顯説

二丁右七行

の法を指す。先定散とは玄義序題門に定即息慮凝心と云ふ。心の亂邪を止め

て一境に凝すを定と名け觀法のとなり。又散とは廢惡修善と釋してあり。散

の字廢惡修善の義ある文字にはあらざれども。此は定より簡別して定心三昧

にあらざる故に散善と名く。觀法以外の諸善といふ意にて散善と名く。問觀

經の所説善導の高判に依るに定善は十三觀なり。此は奉提の致請。三福九品

をもて散善となす。是れ佛の自説なり。然るに經文の上散善といはるゝ九品

に通して觀の字を與て。名第十四觀名第十五觀と説き給ふは如何。答之は觀

に就て正觀義觀の二あり。定善十三觀の如きは正觀なり。餘の九品を觀とい

ふは義觀にして。義を以て觀と名けしなり。九品の諸人散善を行すと雖も。

願生淨土の人なるが故に一分淨土の莊嚴相を心に憶想して往生を期する所あ

り。此を義に約して觀といふ。義類相從の觀なり。何故に義類相從して觀の

名を施すかなれば。一經觀佛爲宗の經なるが故に。既に票題して觀無量壽經といへり。顯說の上が觀を主とするの經なるを以て。宗に従ふて觀の名を被らしむ。息慮凝心の觀にあらずと知れ。

問ふ三福九品の義如何。答三福と九品とは開合の異にして。三福を開て九品二十右七行とす。三福とは一者孝養父母等。第一は世福第二は戒福第三は行福なり。世福とは世間に立る父母に孝養し師長に奉事する等也。戒福は五戒八戒十善戒三千威儀八万淨戒等の一切佛の禁戒し玉ふ者。行福とは證果を求むるの善法を行福と云ふ。戒も亦た具に戒行と云ふと雖も。今戒と行とを分つものは。戒は禁戒にして惡を禁する邊に約す。行は證を求むるの善因を修する邊に約す。廢惡修善に二分して戒福行福といふ。福とは福利にして資潤利益の義也。此三福にて一切行を盡す故に三世諸佛淨業正因と説く。此三福を開説して九品の機類を分つ。上輩の三品は行福を修するの機。次に中三品の中上二品は戒福の機。中下品は佛法の行善を修する能はざる下機なるが故に世善を興ふ。此上六品にして三福の行は盡る也。次の下三品の機は三福九品の無分の

唯知作惡の機也。罪の輕重の次第にて三品を分つ。此が觀經隱彰の實義なり。善導の釋の如し。然れども一往顯說に約して下三品を判するときは。自力念佛を行として往生を願す。下上品は三業相應の念佛。下中品は意念の念佛下々品は口業斗りの念佛なり。此三品の念佛は諸行の一分なるが故に。三福の中に之を攝むれば行福の攝とす。故に三福を開て九品とすといふ。此は顯說の扱なり。隱意に約する時は。三福の行は上六品にして盡る。下三品の機は他力念佛に非ざれば之を救ふと能はず。問ふ隱彰の實義に付て論ずる時は。下三品の分別其所顯如何。答ふ機の分齊を知らしめて。遂に本願の正機を顯はすにあり。固より下輩の機は三福無分の劣機にして他力の念佛にあらずば攝すると能はず。然れども釋迦善巧して次第に自力不堪の相を顯はさんが爲に一應三福を分て從假入眞の施設を爲す。先下上品の機は三福の行は行すと能はされども。一分口業を頼む機習あるに依て口稱を授く。最も此中に聞經の善を興へてあれども。此は念佛に對映して勝劣を顯はして廢立する爲なり。次に下中品は口業は能はされども自ら意業を頼むの機習あり。之に依

て聞已の行を與ふ。下々品に至りては汝若不能念者等と。上二品の口業意業共に能はず。三業都絶して自力は毫も叶はざる。至愚重罪命促の劣機なるを顯はす。此機の爲に本願の念佛を與ふと云ふ次第で。自力を簡んで他力の正義を顯はさんが爲に。一の念佛に三品の次第を立つ。

問ふ横出を明すに胎宮邊地等の異名あり。此名目如何が分別するや。答ふ此は彌陀の化土の相を明したものに於て。上に擧ぐる所の要門の利益を出して。一の化土にして種々の異名を擧げり。先胎宮邊地は大經に依る懈慢界は處胎經に出つ。胎宮とは胎生の宮殿といふことに於て。胎生は喩也。化土の行者自力疑心の失に依りて。淨土に往生し乍ら不見三寶の厄を受けて自在ならざるを。母胎に處するに喩て胎生といふ。又宮殿とは至尊所居の處にして尊貴人の宅屋なり。化土と雖も迷界と異なり。界外無漏の土なるが故に嘆して宮殿といふ。故に報土にも亦宮殿あり。然に今宮殿の名を以て化土の異名とするは如何といふに。今は宮殿の内に束縛せられて自在に出入するとの能はざること顯はす。大經の轉輪皇王子の罪あり云云の喩見るべし。次に邊地と

は中國に對する言。眞實報土は中國の如く化土は邊地の如し。何となれば淨土に往生しながら報土妙果の全体を見ること能はざるが故に。次に懈慢界とは懈は曰く懈怠慢は懈慢界は界別の義なり。懈怠懈慢の人の生ずる所なるが故に。因に約して名を立つ。要門自力の人信心相續せず。憶想間斷するが故に懈怠といふ。已が自力を頼て他力に全托せず。信機信法なきが故に懈慢といふ。是即ち自力疑惑の行者の生ずる所なることを顯す。問ふ處胎經の所説をみるに。西方十二億の世界を過ぎて懈慢界ありといふ。小經には彌陀の身土は十萬億を説く。距離大差あるを以て一土の異名と云ふへからず。答二經の説異なれども土は則ち一なるべし。化土といへども共に一の彌陀の身土なり。只機の感見に依て報化の別を見る。然るに小經には十萬億と説き。處胎經は十二億と説く。共に無數量の土に於て暫く數量を説きて凡情に投し玉ふ。既に十萬億と説き又十二億と説く者は。眞土と化土と果報遙に異なることを顯はさんが爲に。距離の不同を説く。即ち大經に邊地と云ふも。同し果報の勝劣を顯はすの施設なり。問ふ小經の顯說眞門は此判釋の一段何れに攝するや

。又今之を判せざるものは如何。答ふ眞門は元要弘二門の廢立より生起するものにして。合する時は要弘廢立にて盡るなり。故に終吉の上では念佛といふは他力。要門は諸行。諸行念佛の廢立を以て三經を分別す。然るに不得意の機ありて。念佛は諸行に勝るゝと聞て尙自力心を捨てず。偶々諸善出過の法と知りながら已が自力を捨てざる機あり。法の廢立は盡くと雖も。この一類の機失を廢せんが爲に。高祖更に眞門の一箇を別開し玉ふ。是全く機失より生ずる者なれば。之を攝する時は要門を出でず。今は惣じて要門に攝して判釋したるものなり。此を別開せざるものは事繁雜に亘るが故に。今は合門に約して明し。其開門の義は下の三往生の所に譲る。

問ふ小乗教有二教といふ。此二教の分齊如何分別するや。答ふ小乗を明すに三左四行二あり。初總票二別釋す。此中二教とは緣覺と聲聞となり。然るに經論の判釋に小乗教を判するに。多くは菩薩聲聞の二藏とし。緣覺をば聲聞に攝して判せり。偕小乘に二教を論せざることは大論地論瑜伽論等の如し。今家では玄義分宗旨門及び般舟讚等共に緣覺を聲聞に攝して明す。之を開て三藏とす

るものは普曜經に。一代經を判して菩薩藏獨覺聲聞藏と判すと見へたり。今は開て三藏とするの判に依て小乗教に二教を明す。何故に緣覺を聲聞に攝すかとなれば。攝論に之を釋して曰く。緣覺は獨覺にして值佛を好まず師教を受けず。自ら飛花落葉の事緣を觀じて證るが故に。教法聲聞よりも甚た少し故に之を聲聞に合説すると云云。又固より二教と分つと雖も。斷證一に販し共に三界見思の惑を斷じて。無漏の果を得るとは同一なるが故に合して聲聞藏と判す。二に別釋するに初に緣覺を釋し次に聲聞を釋す。此二乘の名義を解さば。緣覺とは梵に辟支佛と云ふ。此緣覺の釋名に二途あり。曰く法に約すると事緣に約するとなり。法に約していへば緣とは因緣四諦十二因緣なり。覺とは覺悟十二因緣を觀じて證するが故に緣覺といふ。二に事緣に約していへば。值佛に依らず師教を受けず。飛花落葉等の事緣を觀じて獨覺するが故に緣覺といふ。大乘義章等の如し。次に一麟喻等の註釋は緣覺に二類あるを明す。麟喻とは麒麟の一角に喙ふ。佛に依らず師資同伴なくして獨覺す。又他を度せず獨立するが故に麟喻獨覺といふ。此は緣覺の中機根の勝れ

たるものなり。此を大辟支佛と名く。二に部行獨覺とは部は部黨なり。師資同伴共に行化するを部行獨覺と云ふ。緣覺にも緣覺之緣覺と聲聞之緣覺との二類あり。麟喻獨覺は緣覺の緣覺なり。部行獨覺は全く初は聲聞と同一師資同伴し。最後得道の時に當りて無師獨悟す。此を聲聞の緣覺といふ。問ふ部行なるを獨覺と名くるものは如何。答ふ獨覺に二義あり。一義には自ら證て他を度せず故に獨覺といふ。二には上辨の如く初め部黨あれども最後之れなきが故に獨覺といふ。問ふ麟喻獨覺の如きは無師獨悟にして教法に關係なきに似たり。何ぞ之を教法に加へて判するや。答ふ無師獨悟すと雖も斷證の法理一なり。佛教の理に契ふが故に判教の範圍内に置くべし。又石泉の一義には。自分には獨覺すと思へども。佛の加被なくば斷證すること能はず。證るとき必ず冥に佛力を被るが故に教法に屬すと云云。問ふ聲聞の名義如何。答ふ聲聞とは大乘義章十七本に三義を以て釋せり。一には得道の因縁に就て釋す。聲とは曰く如來所説の言教。無漏の音聲を聞て證るが故に。二に所統の法門に約して釋す。地論に曰く我衆生等但有名故説之爲聲於聲悟解故曰聲聞

と。此意は一切の衆生。但人といふ名のみありて其實は無我なる者。我の人のといふは但名のみにして其名を聲といふ。其聲を觀じて悟るが故に聲聞といふ。是所觀の法に約して釋す。三には化他に就て釋す。法華經に云く以佛道聲令一切聞故曰聲聞。此は化他に約して釋す。三義の中初二は正しく聲聞後一は菩薩なり。義に依て菩薩を聲聞と名く。今は初義を取るべし。次に細註に四向四果を明す。第一が預流向預流果此は初果といふ。向は趣向の義にして因なり。因を擧て果を略す。因果合して八種あり此を八輩といふ。五停心觀總相念處別相念處の三位を小乗の三賢位とし。外品資糧位といふ。次に頓頂忍世第一法を四善根とし。内品加行位といふ。此内外兩位を経て四果に至る。此を小乗の聖位と判す。中に於て今初果を預流といふは。是迄に三界見思の惑を斷じて初めて無漏の智を生ずるが故に。預は參預の義流は流類の義。聖位の部類に至り交るを預流といふ。此に到らんとする因を向といふ。下准解せよ。次に一來向果とは。此人欲界に九品の思惑ある中。上中六品を斷して後の三品殘餘する所あり。三品の思惑未斷の故に。一度來て欲界に生を

受く故に一來といふ。第三に不還向果とは上に殘餘する處の三品の思惑を具に斷盡して。更に欲界に來るとなし故に不還といふ。第四に阿羅漢向果とは。色無色界に七十二品の思惑あるもの皆斷盡す。即ち三界見思の惑を斷盡して此果を證悟するなり。羅漢此に無生と翻す。人空寂滅の理を悟り生死を離する故に無生といふ。問ふ上來一代經を判じて二雙四重とす。此中小乗教を二出の中に判屬せずして判するもの如何。答ふ小乗教は元より漸教豎出の中に攝すると異論なし。選擇集二門章及び信卷の如し。信卷末に豎出者大乘權方便之教二乘三乘迂回之教也とあり。然るに今小乗を別出するは相對の便利に約す。若し豎出の中に小乗を列明せば相對不調の失を成す。何となれば淨土横出の中に小乗なきが故なり。今鈔は目を擧て相對を作り。愚昧の下機をして本典所明の法義を心得易からしめんことを主とするが故也。

問ふ唯除等の釋義云何が解すや。答ふ此上は具に一代經を判じて。法義の分際を釋顯す。今一段は上を結して去就を示す。聖道難行の自力及び淨土門内の假門。總じて所廢の法にして此を去とし。横超選擇の本願一法を眞實教と

し之を就とす。此文廢を語つて立を顯はす。其廢せざるもの二なきが故に唯といふ。唯は簡持の言除は除去の義。彌陀の本願の一を除て。其他は一切方便假門なりと顯はす。選擇本願とは上に論する如く十八の別目なり。大小權實等とは是れ諸家の判目を擧ぐるなり。顯密は眞言の判目にして。顯露に説くを顯教と名け方便とし。秘密に説くを密教と名け眞實とす。權實の判は天台。大小の判は華嚴等の如し。皆是難行等とは廢する所以を辨す。上二雙四重の判釋は法の自体に就て聖淨二門各立して。共に眞實と判すれども。若し機に約して論すれば愚凡の下機及ふべからず。然るに佛は如此不堪の法を汎く説き玉ふ。能説の佛意を尋るに。全く光闡道教にして眞實なる本願に引入せん爲めなり。未熟誘引の說法なれば方便權門の道路と云ふ。法體に約しては各立して眞實法とし。機に約しては奪ふて方便法とす。今は機に約して縱奪門の義なり。次に易行道等とは。上は聖道自力法の方便たることを明し。已下は淨土門の方便を廢す。故に又字を置て之を隔つ。易行淨土とは言總意別。淨土も易行も共に正しく十八願の目なれども。今の意は十九の方便假門を

指す。聖道門に簡別するが爲に。主たる易行淨土の十八願目に就て舉示すれども。淨土即方便に非ず。淨土之方便の依主釋にして。淨土門隨屬の法の意なり。回向發願とは淨影の釋の如く。己が善法を回して趨向する所あるが故に回向といふ。志を起して菩提を趨求するが故に發願といふ。往生要集中本十七紙に誓願所求名之爲願廻所作之業趨向於彼曰回向と。此等の釋意に依て解すべし。回向と發願とは一具の法也。具には發願回向畧しては發願なり。次に方便とは善巧權假の二途あり。今は權假なり。本意を隠して假説するをいふ。方便の字義は。法華文句に方は法なり便は用也。權々の法を以て機の宜に隨ふ。論註に正直を方といひ己を外にするを便といふ。此は善巧方便の釋なり。今此方便假門に就て二義あるべし。一には方便即假門の持業釋。定散は眞實の行にあらざるが故に方便といふ。二には方便の假門の依主釋。これは方便の言は眞門に通じ。今は彼に簡んで要門を假門といふ。方便は弘願に簡び假門は眞門に簡ふ。故に方便中の假門といふ義なり。假門とは暫時の假説なりと顯はす。應知とは言を論註に倣ふ。

問ふ大經云云の一段如何が分別するや。答此上は一代に相望して教義の分齊三丁右四行を揀定す。此下は三經の當相に就て義を辨す。此中に三あり。一に三經一致に就て直に實義を辨す。二に法事贊等の文は三經宗別に就て權を簡び實を表す。三に大經言等の文は追釋。然るに三經の部旨を論ずるに就て。相承に二途の扱あり。一致と差別となり。一致とは今此所明の如く。三經共に一第八願を説くを宗とするが故なり。差別とは法事贊に依て明すが如く。大經は弘願觀經は要門小經は眞門を宗とせるものと。三經各宗別を立つ。而て一致の上に於て三途の不同あり。一には三經共に唯一莊嚴功德と見立て、三經に眞假の別を見ず。此は一論々註の扱也。論に我依修多羅眞實功德相と云ふ。修多羅は三經を指す。三經一眞實功德と見て。廿九種莊嚴を開説す。註に釋迦牟尼佛在王舍城及舍衛國於大衆中說無量壽佛莊嚴功德との玉ふ。王舍城は大觀二經の説所。舍衛國は小經の説所なり。説所に付て三經を票し。三經一莊嚴功德を開説したる經と扱ひ玉へる。天親の心を受て釋し更に眞假の別を見ず。次に相依て機法を成辨するに約す。曰く大經は法實觀經は機實小經は

合説證誠とす。大經は所對の機は深位の權機なれども。法は眞實の法を説く。觀經は法は定散の權法を説けども。機は本願の實機を顯はす。之に依て大經は法實機權觀經は法權機實といふ。小經は機法を合説して諸佛之を證誠す。これは口傳鈔改邪鈔三經和讃の扱なり。此扱の源は安樂集第三大門二門判釋の處にみゆ。而て上二祖の上にも其義なきにあらず。論註上八番問答に論の普共諸衆生の句を釋して。願成就文と下々品を運用して。大經の實法を觀經の實機か信受することを明す。是則ち二祖に於ても機法二實を明すの意にして。西河の承くる所なり。下て終南横川に付て云は。玄義分に言弘願者如大經説と明して。次に觀經の機を辨定するに常没の凡夫なることを明す。往生要集念佛證據門に。大觀二經を引て。三に四十八願乃至四に觀經曰く極重惡人唯稱彌陀得生極樂と明す。選擇集約對章に爲極惡最下機説極善最上法と。此等の釋意にて知るべし。三に一法の施設不同に約す。これは正しく吉水の扱なり。大經は直説。直に本願眞實を説くが故に。觀經は比顯。定散の諸行を説て之を念佛に比し。念佛の諸行に超勝することを顯はさんが爲なり。此

義約對章に見ゆ。何が故に直に本願を説かずして。煩しく非本願の定散を説くやと。問を設け之に答て。本願念佛の行は雙卷經の中悉く既に之を説くが故に等とあり。此意は觀經に廣く諸行を説くは。比對顯勝の爲なり。依て大經は直説觀經は比顯小經は廢立とす。諸行を廢して念佛獨り多善根多福徳なりと顯はす。如斯三經一致に就て自ら三途あれども。各所顯あり。今此所に三經に廣く選擇の義を明せるものは。其三途の中では。正しく相依て機法を辨成するの義を主とし。兼て餘の二義をも含むべし。而して本典は三經差別の義を大体とし。兼て一致の義を明せり。總序及び化卷要門下の文見るべし。和讃は三經一致を大体として。其差別の義は都て大經讀の中に明し玉ふ。上來三經の扱略辨す。又三經差別義の詳論は三往生の下に譲る。

問ふ三經に種々の選擇を明す。先選擇の義相如何。答ふ三經に亘りて汎く選擇を明かすと雖も。其源は第十八願一法にあり。其一法の選擇が三經に亘りて。釋迦章提諸佛云云となる。選擇の言は大經異譯の莊嚴經に出で。正依經には攝取とあり。本願章に選擇と攝取とは其言異にして其意一なりと釋す。

選擇は取捨の義なり。此取捨に付て一往再往の義あるとも。本願章の所明にして。一往之を云へは四十八願に通ず。施惡の國土を捨て、善妙の國土を取る。故に四十八願に約して選擇を論せずと明すが如し。第十八の一法に具する所の徳と四十八願と開くが故に。其開説の上に約して。義相を論ずると一往といふ。再往尅論すれば。選擇は唯十八の一法にして。多々の選擇なし。何となれば選擇の要は捨自力取他力にあり。已に本願章に問答を設けて此義を釋してあり。彌陀の選擇は彼も取り此も取るを寄せ集めて本願としたるに非ず。唯一專稱佛名とある名號の一法を取るに足れり矣。名號には勝易の二義あり。萬徳圓滿して不足なきが故に勝也。自力回向をからず他力無作なるが故に易也。この名號を選擇せば万徳既に盡て餘蘊なし。其名號は十八願の願体なり。寶章に南無阿彌陀佛といふ本願を立てましくて等。又此願の心得るといふは南無阿彌陀佛の心得るなりと。以て知るべし。十八願は名號を以て体とす。然れば此一願にして選擇の義を盡くすが故に。此を再往の義といふ。之に依て高祖選擇本願を十八の別目とし玉へり。問ふ本願章に選擇の

義相を明して。見或國土等とあれば。唯一物を取るにあらず。多土より多物を取るが如し。然れば種々に取合せて超世の法を建立せし義に非ずや。答ふ上辨の如く彼は一往の義なり。一願の選擇を顯はさんとして。多物多土に約して明す。所對の土は多けれども能對の法は一也。一法の徳義を多くの諸佛に對して比顯する也。問ふ諸善超過の名號。彌陀建立以前に諸佛土中にありや無しや。若有とせば彌陀名號超世不共と云ふべからず。答ふ古來多説あり。當國の一義には。此法藏選擇の名號。元より現在各國の諸佛土中にあるべき筈なし。然るに此所現の淨土中にありて選擇すると説くは。非常の義なり。此所現の淨土は。現在諸佛の修顯せる淨土にはあらで。饒王佛が如幻三昧力を以て。二力未分の眞如海の理性を。且く事相に現じたものなり。眞如は方法の源一切諸法の理を具す。此理中に自力他力一切聖淨二門の法理宛然として具するものを。現在事相の上に莊嚴淨土と立て、法藏に選ばしむ。其自力所成の法をすて、他力往生の法を取りたるものは空前絶後にして。法藏特り他力の法理を修顯し玉ふが故に超世無上といふ。問ふ所現の淨土は眞

如の理を事に現せし迄にして。修顯の淨土に非らずとするは。何の文理に依るや。答ふ文に就ていはゞ。大經に法藏撰擇の立ち所に超世無上といふ。若し現在諸佛の土中に有る所の法を以て本願とせば。超世無上といふべき答なし。由是觀之只た是れ眞如理中の選擇にして諸佛未修顯の妙願なることを知るべし。又饒王佛法藏に對して汝能く知るべしと宣ふ。法藏の曰く斯義弘深非我境界也。各國現在の淨土なれば。八地已上の法藏は容易に諸佛國土を見るべし。然るに非我境界といふものは。眞如の理性界は廣大にして因人の揣摩に堪ぬざる所なるを以てなり。以て知る所現の土は二力未分の理を事に現じたることを。問ふ眞如の理に二力二法ある中。彌陀諸佛各其一を修顯すと云はゞ。半面宛を分斷したるものにして。眞如を全領すといふべからず是れ如何。答ふ然らず。諸佛は二力未分の眞如と一の自力に全ふじ。彌陀は之を他力に全ふせしなり。決して折半割據するにあらず。唯へば爰に十頁目の金塊あり。一は之を以て鬼を作り一は佛を作る。鬼佛其相を異にすれども金の自体に於ては。十頁目の斤量に増減なきが如し。利他の化用に於て難易勝劣ありども。其自性法体に於ては眞如の全体を盡せり。

問ふ當相辨義の中。三經に種々の選擇を擧ぐるは何の思召ありや。答ふ上論三手右四行の如く三經一致を示さんが爲なり。即ち三經唯一選擇本願に歸結することを明すなり。問ふ大經に三佛に就て九選擇を明す。此文如何が分別するや。答ふ

大經の中二。初總票二に法藏の下別列。初票に三種ありとは人に約していふ。法に約せば九種あり。人に約すとは法藏と世饒王と釋迦となり。第一法藏の選擇に四種あり。先づ法藏とは彌陀因位の名。漢譯平等覺經には法寶藏といひ。宋譯莊嚴經には法處比丘といひ。智論には法積といふ。皆一人の異名なり。目を解さば法は眞如の諸法。藏は含藏の義。この菩薩一切諸法を心中に含藏せるが故に法藏といふ。菩薩とは具に菩提薩埵。此に勇健衆と譯す。佛果を求むる人勇猛堅固なるが故に。上には阿彌陀如來選擇本願と票して果名を擧げ。今は法藏と票して因位の名を明すものは。因果互に擧て因果不離を示す。論註に願以成力力以成願とあると同例なり。次に別列に四あり。此四は總別あり。初一は總次三は別なり。選擇本願とは第十八願なり。餘願の

德は此中に攝するが故に。次の三は此一願の德を別顯したるものなり。初め選擇淨土とは。十一二十三の三願の德を明す。淨土とは清淨土にして十一願所成の必至滅度の報土なり。土あらば必ず佛あり。佛とは光壽の覺体なり。今は土を擧げて佛を攝し。三願の選擇をば一の土に約めて淨土と云ふ。次に選擇攝生とは攝化衆生のことにして。正く十七十八の兩願を擧ぐ。十七は大行十八は大信の願なり。衆生攝化の願なるが故に選擇攝生といふ。十八願の一を開て五願とし以て選擇の德を明す。次に選擇証果とは。往相回向の証果にして十一願の滅度の果徳なり。然るに上の淨土も十一願。今の証果も十一願として重説に非らずやといふに。然らず。此は廣略二途に約して明したるものなり。上の淨土は廣門示現三種莊嚴の土に約し。今の証果は略門の無上涅槃の義を顯はす。略門涅槃と廣門示現の二途の德に約するが故に。十一願を再出せり。

問ふ世饒王選擇を明すの一段如何が分別するや。答世饒王佛とは法藏の師佛三有八行なり。先名を解せば。世は世間饒は豐饒。此佛世間の衆生を豐饒し饒益なら

しむるが故に世饒といふ。王は尊貴の義にして万人の尊重する所。又世自在王といふ。翻譯の異名なり。世間を自在に利益するが故に世自在といふ。此佛に四選擇を列ぬ。此中前二は上の法藏の分を提出す。後二が正しく此佛の選擇なり。上の法藏四撰擇の中前二を擧げて後二を略す。何故に再出して此佛の選擇とする乎といふに。古來の説に法藏の選擇も。畢竟師佛が三昧力を以て諸佛の土を選擇せしむるに依るものなれば。法藏一人の功に非ざる故に。功を本に歸して師佛に配列した者なりと。此説一往聞ゆれども。此文意を熟思するに。蓋し深き祖意あるならん。抑も大經選擇を明すに弟子を先とし師佛を後にし玉ふものは。則ち選擇本願は超世不共にして三世の諸佛に未曾有なり。饒王佛も暫く師佛の相を現すれども。其實此選擇本願を以て隨自意の法として。之を讚嘆証誠し玉ふ。法藏の選擇即師佛の選擇なることを顯はさんが爲に。法藏の選擇を復た重ねて師佛選擇としたものなり。所説所証の法を票列して。饒佛これを讚嘆し証誠することを明す。次に讚嘆証誠の二は。經文の所依に就て。古來多説あり。或は知其高妙志願深廣の文を以て讚

嘆とし。又た幸佛信明是我眞證の文を以て證誠とす。不可なきが如しと雖も
太た困窮の説たるを免かれず。今日く饒王の選擇證誠は餘處を求むるに及ば
ず。今鈔の次下の文に世自在王佛の誠證讚嘆を追釋して。空中讚言の文を引
て法身の證誠とす。素より三身一具なれば法身證誠するの理あらば。報化の
佛豈證誠せざらん哉。然れば文に付て求むれば空中讚言の經文是なり。饒王
の讚嘆此中にあり。決定必成無上正覺と讚嘆せるは。即ち證誠なり。是に依
て讚嘆證誠を開て二とす。

問ふ大經に就て釋迦選擇の文。如何が分別するや。答ふ先つ文を解さば。釋
迦とは具に釋迦牟尼此に能仁寂默と翻す。能く三界の衆生を愍念するは能仁
なり。煩惱の邪亂を離れて寂靜の悟に住するが寂默なり。生死に墮せず愛見
に陥らず。且つ能仁の大慈悲を生ずるが故に二乘に墮せず。權實二智相即し
たる自利々他不二の徳を嘆して釋迦といふ。如來は諸佛の通號。從如來生の
義なり。彌勒とは此に慈氏と翻す。此菩薩に值遇すれば。能く慈悲を生せし
むるが故に名く。付屬とは付は授なり屬は托なり。釋迦如來一念大無上功

徳の名號を。後佛の彌勒に授托するなり。八万四千の諸行を捨て。殊に彌
陀の名號を取りて付屬するを。釋迦如來選擇といふ。

問ふ觀經選擇の一段如何が分別するや。答ふ此中分て二。一に總票二に別釋
三十五行
初二とは人に約して釋迦と韋提なり。釋迦は能化の主韋提は所化の主なり
。能所に約して二とす。化卷に緣達多閻世惡逆彰釋迦微笑素懷。又總序に然
則淨邦緣熟と明すが如く。元來此觀經興逆の諸人。韋提到限らず俱に彌陀願
海所現の人にして。大經所説の眞實法を正しく下々品の劣機に與へて。無上
の利益を得せしめん爲なることを顯はす。今鈔の所顯亦た其意なり。大經選
擇は法の眞實を説くを以て。大經の主とする義を明す。此觀經選擇は五障の
女人を對機として。本願の生起は下品の機にあることを顯はすが觀經なりと
明す。これ法實機實の次第に約して二經の所顯を釋す。二に釋迦如來等上の
總票を擧げて別釋す。此中二。初釋迦次に韋提なり。初め釋迦の選擇に五種
を列す。於中選擇功德とは觀經序分の意に依る。彼光臺現土の段に殊に韋提
が。我今樂生極樂世界阿彌陀佛處と。諸佛を捨て、彌陀を別選するは。韋提

の自力に非ず。全く釋迦の善巧を以て選ばしめ玉ふこと。本典總序及和讃等の如し。今これを選択功德といふ。然るに淨土を別選したるを功德と名くるは如何といふに。案するに小經に依正二報を説て。成就如是功德莊嚴と結し。論々註には莊嚴功德とあり。今之に准して光臺所現の淨土を功德と稱す。功は謂く功能徳は徳益なり。三種莊嚴に各功德あるが故なり。次に選擇攝取等の三は。觀經正宗分の意に依て明す。攝取は第九の眞身觀に光明攝取を説く。彌陀は定散諸行の行者を攝取せず。選んで念佛の行者を攝取す。此と選擇攝取といふ。然るに攝取は元來彌陀にあり。夫れを今釋迦に約するものは觀經の部主に約するが故なり。攝取は彌陀の神光力なれども。之を能説の主たる釋尊が。定散を説く文中に於て。此彌陀の別益を能説したは釋迦なり。餘行を廢して念佛を立するの意を顯はす。今は能説の經に約して釋迦選擇とす。次に選擇讚嘆は下上品の經文に由る。文に十二部經を聞きたる聞經の善を讚せず。念佛を讚じて汝稱佛名故我來迎汝といふ。是亦た化佛の讚嘆なれども釋迦の能説なれば部主に約して。釋迦讚嘆といふ。次に選擇護念と付屬

の二は流通の文に甲る。文に觀世音菩薩乃至生諸佛前とあるは護念なり。汝好持是語等は付屬なり。第二に韋提撰擇とは所被の機に約して明す。韋提は此に思惟と翻す。夫人とは弘く妻女の通稱なれども。別して皇后に名く。選擇淨土とは。釋尊韋提の爲に光臺に於て普く諸佛の淨土を示現したまふにより。我今樂生極樂世界と。諸佛淨土を捨て、彌陀の淨土を取る。之を韋提選擇淨土といふ。彼の選擇は但莊嚴殊妙を指すにあらずして。四十八願所成の他力得生の土を別選せしなり。序分義欣淨緣第七科の釋意をみよ。然れば選擇即ち廢立にして。捨自力歸他力にあり。化卷_{二十}に依韋提別選正意開彌陀大悲本願との玉ふ。次に選擇淨土機とは。古來二説あり。一義には韋提は心地觀經の說に依れば。大菩薩なれども假りに下劣の女人となり。本願所被の機を示して。妙願劣機を救ふことを明す。之を選択淨土機といふ。又一義には經に若佛滅後諸衆生とあるを。化卷に即是未來の衆生往生の正機たることを顯はすとの玉ふ如く。韋提が殊に滅後の機を擧げて。釋迦の開説を仰くもの。濁世不善の未來の機を擧げて。彌陀の本願を説かしめたるは。即ち劣機を

選び出して。淨土の正機たることを顯はす。之を選擇淨土機といふ。二説の中後義を以て經文に准すと知れ。

問ふ小經選擇の一段其科釋云何。答ふ第三に小經選擇を明す。此中二。初總明次追釋す執持三等の文なり。初中又二。一に通標二に勸信二者等の下は別釋。選擇集の終に三經に入選擇を出だす。其小經に就ては唯選擇證誠の一を擧ぐるのみ。此は證誠の一に餘を畧攝せしなり。今は開て五雙とす。五雙とは勸信等の五に各々二種あり。依て之を五雙十雙と云ふ。此五雙の中正しく宗となるは中間の三なり。前後の勸信と難易とは。勸誠を以て起結したるなり。難易は疑情を難として疑を誠ひるにあり。諸佛の證誠は衆生を勸誠するにありと顯はす意なり。御消息集に。諸佛稱名の願と申し諸佛咨嗟の願と申候なるは。十方衆生を勸めんが爲めなり。又十方衆生の疑心を止めん料とさこへたり等とあり。却說中間の三は初の證誠は總にして次の讚嘆護念は別なり。證誠は機法合說證誠にして。上の大經法を觀經の實機が受けて往生することと證誠す。此證誠が即ち讚嘆なり護念なり。讚は法にあり護は機にあ

り。證誠の所に於て此二義を具するが故に證誠を總といふ。證誠とは誠實を證明することなり。即ち法義を讚嘆し信の不退轉を護念するの義あり。一の證誠が法に約すれば讚嘆。機に約すれば護念となる。問ふ上の大觀二經に准すれば。五種に各々選擇の言を置くべし。今是れなきは如何。答ふ古老の説に小經には諸行の方便を説かず。唯名號の眞實法斗りを説くが故に。選擇の言を置かず。又方便眞門はあれども今は隱顯並へ明すが故にと云ふ。此說顯る惟むべし。何となれば此一段の釋義は三經一致を明かすを要とす。何ぞ小經のみ隱顯並明の理あらん。既に小經に諸行を以て少善根と廢し。念佛を多善根と立す。諸佛之れを證誠し玉ふ。是則ち選擇證誠に非らずして何ぞや。故に吉永も選擇證誠との玉ふ。今私に曰く。是れ自然の畧なり。上の二經に准例して知り易きが故に。多辨を要せざるなり。難易とは下判の如く。疑は難にして信は易なり。即ち誠疑の言なり。問ふ二勸信等如何が分別するや。答ふこれは別釋なり。此中五段。初に勸信に二とは釋迦と諸佛となり。一には自證知見に依て勸む。二には他の佛説を引て勸む。これを釋迦諸佛に各二

ありといふ。自證知見とは自ら理を證りて其所證を以て衆生を勸む。我見是利故説此言とあるが即ち是なり。又他佛の證誠を引て勸むるは六方段是なり。此故に釋迦の勸信に自ら二義あり。諸佛にも亦た釋迦の如く二義あり。二に證誠二等とは功德證誠と往生證誠なり。此二實は一なり唯義に約して二とす。經の序分に眞實之利と説くは往生の利益なり。流通には大利無上功德と説く。又小經に我見是利と説き不可思議功德と説く。換言すれば凡夫をして報土に往生せしむる功德なり。即ち讚偈に十方の諸佛往生を嘆し彌陀の功德を稱せしむとあり。然るに又功德と往生とに分つものは。功德は法の自体に約し往生は衆生の所得をいふ。一は法体の所有に約し一は其力用を蒙むる邊に約す。小經に聞説阿彌陀佛乃至即得往生と説く。夫れを不可思議功德と讚嘆せるなり。一の證誠が往生と功德とに向ふべき。義の左右あるに就て分て二とす。問ふ證誠を惣とし讚護を別とす。然るに別釋の處には。讚護は釋迦諸佛に通して明す。其總たる證誠を諸佛に限りて釋迦に通せず。總別の相違如何。答ふ證誠を釋迦に通せざるものは。此土を主として他方に望むに約す

。釋迦は正しく此土の教主。彌陀の本願を能説するの人なり。他方の諸佛は之を證誠するの任たり。能證所證の故に諸佛に限りたるなり。次の護念讚嘆と釋迦諸佛に通じて明すものは。此土他土互に主伴能所となりて。化儀を成する義なり。此れは中央の彌陀土より十方を望むに約す。讚護の二は釋迦諸佛に通して明し。證誠の一は此土より他土を望むに約す。證讚護巧みに互顯したるものなり。上の總たる證誠より別を望むときは。讚護も共に諸佛に限りて釋迦に通せず。總たる證誠を別釋した者なるが故に。又次の別たる讚護を釋迦に通じてあるより見れば。上の證誠も亦た釋迦に通するの義あることを顯はす。總別互顯の釋とするが義疏の説である。問ふ護念とは何の義ぞや。答ふ護念とは新譯經に攝取と説く。護とは守護の義又擁護の義。念とは憶念なり。行者を守護し憶持して捨てざるを云ふ。此護念に執持發願の二あり。執持護念は小經に執持名號と説て。釋迦諸行を廢して唯名號を勸發す。執持は一心の異名として本典に明かせり。化卷に執者心堅牢不移持者名不散不失執持即一心と。可知。此執持一心を勸發する釋迦に約して釋迦の護念とす。次

に發願護念とは。經に諸佛の護念を説て。己發願今發願等と説く。異譯の稱讀經には若己發願若今發願乃至恒沙諸佛所證誠とあり。是等の文に依て。發願護念は諸佛に約す。發願も亦た信心の異名なり。無疑の信心に淨土を發願するの義を具す。義具に約して信心の異名とす。執持鈔に歸命の心は往生の爲なれば。亦たこれ發願なりとあり。可知。經に當信是稱讚不可思議功德と説くと。後に發願とせるも信の異名なり。然るに今執持護念を釋迦に約し。發願を諸佛の護念とするは如何といふに。執持も發願も共に信心の異名なれども。執持の言は聞説阿彌陀佛等と釋迦勸發の所にあり。發願の言は諸佛稱讚勸發の處にあり。即ち文の所在に約して分ちたものなり。問讚嘆とは如何。答ふ四に讚嘆を明す。小經に釋迦專ら彌陀の依正功德と説て。成就如是功德莊嚴といふ。これ釋迦の讚嘆なり。又六方の諸佛各國に於て證誠するは。是れ諸佛の讚嘆なり。如我今者讚嘆阿彌陀佛等の文。可知。この釋迦諸佛の讚嘆に各二あることは。上の勸信に二種あるに准知せよ。問ふ今證讚嘆と三種に分つもの。經文の説相に於て元來三種あるや。答ふ文説に三種の別なし

。唯一音聲の説法に三の義用あるなり。約めて云は、願力攝取の證實を説くにあり。其證誠の一が彌陀に向ふては讚嘆。行者に向ふては護念となる。讚嘆の二は一證誠の義用なり。問ふ證誠即護念なりや。又護念と證誠は其相別なりや。答ふ諸佛の證誠。信前の機に約せば證誠となる。決定往生を證して勸信するが故なり。又信後の機に約せば護念となる。諸佛の讚嘆を聞て。彌益に身の冥加を喜び深信の徳用を知るが故に護念となるなり。一の證誠が所望に隨て證護の二用を成す。禮讚四丁に云何名護念乃至證誠此事故名護念經とあり。証護其實一なり。難易二者等。第五に難易を明す。經に一切世間難信之法とあり。一往文を見れば今の難易と云ふは。彼の經文を釋するに似たれども。決して然らず。經文は一切通途の諸經に望めて彌陀法の超過を示す。即ち通途の法は因分の法にして因人の信解すること易し。彌陀法は果分難思の法なるが故に。因人の智を以て信解すること能はず。大不思議の法なりと示すなり。而して今の難易の判は信疑廢立にして。自力疑心を滅め他力易信を勸發せし者なり。經文では不可爲少善根福德因縁に當る。彌陀の報土は自力

人の往生し難し。故に難は疑情といふ。他力信心の人往生し易し。依て易は信心と判す。法事讚に此經文を釋して。極樂無爲涅槃界隨緣雜善恐難生と云ふ。今此意に依て難易を判す。上來小經選擇を明かすに。勸信を初とし難易を後にす。是則ち勸誠を以て超結するなり。

問ふ執持三等の文如何が分別するや。答ふ二に追釋なり。此は上の護念の下五丁右一行に明すべきことを此に出して追釋す。何が故に追釋するかなれば。執持と發願とは意一致にして信益の速疾を顯はすなり。已今當は過現未の三世なり。三世の衆生各速疾に往生す。是れ他力の信益なり。經文では已今當の言。發願の處にあり。然るに今執持に已今當を明かすものは。執持發願一致にして共に信心の異名たることを明す。

問ふ法事讚に就て三往生の義を明す。其義如何が解すや。答ふ此は三經に一致差別の二途ある中。一致の義を明かすこと上の如し。今此一段は三經宗別を票じて權實廢立を明す。此文義を分別せば初に票次に釋。法事讚は善導の作にして法事勸行の式を示すものなり。三往生の目は彼の上卷の往生業の文

に出たり。此一段を分別するに先三往生の目を釋し。次に所依の法事讚の意を辨せん。三往生の釋名に異説あり。義疏には因の得失に約して三目を立す。機法共に是なるが故に弘願の往生を難思議と嘆す。要門は非本願たる諸行を以て往生に擬し。機法共に非なれば雙樹林下往生といふ。雙樹林下は一代の結經たる涅槃經の説處なれば。諸行の説處を擧げて諸行往生を顯はす。眞門は教頓機漸。法に就て云へば万行出過の念佛なるが故に。法を嘆じて難思と標す。機に約して論せば自力心を以て回向す。其機の失を標して議の一字を缺ぐ。一字の具缺に就て教頓機漸行專心雜を顯はす。一字褒貶春秋の筆法に似たり。此を難思往生といふ。三經往生文類に德號によるが故に難思往生と申すなり。不可思議の誓願を疑惑する罪によりて難思議とは申さぬとあり。又一義に難思議往生とは眞實報土の往生を顯はす。極劣の凡夫直に眞實報土に往生し。往生即成佛なるが故に此を難思議往生と嘆す。和讃に難思光を嘆じて諸佛は往生嘆しつゝと云ふが如し。難思は心に約し議は言説に約す。思慮言説共に絶つをいふ。此を大經の宗とは宗は尊崇の義。一經の宗主とな

ると也。雙樹林下とは化土の往生を明す。化土の人は佛入滅の相を見るが故に。雙樹林は化身入滅の處なれば。釋迦入滅の處を擧げて化土の往生を顯はす。此二名は共に果に就て得失を判す。次の難思往生は因に約して得失を判す。若し果に就て論せば要眞共に化土往生なれば雙樹林下と名くべし。因に約して論せば教頓機漸。法は難思なれども機は疑心自力なり。其中間に居することを顯はして難思往生と判す。右二説の取捨情に任かす。問ふ三往生の目法事蹟に出でたれども。之を三經に配して三經宗別とすること文に於て見難し。高祖何れの處に着眼して三經宗別の義を判じ玉ふや。答ふ法事蹟上三紙已下文三段あり。願往生と往生業と敬白是れなり。此三段の文を相照して三經宗別の義を判することを知る。終南は元と要弘二門の扱にして。念佛諸行廢立を顯はし。觀經の正意を開顯するを務とす。更に念佛に於て眞門の一科を立るは。後の高祖に讓て之を顯然と談せず。三經宗別の義は唯た文意に之を含んで表面に顯はれざるを以て。甚だ見難し。高祖其微意を探りて宗別の義を立つ。其義とは願往生の所に彌陀釋迦諸佛の三佛を出し。往生業に三

往生の目を列らね。敬白の文に三經を出だす。敬白の文より上の兩段を照してみれば。三佛は三經の經主なり。大經は彌陀觀經は釋迦小經は諸佛と各部主の司る所あり。而して中間の三往生亦た三經に配すべき義准知すべし。敬白の文に大經は彌陀の願力を説き。觀經は定散三福を宗とするを以て。既に二經の所詮眞假の二因別なること明なり。之を以て三往生を望めば。難思議と雙樹林下とは果の別なること可知。難思議は果を嘆するの目なれば。眞實報土の往生を顯はす。之に對する雙樹林下は化身入滅の處なれば。化土の往生を顯はす。然れば此二名は方便眞實を判じたるものにして。又自ら大觀二經に配することも明なり。是を以て難思往生は難思議に似て難思に非らず。雙樹林にも非らざる一種の別目を立つるの意。二經に准じて之を小經に配すべきこと道理炳焉なり。如此三段の文相照して三經宗別を着眼し玉ふ者也。問ふ大觀二經に要弘眞假あること共許す。然るに小經を以て眞門とするも事蹟の上に見難し。何となれば若し小經を以て眞門を立る思召なれば。宜しく小經の生因段を引文すべし。さなくて敬白の文には諸佛證誠を以て小經を明せ

り。固より證誠は方便に涉らず。弘願の別益なるべし是れ如何。答終南は諸師の誤謬を指定して。要弘廢立を主とす。眞門を別開して念佛に於て更に方便眞實あるを論したらんには。交互錯雜して念佛諸行廢立に不便利あり。依て眞門を要門に攝して。小經に眞門を別開せられぬが家柄なり。故に今三經宗別を明かせども。小經に於て眞門を立ることば。微意に之ありて文に顯著ならず。則ち僅に證誠段を引て辨成し玉ふ。僅に證誠段を引くと雖も。總して一經を擧ぐる意なり。固より正しく眞門の立て處は。若一日若二日の生因段にあれども。之を依用せられざるは。蓋し深意あること如斯。

問ふ大經言等の一段は如何なる義を顯はすや。答當相辨義の中。三に饒王佛五丁右六行の選擇を追釋したるものなり。何故に此追釋を用ふるかなれば。選擇本願は一切諸佛の隨自意本懷の法たることを顯はす。上に饒王の選擇を擧ぐれども。人或は思はん。饒王は應化の佛なり。化身の證誠は隨機應他の説にして。眞實の證明に非るべしと。是に於て此追釋の必要起る。この本願は曾に饒王の證誠のみに非らず。報應化三身の佛同く讚嘆する所なりと顯はす。此中初大經

等は標。次法身等は釋。三身の名義は佛土の下に於て釋すべし。問ふ空中讚言の文を引て法身の證誠とするに就て。古來異論ありと聞く。如來會の經文には空中讚言等の事は。全く天衆の所爲の如く説けり。而して之を法身の證誠とするは如何。又た法身は無色無形の理佛なり。無相の佛が聲に出して讚するの理由なし。是れ如何解すや。答ふ大經の文四十八願の下に重誓偈あり。此は結誓乞證の偈にして。法藏菩薩誓を結して諸佛の證を乞ひ玉ふなり。其時三千世界震動して天妙華を雨らし。空中に讚言ありて本願の成就すべきことを證す。此文地動雨華と空讚との二事ある中。初地動雨華は全く天衆なるべし。法藏精神の感する所なり。次の空讚は天衆の所爲にあらず。何となれば佛を除て以外は。斯不可思議の大願を保證すると能はざるが故に。如來智惠海乃至唯佛獨明了と説くが如し。彌陀の智願海は人天二乗の非所測たり。然るに之を證明して決定必成と云ふは。證理成覺の佛たること道理必然なり。假令天衆の讚言とするも。佛の加被力の然からしむる所。由て此を法身證誠といふ。又法身理佛は無色無形なり。而かも讚言するは如何といふに。高

祖深く佛意に悟入して。彌陀の本願は三世十方の佛隨自意本懷たることを知り。之を有縁の機に知らしめん爲に。空讚の經文に寄せて眞如理中に無説の説ありて。十方の諸佛彌陀の本願を證誠するの理を顯はすにあり。理佛が讚嘆する發言の有無に拘はることに非らず。釋迦も大經を説くに當りて。彌陀三昧に入て是故我法と説く。過現未の佛。佛々相念して彌陀法を説くには必ず共に彌陀三昧に入るなり。般舟經に三世諸佛依念彌陀三昧と説くを以て知るべし。一切の佛自證の根源。彌陀の本願を以て正意とするが故に。法身理佛も彌陀法を贊嘆するの理。具することを顯はさんが爲に。空讚は何者の發言にもせよ。此經文に寄せて釋顯し玉ふ。問ふ報身證誠の義如何。答ふ古説に讚佛偈の十方世尊智惠無尋の文を以て。報身の證誠とす。今日く然らず。別に文を擧げて論することは殆んど徒勞に屬す。三佛三身一致なれば。其本門たる法身に於て證誠の義あれば。報化の證誠は言を俟たず。高祖別に引文せざるにて知るべし。唯一空讚の文を以て。三佛の證誠なりと顯はす。化身の證誠も同例なり。

問ふ就佛土以下の一段如何が分別するや。答ふ上は廣く教相を明し。己下は五下二行佛土を分別す。此中二。初總標次別釋就佛有四種等なり。別釋の中亦二。初明佛身次明佛土。初中四身を擧ぐ。經論の中に佛身を分別するに開合不同なり。大乘義章十九十九法苑義林七七止觀八十五等の如し。合の極は唯一佛身也。或は眞應二身とし報應化の三とし。法報化の三とし。又法報應化の四とす天台等の如し。高祖此處に四身を列し玉へども。上下の文に照すに全く三身の扱なり。應化の二は一体の異名。義の所顯に約して分ちて二身とす。何となれば上に證誠を明すに三身とし。又下に就應化と票して。應化を合して其別釋なし。是故に四身を列せども三身の扱ならん。問ふ佛身の名義如何が解すや。答ふ先名義を釋せば。法身とは法は持自軌範の義。其自体を持して物の解を生ずる。即ちノリテホンとなるをいふ。色法なれば心法とならず。心法ならば色法に轉せず。此が持自の相なり。而て青きものは青しといへる其自体を任持して。青しといふ手本になるが軌範なり。之を法の義とす。身とは依聚の三義あれども。今は聚の一義にて云へば。四大五蘊積集する所を身

と云ふ。今法身に於て身の字を解さば。一真如法性の理中に萬法の理を積集してあり。其方法の理性を圓明に覺悟したる所を法身と名く。能證の智に万法を積聚するの義あり。此を法身と云ふ。此法身の位は理佛にして無色無形なり。此を佛身の体とす。報身とは報は酬報の義。無漏願行の真因に酬て覺体を現するを報身と云ふ。即ち法身上り垂るゝ所の有形の佛身なり。或は報身を應身と稱するともあり。此時は願行に應答するの義にして、報應は一体の異名なり。玄義分二乘門に報應二身眼目異名と釋す。今は報身の外に應身を出す。此と彼とは別なり。報身の外に出す所の應身は化身のことなり。次に應化身とは若し四身門に約すれば。其名体二なり。一期機に應ずる佛を應身とす。釋迦八十年衆生を化すが如し。又隨時現起の佛を化身とす。大經所說の華光出佛は無而忽有と現する。これが化の義なり。淨影義疏十九に王宮所生道樹現證を説て應身と名く。此應身より無數の化佛を出だす所を化身と云ふと釋してあり。是等の意に依れば應化別なり。是は通途四身門の判釋なり。今鈔は上辨の如く。暫く四身の名を列せども。前後の文に准知するに。全

く三身の扱に歸す。故に應化同一に標じて別釋せず。義の所顯に約し一体に二名を施す。一切の機縁に應ずるを應身とし。自徳を隱覆して變化の相を現するを化身とす。畢竟一身の異名なり。

問ふ二種法身の義相如何が解すや。答ふ就法身有二種等の文は。佛身を別顯五行左八行する中。法身に就て二種を分別す。此二法身の目。今家相承の上では論註下

二十淨入願心の釋に出でたり。元とこの二法身の目は瓔珞經央娑經等に出で、諸宗の人師此目を扱ふに。或は悲智二門とし又は理事に分ち。又は權實二智とすれども。論註の意は悲智に約して。彌陀の淨土廣略相入するの義と顯はすにあり。三種莊嚴一一皆願心莊嚴の土にして。別顯の大悲より生するを方便法身とす。其莊嚴の當休略門一法句に相入して。唯一清淨涅槃相なるを法性法身とす。如斯廣畧相入することを顯はすに就て。斯の二種法身を分別してあり。然れば悲智二門に約する意なるべし。又文意證文等より同へば法性法身は無色無形の理佛。方便法身は有色有形の事佛として釋し玉ふ。文に曰く法性法身とすは色もなし形もましまさず乃至此の一如より形を顯は

して方便法身と申すとなり。是則ち理事を以て二法身を釋し玉ふ。一往釋相に付けば論註は悲智に約し。文意証文は理事に約して。義の左右あれども對論すれば各兩義あるべし。法性法身は理事に約せば理佛。悲智に約せば智佛門なり。方便法身は報身佛として。理事に約せば事佛。悲智に約せば大悲の相なり。次に名義を釋せば。法性とは法は階法性は依碍の義。眞如は諸法の體質なるが故に法性といふ。此法性眞如を剛明に覺悟したるを法性法身と名く。理佛にして身と名くるものは。一切諸法の功德を能證の智に積集したるが故に身と名く。方便法身とは。論註に正直日方外己名便。正直とは平等の大悲なり。外己とは自利を後にして利他を先にする義なり。止觀に回向令成妙因改名善巧文。今この方便とは權假の義に非ず。則ち善巧方便にして。衆生攝化の巧妙なるを方便といふ。今鈔及證文等の方便法身は全く彌陀の別德にして。決して諸佛に通せず。一往彼が當分にては方便の目通すれども。再往論すれば回向して妙因を成するの義は。唯是れ彌陀の別德なり。問ふ此二種法身は諸佛に通するや。將た彌陀に限るや。答ふ古來二説あり。一義には

一往彼に通じて再往此に屆るとす。論註交意の如し。方便の目は利他の善巧を歎する者にして。獨り彌陀別願の大悲に名く。此方便法身に即する法性法身なれば。法性法身も亦諸佛と同一ならず。利他勝妙なれば自利も亦超世なり。如實に無上の果を究めんと欲せば。彌陀願力に依らざるべからず。三世諸佛依念彌陀三昧成等正覺とあるを以て可知。法性法身も彌陀に屆る故に。今鈔にも報化佛の處には釋迦十方に通釋すれども。二法身の處には彌陀に屆りて諸佛に通せしめすと云云。又一義には法性法身は固より諸佛に通す。方便法身は彌陀に屆る。此義禮讚に明かなり。諸佛所證平等是一乃至以佛力來收非無因緣と。此意は所證の一如に於ては諸佛彌陀同一なり。其利他を論すれば別願所成にして彌陀は諸佛に異なりと釋す。二雙四重の判亦然り。自他二力の別はあれども彼此共に眞實にして頓教なりと判す。是平等是一の邊なり。而て其一如より示現したる攝化の起用に於ては。勝劣ありて彌陀は別願の善巧力を有す。故に方便法身は諸佛に通せず。然るに今鈔に此二法身の下に釋迦十方等の註釋なきは。法性法身は諸佛に通すれども方便法身は彌陀に

同。二種一具の間に於て事錯雜するが故に註釋せずと云云。此は石泉の義なり。前義は聖道無得道を立て彌陀を久遠の古佛とし。後義は聖道淨土其法體は彌陀も諸佛も所證平等なりと立す。斯れは一家の大論なれば今は擧す。就報身等は報身應身の別釋の文なり。上に准解せよ。

問ふ佛土を分別する文解釋云何。答ふ佛土を釋する中に二。一に票二に釋。

平右六行

初に土とは身を安んずるの處に名け。載育を義とす。物を載せて生育せしむるが土の義なり。今土に四種を票すれども其體は三なり。義に約して四種とす。上の三身の處に辨せし如く。應化の土は義の所顯に依て二名を出すのみ土體は一なり。身に四名を擧ぐるに准して土も應て四名を列ね。就報土有三種等とは二に解釋なり。此釋の中法身の土を略し。又後に化土を明す處に釋迦十方を擧す。此は如何と云ふに。三佛一致なれば報土が三佛に亘れば。法化亦た三種に亘ること知るべし。報土に三佛を出すに准して法化に各三種あることを知らしめたるなり。問ふ法身の土と云ふ時は。身と土と其義別如何。答ふ一の理中に於て義の所顯に約して身土を分つ。能證の智に諸法の理を

積聚する邊を身とし。諸法實相の一理に心を安住する邊を土とす。身土共に無色無形なれども義に約して名を立つ。問ふ就彌陀化土有二種等此一段の文如何が解すや。答ふ初に化土の分齊を辨し。次に正く二種の名義を辨すべし。上に應化の身土二名あれども。其體一土にして義に従て二名を出すものなるが故に。釋に至て應化を合して別釋せず。機の感見に應する邊に約して應身土と云ふなり。自徳を隱覆する邊に約して化身土といふ。其化土三佛に亘れども今は別して彌陀の化土を釋す。彌陀の眞化を論するが一段の主義なるが故に彌陀の化土といふ。化は報土に對する言にして變化の義なり。一の眞報土に於て機感に由て報土の有體を見ず。此を化身化土といふ。今此化土通途に論する所の化身化土と異なり。安樂集上は三身三土を明して。清泰國の彌陀を以て化身とするが如きは通途の化身なり。即穢土應化のことなり。今家所論の化身化土は穢土に應化するものに非ず。一報土中の眞化なり。眞佛土卷_{三十}夫按乃至眞假皆是酬報大悲願海也。安樂集_九彌陀の報土に於て眞報化報を明せり。是等の文に於て通途所論の化身に望むときは。彌陀の化身土は

其分齊大に異なりとす。次に文義を釋す。就彌陀化土有二種とは票。一疑城等は釋す。此二種といふは經說の所在を異にし。自ら義の不同あるによりて二種の目を列ぬ。土体二なし。若其果別に就て論する時は因千差にして果も万別なり。次に釋中。疑城胎宮とは疑城の目は漢吳兩譯の三輩の經文より取る。狐疑猶豫止七寶城の文を所依とす。胎宮とは正依大經にあり。化土と疑城と名くるは。疑城の人の群集する處なるが故に。城は防禦の義にして敵を防ぐ處の名なり。疑心の人群集して煩惱の賊を防ぐの意なり。胎宮とは胎生の宮殿なり。化土の行者は子の母胎に處して自在なるに喩ふ。所謂不見三寶の厄を受くるが故に。宮殿とは至尊所居の名。化土といへど三界に異なり。吾人所居の故に宮殿の美稱あり。宮殿は報土にもあれども。殊更に宮殿の中に生ずると云ふは。是れ不自在を顯す。城は果に約し疑は因に約す。疑城の人の處する所と云ふ義なり。胎宮は果に約す。合釋すれば疑城即胎宮の持業なり。次に懈慢邊地とは懈慢の目は處胎經に依る。化卷に引文せり。邊地の目は大經に取る。懈は懈怠慢は懈慢なり。自力心は心間斷するが故に懈怠

といふ。信機信法なきが故に懈慢といふ。是れ因に約して名を立つ。邊地とは中土に非るを標す。是れ果に約して立つ。弘願の人は極樂の中土に生し要眞の人は中土に生する能ざるが故に邊地といふ。果の勝劣に就て中邊の差別を成す。土体二なきなり。合釋せば懈慢行者所生の邊地なりと顯はして依主釋なり。問ふ如此名義唯一土の異名と擧ぐるに似たり。何故に二種とする乎。答ふ大經と處胎經との所說。且く其相異なる故に二種とす。大經は胎生化土の二を明すと雖も土体は一にして。機感の不同に約するのみ。處胎經には西方十二億と説きたれば。小經所說の彌陀眞土の十万億に比すれば。距離大異あり。故を以て二經の異を列するなり。問ふ二經二說の距離の相違は實本とするや。將た別に所顯ありて然るや。答ふ上辨の如く報化の身土全く一にして別体なし。機感に由て不同を見る。然るに處胎經の如く里程の相違を説くもの。大經に邊地と説くと同意にして。報化の果相其位別なるを判して。得失を見易からしめん爲めのみ。問ふ觀經九品の土と大經所說の化土の相と。果相大に別あり。觀經にては化土の人も十方を自在に飛行して上求下化

を成す。大經は不見三寶云と説く此不同如何。答ふ觀經は要門當分に約して説きしものなれば。固より彼の當分に於ては徧至十方供養諸佛と果報を説すれども。報土に相望しての説相に非らず。大經は眞報土に相望して報化廢立を主とするが故に。胎生邊地と貶す。所望不同所願自ら別なり。

問ふ本願一乘已下如何なる義を明すや。答ふ上來教證を顯示し。已下は第二下に行信を辨明す。此中機教と名くるものは行信のとなり。故に教の下に第一希有之行といひ。又眞實の信を受けて一乘圓滿之機といふ。行巻に念佛諸善比況對論と票じて絶對不二之教と結す。又信を明す所に金剛信心絶對不二機と結す。以可知。機教とあるが即ち行信なり。然るに本典の次第に依らず。四法を明すに教行信証と次第す。今鈔は教証を前にし行信を後にするは如何といふに。曰く此は其彼此あるとを分別して。有縁の人に注意せしめん爲なり。先教は言教にして彼の諸佛の處にあり。佛身佛土は當果にして彼の淨土にあり。而て行信は此衆生上にある法なり。若し行信を誤る時は往生の大事を失す。是故に教證を先にし。別に行信の二法を擧げて機教の要を示し。人

をして注意せしめん爲なり。偕機教の名義を解せば。教とは教誨教諭の義。聖者下に向て教示する義なり。機とは關なり宜なり。能く法に契ふ所を機といふ。弘願の機とは弘願に宜しき機。要門の機とは要門に宜しき機なり。各其法に相應する機と云ふことなり。此は受法の機に約して解す。然るに今行信を機教と名くる所以は如何といふに。私に之を按ずるに通別の二義あるべし。通して要眞弘三門に亘りて各行信を機教といふ。其通門に約せば行は所修の法なるが故に。所修の行法は教に依て受くるを以て。末を本に従へて行を教と名く。信は能受の心相にして信の事を又心といふ。即ち共に機の修相に就て論するなり。此義は眞假を問はず廣く三門に通ず。化巻に眞門の行信を判じて教頓機漸といふが如し。又別途門に約せば他力念佛の行は信体流出にして法體名號の儘なり。念佛即名號なる故に之を教と名く。名號は即ち招喚の音聲なり。其教を受くるの機は凡夫虛妄心に非ず。法体の南無が凡心中に滿入して。凡夫轉じて佛身に融するが故に。信心を即ち正定聚機といふ。信巻標の如し。他力の機法は共に法体の所成。機法一體の名號。義の所顯に

從ふて信とも教とも機とも云ふ。所詮一名號の義用の外なし。

問本願一乘等の文義如何が解釋するや。答此已下機教を明す中に二。初通して明し。次に疏云已下は別明。初機教通明の中。本願一乘とは一乘の言は廣く通途に亘る。今は聖道の一乘に簡んで別途の一乘なるが故に本願一乘といふ。本願とは通して四十八別して十八願なり。本に因本根本の義あり。因本の義は論註上^{十四}に釋する如く本之願といふ義なり。四十八皆本願となる。根本の義に約せば願々相望して論するに。余願はみな枝末にして十八願の德義を開出するが故に。十八願獨り根本の願なり。高祖の釋義に本願と單稱し玉ふ者多く十八願のとなり。今亦然り。根本の義に約して十八願を標す。次に一乘とは二乘三乘に對する言。一は無二に名く乘は運載を義とす。載せて所期の處に至るなり。諸法一實相なるが故に二の對すべきなし。一切の諸佛其一如に乗して正覺を成するが故に。一の佛因に依て一佛果を究竟す此を一乘といふ。今別途の義に准解せば因一果一教一機一。具に四一を成す。一の名號を因とし一無上の妙果を証す。是因一果一なり。一の名號機教となるが故

に是機一教一なり。行卷^{三十}に大小聖人重輕惡人同齊^{歸入}選擇^{大寶海}念佛成佛とあり。念佛成佛は因一果一。大小聖人は機一歸入寶海は教一なり。斯の四一の義を以て一乘といふ。次に頓極頓速とは其利益を歎す。頓速は淨土門の當分に約す。共に早きことなり。頓極とは聖道門に相望して頓の至極を示す。次に圓融圓滿とは其如に万德を圓滿して融即自在なるを圓融といひ。功德圓滿して無缺なるを圓滿といふ。証文に萬の德みちく^てかぐる^{こと}なく。功德自在なるを圓融といふと云云。石泉の一義には圓融圓滿は攝機周遍の德を歎す。一切善惡の機を攝して碍へるとなく。無尋なるを圓融といふ。即ち万機一の名號の德に融するの義なり。正信屬に凡聖逆訪齊廻入とあり。圓滿とは他に比顯する義なり。聖道は攝機周遍ならざれども。本願一乘は万機圓かに照して餘蘊なきが故に圓滿と云ふと。今案するに後義少しく穩當ならざるが如し。

問ふ絶對不二之教とは如何が解すや。答ふ絶對の言は源天台に出づ。法華玄義に經の妙法蓮華を釋するに。相對絶對の二門を分つ。曰く相對門とは權教

に對して第五時の圓教を以て妙とす。四時三教の權を盡とし法華の一と妙として權實相對す。又相對門とは餘の二乘三乘等の權教を開會して唯佛一乘の法とす。權として對すべき法なし。汝等所行是菩薩道といひて法華に權界を見ず。法界適く處として法華ならざるなしと云云。高祖此言に依て廣略二典に絶對不二の言を用ひ玉ふ。此絶對の目を釋するに古來二説あり。一義には法華の所談と同く。外に相對を絶つが故に絶對といふ。高祖聖淨二門の扱に相對二門あり。相對門は二雙四重の判の如く聖淨各立して。共に眞實として究竟成佛の法とす。又絶對門は聖道八万の法は皆利他教化地の益なれば。還相回向の法中に攝す。一切諸佛皆極樂界中より示現す。其本を尋ねれば彌陀願力を信して成佛する所にして。三世諸佛依念彌陀三昧成等正覺といふが如し。之に由て彌陀法に相對すべき者なし。法界適く處として誓願一佛乘ならざるはなし。此を絶對不二の教と名く。又一説には今家所談の絶對門といふは。言は法華に取ると雖彼に會する者とは義趣別なり。相對の上に於て絶對を建立する義にして。法界唯一法にして相對法なしと云ふ義にあらず。即ち

諸佛法に相對して超世最勝なるが故に絶對といふ。下の文に專中之專頓中之頓と彼に相對して。之を結して第一希有之行といふ。而て後二教の相對を判するもの即ち絶對の相を釋するにあり。法華の如く待對を泯亡して權即實と開會する義と異なり。元來彌陀の教義は願海より選擇の建立なり。諸佛法を捨て、他方土を取る。隨て釋迦の經説また相對廢立を顯はし。之を受ける所の相承の釋義相對廢立を以て教義の本とす。今鈔亦た然り。絶對とは相對して勝を顯はすのみ。彼の依念彌陀の説は義に由て法義の主伴を論じたもの也。實は三世の諸佛が彌陀法に依て成佛すといふには非ず。諸佛各十七願力に乗じて彌陀を稱讚す。是を以て佛々の本懷と顯はし玉ふ義に約して。依念彌陀といふものなりと云云。此二説の中後義の意に約すれば。不二とは無比といはんが如し。彌陀法に對して並ぶものなきを不二といふ。超勝を顯はすの意なり。問ふ一實眞如已下如何が釋するや。答ふ一實とは諸法一實相なるが故に。眞如とは起信論上_三眞者体非_二偽妄故_一如者性無改異故と。證文に一實眞如と申すは無上大涅槃なりとあり。名號能く無上涅槃に通するの道なるが

故に。一實真如之道といふ。道は能通の義なり。應知とは此二字絶対の上に於て見る意なり。次に專中之專等とは止觀五十四に觀智を歎して大中之大乘中之乘圓中之圓とある造語に倣ふ。化卷に横超の行を歎じて是即專中之專頓中之頓真中之真乗中之一乗とあり。彼此大同小異あり。彼第四句に乗といひ今は圓といふ。この四句の中初の一句は能行の修相を歎じ。後の三句は所修の法徳を歎す。初專中之專とは專修行といふは一往自力に通ず。化卷に就專修有二種一者唯稱佛名二者五專等。五種正行の中に於て専ら一行を修するも一往專修の名を許してあり。然れども實の專修にあらず。實の專修とは自力淨盡の他力念佛を以て專修の至極とす。故に今專中之專と歎す。次に頓中之頓とは自力の頓に簡ふ。二雙四重の中四家の大乗は頓教なれども。斷或證理の故に自力の作あり。他力念佛は願力無作にして斷證は全く佛力の然からしむる所なるが故に。聞名の一念に即得往生す。之に由て頓中之頓と歎す。次に真中之真とは此に二種の相望あり。一には廿願小經の願説も一往真門といへども。自力心を捨てざるが故に實の真門にあらず。彼に簡んで真中之真といふ。二には聖道の實教たる四家の大乗も一往實教と判す。今彼に對して他力眞實の教を眞中之真と歎す。如斯二種相望あるべし。第四句に圓中之圓とは是又聖道の圓教に簡で。別途の圓教なりと顯はす。一乘一實等とは即是絕對の義を結歎す。次に第一希有之行とは此言十住論の地相品に出づ。必定菩薩第一希有之行と云云。過上なきが故に第一と云ひ餘に比倫なき故に希有といふ。次に金剛真心等とは上は行を明し今は行に相應する信を歎す。此一段行信機教を通明するが故に。可知。金剛真心とは語を散善義に取る。彼に回向發願心を釋する下に斯心深信猶若金剛とあり。此は喩に約するなり。金剛は自体に堅固剛勇猛利の徳あり。其体堅くして却て他の障礙を摧破するの剛勇あり。今他力信心も佛智を体とするが故に其体堅固なり。異學別解の人に對して却て彼を摧破するの業用あり故に金剛に喩ふ。亦た金剛は無漏の體なりといふが如きは喩にあらず。直に佛智を金剛といふ。真心とは眞實の信心なるが故に。無碍とは煩惱業障にさへられざるが故に。具に無碍を釋せば二義あり。無碍とは圓融自在の義。盡十方無碍光を体とするが故に。これは法体

ふ。二には聖道の實教たる四家の大乗も一往實教と判す。今彼に對して他力眞實の教を眞中之真と歎す。如斯二種相望あるべし。第四句に圓中之圓とは是又聖道の圓教に簡で。別途の圓教なりと顯はす。一乘一實等とは即是絕對の義を結歎す。次に第一希有之行とは此言十住論の地相品に出づ。必定菩薩第一希有之行と云云。過上なきが故に第一と云ひ餘に比倫なき故に希有といふ。次に金剛真心等とは上は行を明し今は行に相應する信を歎す。此一段行信機教を通明するが故に。可知。金剛真心とは語を散善義に取る。彼に回向發願心を釋する下に斯心深信猶若金剛とあり。此は喩に約するなり。金剛は自体に堅固剛勇猛利の徳あり。其体堅くして却て他の障礙を摧破するの剛勇あり。今他力信心も佛智を体とするが故に其体堅固なり。異學別解の人に對して却て彼を摧破するの業用あり故に金剛に喩ふ。亦た金剛は無漏の體なりといふが如きは喩にあらず。直に佛智を金剛といふ。真心とは眞實の信心なるが故に。無碍とは煩惱業障にさへられざるが故に。具に無碍を釋せば二義あり。無碍とは圓融自在の義。盡十方無碍光を体とするが故に。これは法体

に約して解す。又た用無碍の義あり。則ち一に惑障煩惱にさへられず。二に業障惡業にさへられず。三に外魔にさへられずとの三用あり。海とは徳の廣大なるに喩ふ。

問ふ疏云等の一段如何分別するや。答ふ此上は機教通明。己下は二に別顯す七行右三行。此中二一に教を明し二に眞實淨信心等己下は機を明す。初中又二一に文を引て名を釋す。二に二教對の下は對判して別を示す。初引文に疏云等とは玄義分歸三寶偈及び宗旨門の釋なり。次に讀云等とは般舟讚の文なり。菩薩藏とは聲聞藏に簡ふの言。一切經を判じて二藏とするとは。智度論二瑜伽論廿五俱舍十一に見ゆ。藏は包含の義。聲聞藏には一切小乘法を含藏し。菩薩藏には一切大乘法を含藏す。頓教とは漸教に簡ふ一乘とは佛乘なり。海とは深廣の意。次に讀云等とは瓔珞經は菩薩瓔珞本業經の略にして。二卷あり。此經に具に菩薩五十二段の漸次の修相を説けり。彼れが如きは漸教なりと判す。万劫修行して漸く不退を証するが故なり。今觀小二經の所説は頓教菩提藏なりと判す。此文を引て次上の玄義分の頓教を助顯するの意なり。又此二文

を引くものは上に機法通明の處に本願一乘頓極頓速といふを證する意なり。次に高祖私釋して圓頓者等との玉ふもの上引の二文には其言なけれども。通釋の處に於て頓極頓速乃至圓中之圓等とあるを承けて。頓教一乘といふ處に圓頓の義を有するが故に。圓頓者等の釋を成す。次に脚註の十字は天台止觀輔行一之二に此言あり。高祖此に依り玉ふならん。

問ふ二教對己下如何が解すや。答上は機教總明。己下は對判して別を示す。七行右七行此中二一に略明。二に難易の下げ廣顯。初二教對の三字は標次に本願等は釋なり。二教とは念佛諸行の二法なり。次に本願等と釋するもの他力回向の行を歎す。本願一乘とは通途の一乘に簡ふ。頓極頓速とは得証の速疾を標す。圓融圓滿は因徳の圓滿を歎じて自力の諸善に過ぐることを顯はす。次に淨土等とは眞實の教に對する方便の教行を明す。假門要門共に十九願の釋にして所望に従ふて名を異にす。聖道に對して要門と云ひ。淨土に能通する肝要の門なるが故なり。又弘願に望めて假門といふ眞實にあらざるが故なり。今要門は定散二善假門は三福九品といふものは。蓋し綺語して文を成したるもの。

須らく淨土の要門定散三福九品方便假門の教といふ意に見るべし。問ふ此略明に於て二教對といふは正しく念佛諸行の對論なり。然るに廣顯の對判に於ては難易横豎等と聖淨二門の相對をなすに似たり。廣略不齊なるもの如何。答ふ此は廣略の異にして略には廣を攝し略を開て廣となす。暫く文相に就ていへば。略の所は要弘相對にして明すと雖も。此中には聖道八万の諸行を攝す。何となれば聖道の諸善を定散に攝して觀經に説くなり。故に畧明の所に定散三福といふ中に。聖道を畧攝したるものなり。依て次の對列の廣顯に至りては畧を開て。廣く聖淨二門に亘りて相對す。彼此互顯したるものなり。固より要門の行体を云はゞ。聖道所修の行なり。聖道八万如説に修行せば各利益あり二雙四重教判の如し。若機に約せば末代の劣機難修に堪へがたし。空く流轉することを憐みて淨土の要門を設立す。各是迄の所修の行を淨土に回向せば生死を離れて淨土に至る。此が觀經の教義なり。証文に大凡八万四千の法門は皆これ淨土の方便の善なり。これを要門といひこれを假門と名けたり。此要門假門といふはすなはち無量壽佛觀經一部に説き玉へる。定散二善はな

りどあり。是に依て念佛諸善二教相對するに。初は定散二善の中に聖道の行法を攝して。要弘相對を以て略明す。次は廣く聖道門と開説してある方に就て。念佛諸善の相對を明す。略明廣顯彼此互に顯した者なり。
問ふ廣顯の文如何なる義を顯はすや。答ふ此中二一に列對二に己上等とは結
七丁左四行
示法門の勝劣を顯はすに對目を作ること。經文に其例多し。入楞伽には生見不生見等の一百八對を作る。十住論には度法非度法等の百餘對を明す。問答記の如し。然るに此下の教機に就て六十對を擧ぐ。曰く教に四十二對機に十八對。多くは語を選擇集より取る。就中他處より補助せるものあり。又六十對の中再出するもあり。邪正勝劣の如きは機教兩處に出だす。行卷には五十九對を列ぬ。彼此相望するに。彼に出して此に没するものは。深淺と名號定散と勤無勤と付屬不付屬と機堪不堪と佛滅不滅と利不利と榮賤との八對是なり。又此に出して彼に没するものは。大利小利と有誓無誓と賢愚と好醜と妙處と希常と直入回心との七對なり。如斯出沒互にありと雖も。唯具畧の異にして別に所顯なし。又廣書と本鈔と相望するに其同なる所あり異なる所あり

。其對目多少進退あり彼此異なり。即ち機教共に初後起結彼此同く。教に於て難易を始とし報化を終とす。機に於て信疑を初とし明暗を終とす。又多少進退の不同とは教の相對彼には少く此には多し。機の相對彼には多く此には少し。又布列の次第彼此進退不同なり。本典に教下にあるものを此には機の下に列するがく。進退一準ならず。熟思せよ。

問ふ難易等の對目一一に之を解せ。答已下廣く四十二對を列する中。要は回向不回向對にあり。正く自他二力を區別するは此對目なり。初に難易とは易行品に依る。自力を難とし他力を易とす。此に兩重あり。一には聖淨相對此時は要門は易行中に攝す。十八願の所屬なるが故に。二には要弘相對此時は要門は難にして弘願は易なり。所望に隨て義を異にす。今は聖道要門共に難とする意。何となれば念佛諸行相對なるが故に。本願章に念佛易修諸行難修とあるにて知れ。二に横豎とは玄義分の横超斷四流に依る。横超は豎超に對するが故に此目を作る。横豎も難易と同一往云はば豎は聖道なり。聖淨相望すれば彼は斷或證理の道にして自力の道理を歴て果に至る故に豎といひ。

此は通途の道理を出過せる願力を以て涅槃に至らしむるが故に横といふ。此時は要門も横中に在り。彼に相望すれば要門も十九願力に乗するが故に横と謂へし。而て再往弘願より吟味れば尙は自力回向をすてざる故に。却て聖道の豎中に攝すべし。今は再往の義なり。三に頓漸とは玄義分般舟觀に出づ。証果の遲速に約し自力諸行を漸とし、他力念佛を頓とす。四に超涉とは終南に依る。横超と云へる超に對すれば裏面に涉の義あり。涉は歴涉。字彙に涉は徒行して水を歴るとあり。超に對して歴涉する義と顯はす。諸行は化土に生して地位を經歷するが故に涉といふ。五に眞假とは五會談に念佛成佛是眞宗万行諸善是假門といふ。大經には一代經に對して名號法を眞實之利と説く。是等に依て對目を作る。六に順逆とは終南吉水専ら順彼佛願故といひ隨順佛教といふ。是に對すれば諸行は非本願の故に之を以て往生せんとするは逆なり。七に純雜乃至十に親疎の四は共に二行章本願章の所明による。念佛を正行と判すれば諸行は邪なり。諸行を雜行と判すれば念佛は純一無雜なり。又勝劣は本願章に屋舎の喩を以て示す如く。念佛は一切徳を有する故に勝な

り。親疎は二行章に五番得失を明す中に此目あり。十一に大小十二に多少は多善章に依る。念佛は大善根多善根諸行は小善根等と判す。十三に重輕とは約對章に唯有念佛之方能堪滅重罪餘行不然或有滅輕而不滅重と。十四に通別とは纂釋に二義を出だす。一に念佛を通とし諸行を別とす。選擇集に念佛は易なるが故に一切に通す。諸行は難なるが故に諸機に通せず。二に諸行を通とし念佛を別とす。選擇集に人天及び三乘に通し又十方淨土に通すといふ。故に諸行は通なり。次に念佛を別と判してあり。義疏には二義の中後義を近しとす。諸行は通途の法なるが故に通とし。念佛は別途の法なるが故に別とす。十五に徑迂對十六に捷遲對の二は樂邦文類に念佛を歎じて八万四千法門莫如斯捷徑とあり。徑は迂に對し近道なり。迂は回道なり。捷遲といふも其意同し。徑迂は所修の法に約し捷遲は能修の益に約す。十七に廣狹は摸衆記に本願章の文を引く。諸行を以て本願とせば往生を得る者少く。往生を得ざる者多し。普く一切を攝せんが爲に唯稱名の一行を以て其本願とすとあり。廣狹の言なしと雖も義廣狹を顯はすにあり。此文に依て對目を作る。又大經

に彌陀智願海深廣無涯底と説く。法体深廣なるが故に廣といふ。餘行は此に反す。十八に近遠とは二行章に依る披て見るべし。十九に了不了とは究竟顯實を了といふ。故善義に若佛所説即是了教菩薩等説盡名不了教也とあり。念佛は是佛隨自意の正説。諸行は隨他の法なり。廿に大利小利廿一に無上有上は利益章に出づ。大利は小利に對し無上は有上に對すとあり。問ふ此大利小利と上の大小と何の差別あるや。答ふ大小對は法徳に約し大利小利は機に受くる利益に約す。廿二に不廻々向は二行章に見ゆ。諸行は自力の故に修して淨土に回向す。念佛は他力なるが故に衆生の方に回向を用ひず。願行は佛より回向し玉ひて行者は之を領受する斗りなり。故に衆生よりは不廻といふ。廿三に自説不説とは摸衆記に三義を出だす。一には二尊に就て自他を分別す。玄義分に二尊二教を分別するに安樂の能仁別意の弘願を顯彰す。釋迦は韋提の請に依るが故に。廣く淨土の要門を開くといふ。念佛は彌陀隨自意の法なるが故に彌陀自ら説く。縱令釋迦之を説くと雖も融本の釋迦にして。念佛三昧に入りた後の釋迦なり。故に六經に釋迦自ら彌陀法を引受けて我法と云

へり。之を以て彌陀の自説といふ。諸行は隨他の法なれば彌陀は之を釋迦に譲りて自説せず。二に隨自隨他の義。念佛は自の本意なるが故に自説といふ。自の所懐を説くの義なり。諸行は他の意に隨ふて已を得ず説く故に他説といふ。三には五説に約して分別す。五説とは諸經の説に五種あり。一には佛二に聖弟子三に天仙四に鬼神五に變化の説是なり。他力念佛の如きは因人の所測に非ず。唯佛のみ之を知る。佛の自説なるが故に自説といふ。諸行は因分の法にして菩薩にても能く説くことを得べしと。三義の中初義に従へ。廿四に有願無願とは此は本願章に彌陀如來不以余行爲往生本願等とあるに依る。餘行は非本願の故に無願なり。念佛は本願の故に有願なり。廿五に有誓無誓は願に若不生者の誓あり諸行には之れなし。廿六に選不選とは本願章に具に選擇の義相を辨じて。諸行は選捨の行なり念佛は選取の行なりと。廿三已下廿六迄の四對は彌陀に約して相對す。廿七の證不證等の三は諸佛に約す。念佛は諸佛讚證護し玉へり。諸行には此益なし。證不證は化讚章讚嘆章に依る。證不證は證誠章に依る。護不護章は護念章に依る。卅に因明直辨とは要集

下本に餘行は機に隨て因に其徳を明し。往生の事を説くが故に因明といふ。正く往生の要を直に辨する念佛を以て直辨といふ。卅一に理盡非理盡とは念佛證據門に依る。念佛を以て正因とするもの道理を盡すが故に理盡とす。卅二に無間有間とは二行章に依る。念佛の行者は憶想間斷せず。餘行は自力なるが故に他想間雜す。卅三に相續不相續とは論註の一心の釋に心々相續無他想間雜といふ。又自力の三不信を明して心相續せずと云ふ。問ふ上の無間有間と此相續不相續と所顯如何別なるや。答ふ此は暫く義の左右にして其所顯別なし。其左右とは無間は他法の離沓せざるに約す。相續は自法の改變せざるに約す。一他方法の改轉せざるは相續にして、餘の自力想の來て間斷せしめざるは無間なり。卅四に退不退とは退は退失なり。即ち信疑の分別なり。散善義に不生疑怯退心と。禮讚には蒙光觸者心不退といふ。他力の行者は攝取不捨の故に。一念も疑退を生せずとなり。卅五に斷不斷とは纂釋に二義を出だす。一には讚阿彌陀偈の光明一切時徧照故佛又名不斷光の文に依る。不斷光の利益を蒙る故に心間斷せず。諸行は之に反す。二に論註の不斷煩惱の

釋に依る。諸行は或業を斷じて得證し。念佛の行者は他力なるが故に不斷煩惱なり。初義は無間有間對に混するを以て後義を取るべし。卅六に因行果徳とは名號は果上の法なるが故に大經に念佛の信を歎して。明信佛智と説けり。所信既に佛智なれば能信も亦た佛智なり。卅七に法滅不滅とは獨留章に依る。諸經滅盡の後迄も念佛獨り止住するが故に。卅八に自力他力とは論註に唯是自力無他力持といひ。重ねて喩説して自他力の相を辨せり。卅九に攝取不攝とは攝取章に依る。佛光は唯念佛の衆生を攝取す。餘行は然らず。四十に入定聚不入とは大經の文及び十住論の意に依る。四十一に思不思議は即ち小經の意に依る。他力念佛は諸佛各不可思議と歎す。四十二に報化二土とは往生要集の意に依る。念佛は專修の正行なるが故に報土に至る。諸行は化土に生するなり。已上四十二等は結示。就教法とは教と法と字相と論するときは差別あれども。今は二を分たず。教即法の持業釋にて解すべし。

問ふ眞實淨信心等の文如何分別するや。答ふ上來教を明す一段畢て。此より九丁右二行下は機を明す此中二。一に正しく明す二に又就二種機の下は汎く得生の類を明

す。初正明中に二。一に辨信歎徳。二に二機對已下は對判して勝を示す。初中眞實淨信心を内因とし攝取不捨を外縁とすとある文を分別せば。先眞實淨信とは此名は論註の淨入願心章に出づ。眞實淨信と歎するものは他力回向を顯はす。眞實とは虚偽轉倒の法に非る故なり。法性に隨順したる如來の智恵に名く。淨とは清淨なり諸の垢染を離るゝなり。如來清淨眞實の名號。凡心に滿入して信心となるを眞實淨信といふ。註して内因といふは。次に攝取を外縁とするに對して内因といふ。内外因縁の語は序分義及び觀念法門に出づ。佛教の所談因縁に非るはなし。因とは業因正く證果を招く者を因とし。因を守護し補助するを縁といふ。信心の佛因内心に領受するが故に内因といふ。攝取は外より來りて因を守護するが故に外縁といふ。攝取不捨は觀經第九觀に出づ。禮讚に攝取の義を釋す。即ち盡十方無碍光の神用にして。小經に阿彌陀佛の名義を説て。光明十方を照して障蔽なきが故に阿彌陀と號すとあり。衆生の惑障罪障にさへられず。守護して淨土に往生せしむるが攝取の益なり。上の淨信は受法攝取は得益なり。然るに受法と得益と詞の上は一往次

第すれども。其法体に就くときは聞名の一念同時に相應す。末燈鈔に眞實の信心を獲得すといふも。金剛の信心の定まるといふも攝取不捨の故なりとあり。受法得益同時にして。唯一名號の義用に約して内外と分つ。問ふ行卷に光明と名號と信心との三に就て兩重の因縁を明す。今と同異如何。答ふ彼に明かす兩重因縁に望むれば。第二重と聊か同する邊あり。信心を内因とし光明を外縁とするは。即ち一なれども。彼には光號を以て外縁とし。今は光明のみに就て論ずる所は異なり。又彼に明す兩重の因縁は。初重は獲信の因縁を明す。名號を父とし光明を母として信心の業識を得せしむ。又第二重が正しく得生の因縁を明す。因て今と相望すれば彼の第二重と大同小異なり。

問ふ前念命終後念即生の文。此前後の義相如何解すや。答先一段の文義を釋九丁右三行し隨て前後念の義相を辨せん。上に眞實淨信等とあるは信を辨じ。信受本願以下は徳を歎す。此中亦二。一示當相二他力金剛等の文は上を結して對顯す。初中信受本願等は聞信一念即得往生住不退轉の益を明す。此受法得益の中に於て前念命終後念即生といふは。此言禮讚の前序より取り玉ふ。言を彼に

取れども義は轉用して別なり。彼は現身の臨終に約し今は聞信の一念に約す。現益當益の異あり。故に今は自力の心命の盡るに約す。大悲招喚の聞得らし時。無始已來の疑惑心盡るを命終といふ。後念即生とは佛智滿入して佛智明了に生ずる邊を往生といふ。最要鈔に假令身心の二に命終の道理あひわかるべきか。無始より以來生死に輪廻して。出離を希求し習ひたる迷情の自力心。本願の道理をさくところにて。謙敬すれば心命盡くるときにてあらざるや。其時攝取不捨の益にもあづかり。住正定聚の位にも定まればこれを即得往生といふべし。善惡の生處を定むるとは心命の盡くるときなり。身命のときにあらず。然れば臨終を期すべからざる義道理文證明らげしと。執持鈔に善知識の言の下に歸命の一念を獲得せば。その時をもて娑婆の終り臨終と思ふべしと。以て知るべし。信の一念に就て自力心の盡るを命終といひ。他力信の生ずるを即生といふ。問ふ受法得益同時なるものを前後に分つは如何。答ふ言を禮讚に取る故なり。彼に當益とせるものを此に轉して現益とするを以て。言葉は不便利なる所あり。前後といふは受法得益の義用。兩得の區別

を標する言にして。其法体に就けば前後即無前後なり。成就文に聞信一念即得往生と説く以て可知。次に註釋して即入正定聚之數とあり。即生の下に即時入必定といふ。入正定聚の言は論註にあり。易行品には即時入必定とあり。又た地相品に初地を得れば必定の菩薩云々の言あり。是等の釋より取り玉ふ。正定聚も必定も言異意同なり。正定は邪定不定に對する言なれば。妙覺の果に至ることの正く定まる義なり。其部類なるを正定聚といふ。聚は聚類の義なり。扱て正定必定を二處に再出するは如何といふに。古來多義あり。就中鉢雲二師は同義の異名を兩處再出するは。實は前後同時なることを顯はすなり。言を前後に分出して暫く次第を立るも。畢竟一の得益に外ならざれば。兩處再出に依て愈受法得益の無前後を知るべしと云云。此説是なり。石泉は前念命終の下に入正定聚とあるは前後同時を明に知らしむ。然るに即生の下に必定とあるは多分傳寫の誤謬にして。此必定は矢張正定聚の後に列して異名を擧げて註釋したるものならんと云云。次に他力金剛心等これは二に上を結して對顯す。上に受法得益一法の上に於て暫く前後内外を論ず。今は

上の通明の金剛眞心を受けて。次上の二を結して本に歸して唯一金剛心といふ。金剛とは喩なり。自体堅固業用猛利を顯はす。言は散善義にとる。便同彌勒とは自力金剛心等覺の菩薩に比して今宗の超勝を顯はす。信卷に王日休の語を引て眞知彌勒云々とあり。證文に王日休の言を乃至人と申なり等。彌勒とは慈氏と翻す。等覺の菩薩自力金剛心を究むるが故に。三會の曉に無上覺位に至る。他力金剛の行者是と同じごとを顯はす。得位を論ずれば共に等覺の金剛心なれども。彼は自力の故に五十六億七千万を經る。此は横超の故に。臨終の一念無上覺に昇る。頓漸勝劣を比對したるものなり。此文相には勝劣を標せざれども。信卷の釋意を以て照せば其義明かなり。

問ふ二機對の一段如何解すや。答ふ二機對以下分て二。一略明二信疑の下は九丁右七行廣顯。初畧明に二機對とは標。二機とは自力心と他力信なり。信の何を機といふ。機とは法華玄義六上に機に三義を明す。微關宜是なり。一に微の義とは衆生の上に將に生せんとする微善ありて。佛之に應して生せしむる濟度の縁あるものを機と名く。二に關の義とは善惡の衆生共に佛の慈悲に關係する

故に機と名く。三に宜の義とは諸行の機とは諸行に宜しき義。念佛の機といへば念佛に宜しき義あり。故に衆生のことを機といふ。斯三義信前信後に通す。今家には關宜の二義に約して解すべし。又可殺の義と解すとあり。此時は信前性得の機に約す。今自力を機と名くるもの各關宜の義なり。一乘圓滿等は此は上を承て釋す。一乘圓滿とは上の本願一乘海乃至圓滿とあるを略したるなり。圓滿は圓教中滿足の圓といふ意なり。此四字は名號の行徳を歎す。機とは信なり名號の行徳を以て信に名く。行を全して信とす。信行不離の故に。此信毫も自力を雜へざるを以て他力といふ。漸教回心とは直に報土に入ると能はず。往生すとも猶化土に止まる故に漸教といふ。此土入証の行を廻轉して淨土の行とする故に回心といふ。斯行を受くる機を回心の機といふ。是則ち他力に非れば自力と決す。己上畧明を解す。

問ふ廣顯の文如何が解すや。答此中二。一に陳列二に結示。初信疑對とは三九十一左三行。心章に生死家以疑爲所止等の文に依る。諸行の機は佛智を疑惑して罪福を信する故に疑といひ。念佛の行者は明信佛智の故に信といふ。此は是一宗の肝

要。相承一般の信印なれば。龍樹は若人種善根疑則率不開等との玉ふ。是を以て二機對も亦た信疑に起り明暗に結す。明暗は即ち信疑に喩ふるものなり。二に賢愚とは三心章に賢者對愚之辭とあり。彼は内外不調に就て釋し今は轉用して自力の勝劣を判する目とす。他力の行者は佛智を了知するが故に賢なり。自力の行者は佛智を了解せざるが故に愚なり。三に善惡對己下五對は觀念法門の証生緣の中に出つ。彼此の所顯異なれども目を取て義を轉用す。善惡とは彼文に捨惡行善。又た善性人惡性人等の語あるより取る。善惡は損益を義とす。身を潤益するを善とし身を損害するを惡とす。自力行者は往生の大事に於て自損々他し自障々他の害あり。他力行者は自他共に現當に無上の利益を得るなり。正邪とは彼文に捨邪行正といひ。散善義に諸行の人と邪雜人とし。經には念佛の行者を正定聚とす。他力行者は本願に順するが故に正なり。自力の行者は此土入証の行を以て曲て淨土の行とするが故に邪なり。是非とは彼文に捨非行是といふ。諸行の人本願に違する故に非なり。他力の人本願に順するが故に是なり。證文に是は非に對する言。眞實信業の人

をば是人と申す。虛假疑或の行者をば非人といふ。今亦た然り。實虛とは彼文に捨虚行實といふ。實は眞實にてカラにあらざるもの。他力の人は佛智滿入するが故に實といふ。自力の行者は内心カラなる故虚といふ。眞偽とは彼文に捨偽取眞といふ。眞は偽妄に對する言にしてニセに非る者。偽はニセモノイツハリのとなり。二尊の正意の儘を眞に受くるは眞なり。己が虚假の心を頼むは偽なり。散善義に必須決定眞實心中回向願。又た内懷虚假とあり知るべし。八に淨穢とは二河譬に他力信を清淨願往生心といふ。自力心は此に反す。煩惱の垢染を体とする故に穢なり。序分義に假令起清心猶如澆水と云。九に好醜十に妙麗は共に約對章に依る。文に念佛者即是人中好人乃至待麗惡とあり。彼に好惡といひ今は好醜といふ。惡醜同義なり。又妙麗は他力行者佛之を嘉稱して妙好人と名く。自力行者は之に反す。妙は眞妙の義不思議にしてたへに勝れたるなり。麗は之に反して物の荒目なるとなり。十一に利鈍十二に奢促す聖覺法印の言に。根に利鈍あり機に奢促ありとあり。他力信者は佛智を了解す之を欺じて利といひ。自力行者は之に反す故に鈍といふ

。了解のニブキとなり。奢促とは遲速に同し。奢は徐なり促は字彙に速といふ。之は證果に就て相對す。此は聞名の一念に速に得生し彼は然らず。十三に希常とは約對章には希有常有とあり。他力の行者は超世希有の大法を信す。要門の行者は罪福因果の常理を信す。十四に強弱とは玄義分に託佛願爲強緣と。散善義に一心投正直進不生疑怯退心と故に強なり。要門之に反す故に弱なり。十五に上々下々は散善義に人中上々人といひ。約對章に上々人者は待下々とあり。無上の法を信するは上々なり。自力雜善の法を信するは下々なり。十六に勝劣とは擇集に最勝待最劣とあり。十七に直入廻心とは般舟讚に直入の語多し。散善義三心釋に直進直向とあり。念佛の行者は進退猶豫せず直に佛願に託して疑はず。故に直入といふ。自力の行者は此土入證の行善を曲げて淨土に回向す。此を回心といふ。十八に明暗は喩に約す。此は散善義の釋に依る。他力の行者は信心の智明を得る。自力の行者は然らず故に暗なり。已上等は結示なり。

問ふ又就二種機已下機性を明す一段。如何が分別するや。答ふ明機の中。上

十右四行

は正明。己下は廣く得生の類を明す。此中二。一總標。二又復の下は別明。初總標とは機と性とを總標するなり。觀念法門證生緣の文に。答曰凡夫機性レ二種一善性人二惡性人ト。此文意に依て淨土に生せんとする機性に種々あることを明す。機に性得と受法の二あり。性得とは未だ法に入らざる機にして其人の持前をいひ。受法とは既に法に入りたる機をいふ。上に廣く相對を列ねて明す所の機は。受法の機に約して諸行と念佛と兩機の得失を明す。今は生來の機を分別するを以て復の字を置て上と別を示す。性得の機に約せば機は可發の義なり。可發は善惡に通ず。善緣に遇へば善を習ふて善心を起し。惡緣に值へば惡を習ふて惡心を起す。衆生の性得に可發の義あり之を機といふ。性とは不改の義。人の性質たる所にして改まらざるをいふ。觀念法門の上は暫く機と性とを分つと雖も。機性一致の扱なり故に性を明して別に機を論せず。今鈔は機性を別論せり。大論八十八卷に二說あり。一には性者約レ過去根欲者約レ現在根。欲とは機のとレなり。性は不改の義必然の義。元來の性質をいふ。此は過去に約したるもの。又機は可發の義とせば現在の善惡緣に望め

て善機惡機と判す。又一說には機は現在に約し性は未來に約す。今生善惡の習ふ所に由て報ゆる所を性といふ。二說宜敷に隨て解せ。此文所列の次第に就けば。機性の次第ゆへ。機は現在に約し性は未來に約するの義なる乎。取捨任情。
問レ又復就善機等の文如何が解すや。答ふ二に別明此中二。初に善機善性二トに惡機惡性。初中又二。一に善機二に善性。初中又二。初定散次傍正。先定機とは定心三昧に堪ふる機。散機とは三福の行を修する機なり。子註に疏云等とは終南の疏を引く。次に傍正の中又二。初標二釋。傍とは猶兼の如し。本願の正機を正といひ。之に反するを傍といふ。所謂選擇集に元曉の釋を引て本爲凡夫兼爲聖人との玉ふ。此が即ち傍正を明したるもの也。是に由て今菩薩二乘等の機を擧て淨土の傍機とす。入天を以て淨土の正機と明す。本願の正意は凡夫人天にあるが故に。和讃に如來の作願をたづぬれば等との玉ふ。一菩薩等とは釋。菩薩の往生を説くとは大經に於此世界有六十七億云云と十四佛國の往生を明す。是等が傍機也。大小とは八地已上を大菩薩とし己下を

小菩薩と名く。緣覺聲聞の名義は上辨の如し。爰に辟支の言あり。是甚た解し難しとす。辟支は緣覺のとなり。然れば重言再出に似たり。是如何といふに古説に。緣覺に二あり部行と麟喻となり。其部行は聲聞の緣覺にして師資部黨ありて。麟喻と種類を異にするが故に。更に辟支を出すと。此説不可なり。今三乗と分つ所明に於て聲聞の中に緣覺を攝すべきに非ず。況や此二名は梵漢の異稱なれば。之に由て麟喻部行の別を成し難きかや。温故の義には此二字は傳寫の謬ならん除て見るべしと云ふ。次に天人とは淨土の正機なり。所謂玄義分に諸佛大悲於苦者等と。三界流轉の機を以て大悲の根本とするが故に。知るべし。

問ふ善性を明す一段如何が解すや。答ふ二に善性を明す此に標釋あり。又復十一丁左八行就善性有五種とは標。次に一善性等は釋なり。此中善性は總。餘四は別なり。先善性とは惡性に對す。此五種の性みな行に就て性を判す。善事を好む生れ付あり是善性なり。例せば生類を愛して殺さざる類なり。正は邪に對す。天理に順ずる所行を好むは正性なり。之に反するは邪性なり。實に虚に對す

。内に忠孝等の徳行ありて事を行ふを實といひ。内に不實の心を懷きて事を行ふを虚性といふ。是は非に對す。上に正邪あり更に是非對を擧ぐるものは正邪を釋する意也。正を正とし邪を邪とし是非を決斷するを是とし之を誤るを非とす。眞とは眞は偽に對す。忠孝等の善事をなすと雖も。其表面のみにして誠に非る似せものなり。今は偽に簡んで内外相應するを眞といふ。如此一の善性を開顯したるものなり。

問ふ惡機惡性の一段解釋如何。答ふ此中標釋の二あり。散善義に汝等衆生十二丁右四行切己來及以今生身口意業等の文を所依とす。一に十惡とは身三口四意三なり。二に四重とは殺盜淫妄なり。出家にして此四罪を犯すは最重の故に四重と名く。三に破見四に破戒は佛の正見を破り制戒を犯すなり。五に五逆とは殺父殺母殺羅漢破和合僧出佛身血なり。六に謗法とは四諦の因果を撥無し正法を誹毀するなり。七に剛提とは無信又斷善根と翻す。惡性に五種を明す文は五種善性に對して解すべし。

問ふ光明寺已下の文科釋如何。答ふ此れより上は四法を擧げ。已下は二に引十二丁左五行

文証誠可信。此中分二。一引佛祖証明二引他師助顯。初中三。一引終南証橫超二引北天証眞實三引佛教並證橫超眞實。初中光明寺は標。善導は終南山光明寺に住す。故に光明寺和尚といふ。和尚とは弟子師を尊ふ詞。二に道俗等は正しく引文。此文は玄義分歸三寶偈なり。善導觀經の正意を顯はさんか爲に。十方の三寶に歸禮して證誠を乞ふ。故に又請證乞加の文といふ。偈文にては合掌禮の次に十五句あり。今畧して前後十一句を出だす。是れ彼此の所顯別なるに由る。偈の當分は三寶に加被を請ふを顯はし。今引證は横超頓教を證する爲なり。故に文を抜引す。道俗等とは其當時の有縁を呼起す。各發とは勸進して均く願方に歸せしむ。無上心とは他力の信心なり。信卷本に此文を引て無上心を發せどもと點聲し玉ふ。此意にては自力菩提心を指す。自力大菩提心を發せども生死を離れ難しとなり。彼此趣向を異にして各互に義を顯はすなり。生死甚難厭の四句は勸進する所由を示す。初二句は聖道難修を示し次二句は淨土易往を示す。金剛志とは他力信心なり。横超斷四流とは經に横截五惡趣と説く。横とは他力を顯はす。通途の斷證の道理を超えて。無

作に報土に到るを横超といふ。四流とは信卷に有流見流欲流無明流と云ふ。是れ三界流轉の因果なり。三界を超斷し涅槃に到るを斷四流といふ。觀入彌陀海等とは上は他力信心發起を明し己下は報謝を明す。是亦た偈の義と所顯を異にす。今は轉用なり。觀入は觀知の義にして信心のことなり。歸依合掌とは意身二業を擧て口業を攝す。今は報謝を明すを要とす。正受金剛心とは偈の上は等覺の菩薩のことをいふ。今は轉用して他力信心の一念に。佛因圓滿して所歸の佛智と能歸の心と相應せしむ。無上涅槃の極樂を得る信心速疾の益を明して。横超の相を顯はすなり。最初に終南を引用し玉ふは。當卷太初に二雙四重の判に於て彌陀本願を横超とし。夫より以來本願一乘海等と釋する所を承けて。横超の義を證する意なり。問ふ一論引證の文如何解すや。答ふ淨土論とは標。具に無量壽經論と云ふへ十二行淨土とは所顯の法義に就て此論を呼ぶ。淨土法を明す論なるが故なり。二門章には正明往生淨土論とあり。又は往生論ともいふ。世尊等の一行は論主の自督を述ぶる文なり。一心歸命は能歸の心。盡十方は所歸の佛體。顯

生等の一句は一心歸命の相を明す。願とは願期の義必得往生と安堵して淨土を期する心相なり。和讃に天親論主は一心に乃至報土にいたるとのべたまふと。此が正しく初行の偈を讀じたものなり。我依の一行は論註に成上起下の文といふ。修多羅は契經と翻す正依の三部なり。眞實功德とは三經所説の名號功德をいふ。銘文に釋して誓願の尊號との玉ふ。三經所説は彌陀の名號功德を明し玉ふが故に我依等といふ。説願偈等とは斯願生偈を作り玉ふをいふ。總持とは偈なり。多端の文義を僅の詞に約して明す義なり。與佛教相應とは所依の經文に能く契當するを相應といふ。此句を成上起下といふは。上の題號に無量壽經優婆塞會願生偈といへる所依の經に能く相應したりと上を成し。又上に述ぶる天親の一心歸命は。能く三經所説の眞實に契應したる淨信なりと成す。此二義ある故に成上といふ。起下とは己下の所明たる三種莊嚴の徳。能く佛教に相應することを標す。是れ下を起す用あるを以て起下といふ。然れば今此文を引くは上來機法行信の眞實を證し。佛教に相應し佛意に契當するが故に眞實なりと顯はす意なり。

問ふ佛教を引て横超眞實を並證する文如何が解すや。答ふ此中四文あり。一十二行右六行に大經流通の文此を正證とす。三に如來會三に平等覺經四に大阿彌陀經を引て大經を助顯す。初大經の引文に無得以我等の十二字は上の佛言吾今等を結する經文にして。次下の流通とは文義大に別なり。然るに流通の文に屬して引くものは。如何といふに。後の應當信願の文と首尾相應して勸信誠疑するの意なり。初めに先疑を誡め後に應當信願と信を勸め。誠勸を以て起結せん爲なり。此文に當來の世に諸經滅盡する時に特り留るものは彌陀の本願のみ。是則眞實法たるが故なり。諸經の利益既に盡たる法滅の劣機が。聞信の一念に意の所願に隨ふて。無上の徳を得て即ち證に到るを得度といふ。一切諸佛の經道よりも新法に値遇すること最も難し。是れ横超眞實の法なるが故なり。今此文を引くは上に眞實といひ。横超とあるを並へ證する意なり。我以慈悲哀愍特留斯經とは。選擇集に斯經の止住は念佛の止住なりとあり。全く彌陀佛願の法力によりて特に止住す。何を釋迦の力ならんや。然るに我以慈悲とあるは二尊一致の佛意に約す。大經能説の釋迦は彌陀三昧に融じたる。

行如來徳の釋迦なれば。彌陀の慈悲即ち釋迦の慈悲なり。故に我法如是説等と云へり。止住百歳とは百は滿數の義。百箇の百に非らず。温故に三義を擧ぐ。曰く一明諸惡增長二勵遠弟護持三彰悲哀無極と。斯の三義ありて止住百歳と説くとなり。隨意所願とは願生するもの、所願なり。得度は所謂爲得大利無上功德を指す。如來興世等は是れ能説の人に値遇し難きを云ふ。諸佛經道等とは所説の法に遇ふの難きなり。菩薩等とは三乘法に遇ふの難。善知識等は能弘の人に遇ふの難。能行等とは自力の修行を修することの難。斯の五難は通途聖道に約す。若聞斯經已下は別途不共の大經法の難なり。超世希有の法なれば宿因深厚の者にあらざれば。此法を受行しがたしと顯はす。如是作とは上の序分に明す五徳瑞現の相を指す。如是説とは上來正宗分の説を指す。如是教とは別して此流通分に信疑決判して。衆生をして信順を勤め玉ふを指す。次に助顯。初に如來會の流通文を引て上の眞實を助顯す。如來の所説は勝智徧虛空の義言なれば眞實至誠の妙説なり。可仰可信との意なり。二に漢譯の平等覺經を引て橫超を助顯す。速疾超便とは本願力の大利益。即横

超頓教を顯はす。三に吳譯の經を引て。上の大經に止住百歳とあれども法滅の期限を説かず。之に依て經道留止すること千歳と説く。千歳の後斯經特り留るとあるを以て滅盡の期限を示す。全体諸經滅盡といふは末法万年の後なれども。其滅盡の初を云はば像法の時より既に初まるなり。故に諸經の上に千歳にして法滅と説くは。斷滅を云ふにあらすして法滅の初に就て明したるのなり。化巻に非像末法滅之時機等は皆法滅の初に約す。像法の時すら聖道法は修し難し。豈況んや末法の時機に於てかや。彌陀法特留は是れ全く眞實法の故なり。上の眞實を顯はすを助顯す。

問ふ他師の文如何解すや。答ふ元照の事蹟は佛祖統記三十に出づ。律師は大律師なり、義疏とは阿彌陀經の釋疏なり。經末に一切諸佛の爲に共に護念せらるゝ等の文を釋す。勢至章とは首楞嚴經五の文なり。又大論曰とは論の七十九の文なり。此經論の文共に小經の護念を釋す。此他師の説を引き玉ふ主要は。諸佛の護念を蒙り直に菩提に至る。諸佛にも速疾超過の法あれども。諸佛の護念に預りて頓に大果に到ることは。通途の法に絶てなき所なり

。之に由て横超と稱するなりと。上の横超頓教といふを助顯す。律師は元より今家の宗意を知らざる人なれども。所顯の語能く他力を顯はすに便利なるを以て。他師すら彌陀の超世不共を讀すること如斯と。引用して上を助顯するなり。余文解すべし。
三に建長等は記時安名なり。

二卷鈔江問對 上篇終

二卷鈔江問對 下篇

勸學 足利義山師 校閱
贈司教 快樂房 猪野惠空師 講演
武田 智達 筆記

問て曰く當卷の大科如何。答ふ上卷は通じて眞宗の義門を明し。下卷は別して觀經の三心を分別す。此中三。一題目二正文三記事。初め題目は上卷の如し。二に正文の中大別して二とす。一舉疏分別三心眞假。二凡就心有二種等丁三因果對辨示分別意。

問唐朝光明寺等の文如何が科釋するや。答ふ舉疏分別三心眞假の中に二あり。初標舉二先就下正出。唐朝云云は標舉なり。此觀經の三心を分別するは。上卷にありて二機を分別し其得失を明す。彼を承けて廣く二力の相を示して。自力心を捨て、他力心に歸せしめんが爲なり。此義誠に大事件なり。是に依て相承の指揮を擧げて。臆説に非ることを証す。故に善導の釋を引て要弘二門の分齊を顯明し玉ふ。殊に觀經の三心に就て釋するに其所由あり。觀

經は元隱顯ありて。十九の方便と十八の眞實とを表裏して開説したるもの也。此事を具に釋すること化卷隱顯釋の如し。大經の三心と觀經の三心と一異を問ふて。其答に釋家の意に依て觀經を按ずるに。顯彰隱密の義あり等と釋せり。釋家とは善導なり。善導の釋義に依て觀經に隱顯あると明す。疏釋の上觀經に隱顯兩義あると釋せども。凡庸眼にては孰れが弘願の釋。孰れが要門の釋なること知り難し。由て今高祖三心釋の疏を引て。眞假の釋休を分別して感勿らしめんとす。票に唐朝とは善導の時の世代なり。朝は朝廷。唐の世の李氏天下を治むる時なり。光明寺は所居の寺號。和尚は弟子より師匠を尊重する詞。觀經義とは散善義なり。彼の敬白文に出此觀經要義指定古今との玉ふ。依之四帖疏を觀經義と稱し玉ふ。

問ふ先就上品上生等の疏文云何が科釋するや。答ふ二に正しく文を出す。此中初下六行。一總叙宗要起下。二經云下正料簡三心義。初文に雙標二意とは觀經上輩の初に。佛告阿難乃至上品上生者といふ迄に三句あり。其中上品上生者の句に二義あり。一には位を辨成する義と。二には對告の人とする義となり。上

品上生者に告くると訓讀せば。俱に對告の人を票す。又奉提に告くると切て。上品上生者とは承る時は。對告の人は阿難奉提のみ。上品上生者は位を辨成する意なり。此二義を含むが故に雙標二意と科す。善導特に上品上生の句を以て。對告の人とする義を立つるは。他師の譯解を破する爲なり。他師は三心は深位の菩薩に非れば起すこと能はず。上品上生といふは初地以上の菩薩と判じて。三心を九品の通因とせず。之に對して今對告の人とす。次の若有衆生の句を。總じて九品の機を擧ると釋するが故なり。此即已下此は上品上生の句を承て釋す。他師は上々品の機は初地已上七地已下の菩薩とす。善導は上輩三品は遇大の凡夫。中輩三品は遇小の凡夫。下輩三品は遇惡の人。九品共に一の凡夫乘の品分とするが大師の所立なり。故に上品上生の句を釋して修學大乘の凡夫と云ふ。上善とは即ち經に説く慈心不殺讀誦大乘修行六念等の行を指す。

問ふ三從若有衆生等の文意云何。答ふ此中に總舉有生とある有生は。疏文に初下右八行は有縁とあり。有は有在にして生とは往生九品の機類。因を修する所に往生

の果を有する義あり。故に九品の行人を有生といふ。總舉とは他師の釋は此三心は唯上上品の人の起す所の。實相深解の心にして下八品に通せずとす。今は此に反して三心は九品の通因とする故に。總舉といふ。經に若有衆生とあるを九品の機を皆舉る意なり。鉢師の義には眞假の二機を含むが故に總舉と云ふ。上に雙標と云へる文に准するに。此は九品の機を票すと云が正義なり。次に即有其四等。此は此中の細科なり。終南の釋体。文を釋するに科を以て解釋に備へたものなり。一明能信之人とは經の若有衆生の句に當る。二明求願往生とは願生彼國の句を釋す。三明發心多少とは發三種心の句に當る。經文の當前は次の三心を指す。然に化卷に此經文を釋して三種の三心あり二種の往生ありと釋し玉ふ。此祖意に依れば發三種心と。定の三心散の三心弘願の三心。此三を三種と名くるに似たり。又即便往生が。即往生が弘願便往生が要門と。如斯釋するものが。善導の釋と相違するは云何といふに。爾く化卷の釋は轉釋にして經文の當義にあらず。何故に轉釋し玉ふかといふに。一經の文々句々に隱顯あることを知らしめんが爲の。寄事顯法の妙手段なりとす。

りとす。

問ふ四從何等爲三等の釋意如何。答ふ此一段は經の即便往生の句を釋す。即初左三行便は熟字にして別義なし。高祖此を要弘に分ち玉ふは轉釋なり。此中辨定三心以爲正因とある正因と云に就て。六要鈔に正者對邪對雜之辭と云ふ。此は弘願に約した釋なり。文の當相に就て云は、散善義に三心正因九品正行と判す。全体自力の上では行が正因なれども。殊に三心を正因といふは功を本に歸して判じたものなり。要門の行は多くは此土入證の聖道行なり。是が往生淨土の行となるは。全く至心發願なる三心が導首となるが故なり。玄義分宗旨門に一心回願往生淨土爲體といへり。回向發願の心あるに因て往生の正因となる。和讃にも諸善万行コトコトク乃至往生淨土ノ方便ノ善トナラヌハナカクケリと云が如し。此義を以て功を本に販して三心正因と判す。問ふ經に三福行を以て淨業正因と説く。今は三心正因と云ふ。正因兩途あるは如何。答ふ三福正因と説くは諸佛通相の所談。淨業とは一切諸佛清淨涅槃に到る業因と云ふ義なり。淨土の業因と云ふには非らず。今と別なると可知。次に即

有二一とは是觀經の何等爲三の句より必生彼國迄を科釋す。隨機顯益等とは佛の攝化機の宜きに從て利益を與へ玉ふと。意密にして知り難きゆへ。佛自問自徵せざれば其義を顯すと能はず。此は何等爲三の句を釋す。徵とは答を問徵するなり。呼起すを徵と云ふ。二明如來等とは一者至誠心等の句を釋す。文解すべし。總叙宗要起下の一段舉る。

問云經云一者至誠心等の文如何が科釋するや。答云己下は二に正しく三心を科釋す。初中二。一通科釋三心。二別追顯至誠心。此は今鈔廿二丁就至誠心の下なり。初中三。一科釋至誠心。二科釋深心。三科釋回向心。初中又二。一舉疏文。二正科釋。初中又二。一經云等十三字牒經釋名。二欲明一切已下正釋至誠心。六要に三心は一經の眼目出離の要道なるが故に。佛言を擧げて勤信すとあり。至言と謂ふべし。一者二者の言本願の三心には無くして觀經にあり。此に就て古説に本願に一二の言なきは法の自爾と示す。一名號の功德にして一二の次第なきが故なり。觀經に一二を説くは機の信相に約す。各所顯ありといふ。今は此義を採らず。數を配するも記せざるも有無同様にして

別義なし。時の宜きに從ふ。略書には本願の三心を列するに。一者二者の言を置き玉ふ。固より法体に就ても機の信相に約しても。三心即一心にして一を謂て三と説く。三一の言あるは其義別を知り易からしむる爲に。一二の言を票したるものなり。至者眞誠者實。合して云へは眞實心なりと釋す。

問云欲明一切等の文云何が科するや。答云此至誠心の疏文を擧る一段。自ら初下七行三段と分る。初に隱彰に約して釋す。二に一者凡所施等は前後の釋を判す。高祖の私釋なり。三に言自利眞實以下は顯説に約して明す。問云如斯疏文を截斷するもの何の意あるや。答云疏文を截斷して隱顯兩途の釋あることを指示し玉ふたもの也。元と至誠心の疏釋隱顯兩途の釋。前後に散在せり。凡庸眼にては之を簡別する難し。故に高祖を見易からしめんが爲に。疏文を截分して中間に弘願の釋のみを拔出したるものなり。一者凡所施等の文其文短しと雖。上の弘願に約するの釋皆總じて出す意なり。又二に不善三業等の文。疏の上では至誠心の終にあれども。此一段の釋次上の自利眞實と異りて弘願眞實の釋なり。眞實有二種と標じて自利々他の二眞實を明す。此自利々他は自行

化他の謂に非らず。自力他力のことなり。其自利眞實を明すに三業の厭折に約して釋す。次に不善三業等の文の上に。二利他眼實者の票なきが故に。弘願の釋たること甚だ見難し。然るに上の釋と大に異にして不善三業の下の釋は。全く利他眞實を明す文なり。斯義疏文の上にて凡眼難知の故に。高祖の悲心疏文を截斷分別して。隱顯要弘の釋あることを指示し玉ふ。既に云ふ如く。三段の釋ある中。欲明より凡所施乃至皆眞實といふ迄は。隱意弘願の釋なり。故に此一段をば信卷に引用す。此文如何か弘願の釋なりやといふに。純ら機無を明して法の回施を顯す。全く信機信法の釋体なり。凡夫の心中は虚假不實にして内外不調す。此自力心より日夜修するとも。雜毒虚假にして往生すること能はず。之を捨て、彌陀の回向を須ゆれば。則ち眞實の信なりと釋す。此が至誠心の相なり。全く廢立の所談にして弘願の釋たること明々白々なり。

問左七行欲明一切等の文句を釋せば如何。答ふ文に欲明とある欲は樂欲。此樂欲は觀經能説の釋迦の意を指す。釋尊至誠心と説き玉ふは。凡夫心中に眞實心

を成せよと云ふにはあらず。佛の眞實心を領受せよと勸めんが爲なりと云ふ意。之を明さんと欲すとなり。身口意等とは三業の所修と云ふ。解行は解は解智にして心に約す。行は修行にして外相に約す。信行共に彌陀眞實心中に成すとは。彌陀因中所修の令諸衆生の佛智を云ふ。之を須ふるとは領受して自力を離るゝことなり。此の一段下の正由彼云云の文に應じて解すべし。釋迦の樂欲即彌陀の樂欲を受ける。次に不得外現等上は佛の眞實を須ひて至心とすることを明し。此一段は機に眞實なきことを明す。外とは現起の三業と外といふ。無始以來薰習したる性得を内と云ふ。虚は實の反なり。カラモノを云ふ。假はカリコトなり。偽奸詐は共にイツハリダマスことなり。行に約すと言説に約すとの左右のみ。百端は六根六塵に充つること。難侵とは侵は寢の同音假借にしてヤムと訓す。蛇蝎とは喩にして。但た相の見苦さのみならず心の正直ならざるを蛇に喩ふ。蛇性身体を正直にすること能はざる故此一段内外不調にして眞實なき所以を辨す。若作如此の下は正く廢捨すべきを明す。灸頭燃とは頭に火の掛るを拂ひ除くの想をなす。晝夜專心急修する

なり。如此修するとも煩惱雜起して惡性に導へらるゝ故に。眞實心成せざることを結す。次に何以故等は正しく如來の回施を明す。此一段彌陀因中の所修を明して。佛の回向に由て眞實を得ることを示す。一念とは六十刹那を一念と云ひ百一生滅を一刹那といふ。共に時間の早きとなり。一寸の間も不眞實ならざることを顯す。次に凡所施等正しく彌陀の回向を云ふ。趣求とは所求に趣入するを云ふ。淨土に趣入することなり。佛の回向し玉ふ所。衆生をして所求の處に趣入せしむることを明す。有人の説に所施とは下化衆生。爲趣求とは上求菩提。共に彌陀の自利々他のとと解す。今此義を採らず。

問ふ又眞實有二種等の文意如何。答ふ次に前後の釋を判す。即ち弘願に約するの釋を擧ぐ。此中就利他眞實等は疏文に其文なし。此九字は高祖加釋して疏意を見易からしむるものなり。此文に有二種といふに就て古來多説あり。一義には總別を二種とし。又一義には体用を二種とす。又一義には初の一種は佛の利他回施を以て衆生の自利とするを顯し。次に衆生の自利佛の利他を須ることを明すと云云。如此多説あれども共に祖意に當らず。今二種といふ

は法義の別を論するにあらず。釋義の二種を論するなり。疏の釋義前後兩處に散在するを以て。亦眞實有二種等と票とあれども。此を釋するに至て。初自利眞實を永々明し終て。而も不善三業等の釋其票なき故に。此を利他眞實の釋といふと甚た難見。大に疏意に惑ふて異説をなすもの多し。之に由て高祖加釋して利他眞實有二種の詞を置き玉ふ。此を以て前後兩處に隱顯弘願の釋あることを知らしむ。元と善導の疏文の上では。至誠心の釋三段に分れて。初の一節は弘願に約す。此が欲明以下凡所施云云迄なり。三心隱顯に亘るといへども。弘願が佛の正意なる故。先づ正意の方に約して具に廢立の相を明す。然ども一經隱顯の次第に約する時は。自利の三心が表面となりて。利他の三心は隱意に潜んである。此故に次に自利眞實の釋をなし。後に弘願の眞實を明す。不善三業の釋是なり。然に不善三業の上で二者利他眞實と票あるべき筈なるに。之れ無きものは自然の略なり。文の所明上の自利眞實と異りて。利他眞實の釋なると文に於て明なれば。自然略省たること可知。今兩處散在の弘願釋を一處に寄せて知らしめ玉ふ。故に此文に凡所施等の文は略

なれども。上の欲明以下の文を悉皆提出する意にして、繁重を恐れて略出し玉ふなり。

問ふ疏文に自利を他とある言を。高祖今鈔にありては自力他力の異名として扱ひ玉ふ。されば善導の上此を二力の異名とすること。何れに證ありや。答ふ釋義の所明を以て知る。一人上の自利他を判する目に非らざると明なり。問ふ不善三業以下の文。他力釋と見ること何の證ありや。必須の二字。若し捨ツメク作スベクと讀むときは。自利眞實の釋と見て仔細なし。今此にモチユルの点を付して。他力釋となし玉ふこと何の所見ありや。答ふ唯此文のみを見るときは。汝の疑難然るべしと雖も。上の隱意に約する釋体と。今と全く同一なり。上に必ず眞實心中に作すを須ひよとある言は。其次の釋より照映するときには自力の作を云ふに非ず。自力をすて、他力を須ひよといへる。釋体たること明なり。業己に三業の所修。晝夜不斷なるも雜毒虛假の行にして。是を以て往生は不可なりといふ。佛未劫に修成し玉ふ所の。眞實所成の回施を須上領せよといふ釋相なり。是則ち自力を廢捨して。他力を立する

の意を顯さんとして。モチユルの字を以て扱ひ玉ふ。然れば今亦た此處に。必須の二字を置て釋するもの。上に照准して弘願の。釋なることを知るべし。況や。文に不簡内外明闇云云とありて。凡聖智愚の差別なく共に佛の回向に歸して。眞實を得ることを明す。以可知。問ふ疏文の上が不善三業等の釋弘願の釋にして。上の自利眞實の釋と異なる義ならば。何故に。二に利他眞實と云ふ標徴を置かざるや。西山鎮西の異流の義にては。自利を他といふも一人上の自行化他と解す。自利眞實の外に利他の眞實なく。自行の儘を以て化他するが故に。自利の外に利他の釋を爲さずと解す。不善三業以下も上と一般自利眞實の釋とす。如此異説を爲すとあるが故に。標を略しては大に或ひあるべし。答ふ。是は上に辯する如く釋相上の隱彰の釋と同致にして。異流の如く一人上の自行化他とは解し直さ文に在て明かなり。故に標なきは自然の略なり。

問ふ不簡内外明闇等の文意如何。答ふ。内外明闇とは信卷に釋して。内者即是出世外者即世間とあり。出世間の聖者を内と云ふ。佛法を求むるの人な

るが故に。世間に繫縛せらるゝ凡夫を外と云ふ。次に明闇とは信卷に二釋あり。第一釋は聖人を明とし凡夫を闇とす。迷悟に約して明闇を分別す。第二義には明とは智に約し闇とは愚癡を謂ふ。明悟に約するときは廣く凡聖に通ず。智愚に約すれば凡夫上のみなり。之を合釋して云へば。一切凡聖善惡の諸機共に自力を捨て。他力眞實の回施を得ることを顯はす。故に至誠と名くとは。弘願に約して結す。

問ふ。言自利眞實等の文意如何。答ふ。三に顯說に約して明す。又二種有り三丁左八行

とは。一に制捨諸惡。二に勤修諸善との二種なり。此二種即ち下に分別する厭離欣求の二なり。此自利眞實の釋四節あり。第一に厭欣二種として釋す。第二に口業に約して欣厭を明す。第三に身業に約し。第四には意業に約す。此四段を六要三に總別の二とす。初の二種を標して釋するは。總じて癡惡修善に就て眞實の相を明す。次の三段は之を三業に分ちて別釋すとあり。今謂く一往文相を見れば總別なれども。高祖の意口下の私釋より窺へば。聖淨二門横豎二方に約して分別してあり。初の二種とは釋は厭離を先とし。欣求と

後とす。此は聖道豎出の眞實に約して釋す。次の三業の釋は欣求を先とし。厭離を後とす。是れ上の横出要門眞實の釋なり。聖道の眞實と。淨土の眞實と二に分ちて釋するもの。難行を捨て、易行に入らしむるの次第に約して釋す。文中に自他の諸惡と云ふは。自らも諸惡を捨て他人を教へて捨てしむるを謂ふ。又自他の依正二報とは。自ら業感する所の身體是れ正報なり。住する所の此世界是れ依報なり。其依正二報の執著心を離れて。厭離の想を生ずること。また他をも教へて厭離せしむる。之を自他の依正等と謂ふ。餘文可解。爾るに今の疏を引きて釋するに。此至誠心は疏を具さに引き。次の深心釋の如きは。略して出だす。此は是れ隨時の意業にして別義なし。

問ふ一者至誠心等如何が料釋するや。答ふ二に正しく料揀す。此中二。一に經三丁左六行を標して疏を擧ぐ。二に眞實有二種等は種類を明す。其中又二。一に二門の眞實を變明す。二に就自利眞實の下は別して自利眞實を明す。初中又二。一に總票二に別顯。初めに二種とは自利々他の二なり。此は自力他力の異稱とす。而て上の所明と不同なるものは。上の釋は自利々他を要弘の別に名け。

今の自利々他は要門と聖道との別を判す。即ち上の二利は門内の眞假にして。今は聖淨相對して別を論ず。此故に權實を問はず依心起行して自の眞性を研くは皆自利眞實と判し。又要弘眞假を論せば佛願に託する法は總て利他眞實と判す。如斯二力の分際を明し聖淨と要弘との二重の相望に約して。弘願眞實こそ特り横超至極の眞實なりと顯はす也。而て横出要門は下に至て共に自力と判せり。二に別顯の中初自利眞實次に利他眞實。此中に自力他力の言が眼目なり。於中各二を分つ合せて四重相對あり。惡道自力の中に豎超願教の自力と豎出漸教の自力となり。又他力の中に横超至極の他力と他力中の横出自力との別あり。如來誓願とは第十八願なり。此を他力の至極とす。他力中の自力に對すれば他力中の他力と稱して可なり。此中横豎は自他二力を判じ。超出は證果の遲疾を判する目なり。横出とは要門なり。眞門も横出に攝すれども。今は觀經を釋する所談なるが故に要弘眞假の別を釋す。要門も弘願に望むれば自力なれども。之を聖道に比すれば他力と謂ふべし。自力の堪じざることを信機して十九願力を仰ぐ。或染の凡夫が九品に説く位の微少の善

を修して。界外の淨土に入ること能はず。十九願力を頼む故に聖道とは大異あり。末燈鈔丁に此金剛心を大菩提心といふ。是れ即ち他力の中の他力なり。乃至。此二の正念は他力の中の自力の正念なりと。又後文に他力の中の自力と申すとは聞候ひき。他力の中にまた他力と申すとは聞候はずと云云。是は一往龜論に執して。其實義を誤る機あらんとを恐れて如斯明し玉ふ。再往實義に就て云は。他力とは十八願なり。要門を他力といふは。一往聖道に對して彼が當分を論する所なり。問ふ就自利眞實復有二種等の文。如何が分別するか。答ふ二に別顯。此中二四丁右八行。一に正明。二に按宗師釋文の下は文に就て法を指す。初正明に二。一には厭忻眞實を並明す。二に又就横出眞實の下は別して忻求真實を明す。初中又二。一に總票二に一者の下は別釋。自利眞實とは上釋の如く。自利は自力の異稱なり。二種とは厭離眞實と忻求真實なり。厭離眞實は聖道の權教忻求真實は淨土の方便。今は別して要門を指すなり。問ふ上釋にては一往要門を利他中に攝してあり。今は聖道と同一自利に攝す。其相違如何。答ふ此は所望

不同に依て釋相を別にせむ。要門の法と雖。十九願力に依て彼の無漏の淨土に往生する故に。此土入證の聖道に對しては之を利他眞實といふ。然に今聖道と同一自利眞實と判するものは。要門の法義此土入證の教義を捨て、十九願力を頼むと雖。未だ自力回向の想を離れず故に。弘願より之を望めて。聖道と均く自利中に攝す。

問ふ一者厭離等如何が解すや。答此は別釋なり此中厭離と欣求との眞實を明す。四丁左一行初厭離の中に三あり。一に票擧二に列目三に解釋。聖道等の目を解すと上卷の如し。豎出は横出に對す大乘中の漸教を指す。以厭離爲本とは此三界を厭ふといふ。娑婆に執着し恩愛に繫縛されては出離生死し難し。故に先捨家棄欲して後に菩提心を成すとの意なり。即ち厭離を本として忻求を成するなり。忻求は忻慕樂欲の義なり。問ふ上に自利の中豎超頓教あり。然に今豎出のみを出すは如何。答ふ自利眞實の言の上には豎超までも攝むと雖。其厭忻を論するに於ては其義不同なり。夫れ厭苦求樂して生死を離れ涅槃を樂ふとは權教の所談にして。彼は二乗の機を誘引せんとて厭忻を説きて。生死涅槃

樂を區別す。圓教實教の所談に至ては生死即涅槃と証る教義なれば。法義の分齊を判する時は厭忻は權教にありて實教にはなし。故に今は權教豎出のみに就て厭忻を論じて。彼は法体自力の故を以て。三界を厭はざれば忻求を成すると能はさるとの御釋なり。問ふ二者忻求真實の文を解せ。答二に忻求真實を明す。此中三あり票擧列目解釋なり。忻求とは淨土を樂欲して往生を請求するなり。文解し易し。就中他力とは言總意別にして。上の豎出に對する十九願要門即ち他力中の自力なり。

問ふ上に豎出の教義を判して以厭離爲本自力故といひ。今淨土要門の教義を五丁右一行判して。忻求を本とすどあり。其相違あるものは如何。答ふ厭忻に就て二門各主とする所に約して法義の別を判せしなり。聖道は自力感果の法なれば。先娑婆を厭離して煩惱を斷じ。煩惱を斷じて後に忻求を成するが故に。厭離を本とす。又横出は假令厭離の小心を起さずとも。淨土を忻求すれば願力に依て生死海を厭捨せしむる故に。忻求爲本といふ。二方の別を顯はさんか爲に厭忻の前後を論す。若夫れ機に約して論する時は厭忻不定なり。厭忻孰れ

を先ども定め難し。章提は厭を先として忻求せると。觀經の説の如し。問ふ此文に厭忻は只漸教豎出に就て論せり。豎超頓教には厭忻心なしとするや。答ふ是亦法の分齊を判じたものなり。機に約せば厭忻は佛法の初門にして必ずあり。然に圓頓了教に於ては煩惱即菩提と悟する故に。厭離忻求すべき處なし。問ふ弘願にも厭忻ありや否や。答ふ弘願は厭忻は法体の具徳にして機に於てなし。聞信の一念に同時に厭忻を具足す共に信の具徳なり。故に本典には忻淨厭穢之妙術とあり。略書には捨穢欣淨とありて前後互に顯はす。若し行者の機相に就て論すれば。是亦機に隨て不定なるべし。高祖蓮師の如きは厭忻心起らずとの玉ふ。歎異鈔唯圓坊に答ふる如し。寶章四帖目に云云。厭忻の有無に關せず唯願力攝取を仰く而已。因に文を解せば以忻求乃至之故也とは。十九願行者は故らに捨家棄欲して厭離の苦心を起さずとも。淨土と發願せば自ら願力に依て生死を離れしめ淨土に生ずるを得べし。是れ聖道の教義と別なる所以なり。

問又就横出等の文の所顯如何。答ふ二に別して忻求真實と明す。上は總じて五丁右三行

忻求を明し。今は別して三業に約して忻求を明す。文可解。問ふ按宗師釋已下の所顯如何。答ふ文を引て結指す。此一段は上に引用せる五丁左三行疏文に自力眞實を明す中。厭離を先とし忻求を後に出すあり。又は忻求を前に明し厭離を後に出すもあり。其釋相前後異なる所由を明す。即ち聖淨二門自他二力の別を決別したるものなり。上には爲本といひ今は爲先といふは。言異意同のみ。又自他依正二報とある下に忻求爲先の字を入れて見る意なり。之なきは自然の略なり。上來至誠心を料揀し擧る。

問ふ深心釋の一段如何が料釋するや。答ふ二者深心等第二に深心を料揀する五丁左六行に二。一に直擧疏文別示宗義。一に按文意已下は廣布名相二分拆眞假。初中又二。一引文二今斯深信等は辨定なり。初に引文の中二者深心等は經を陳して名を釋す。問ふ深心の名義如何。答ふ略して深心といひ具さに深信之心と釋す。深とは淺に對す。深遠の義なり。入ると遠きを深といふ深なる時は動せざるの義あり。信は忍許を義とす疑なきが信の義なり。不動不疑を深信といふ。餘の心に簡て深信之心と釋す。然るに觀經元と隱顯に通するが故に。下

列の如く深信に就て七深信六決定と釋して。一往要門に通せしめてあり。疏文に眞假通釋すと雖。初に二種深信と組合せて明すものは。全く弘願の釋に取切る祖意なり。機法一具の信なれば信機の外に信法なし。信法の外に信機なき。二種一具の他力心なりと顯はす。依之高祖疏を引て殊に深信の實義を明し玉ふ。尙は假に通せざることを辨定して。他力至極之金剛心等との玉ふ。化卷本^{十五}左是以大經言信樂乃至對諸機淺信故言深也とあるが深心の實義なり。問ふ弘願の實義に約して深といふ義相如何。答ふ機法の實義に徹底するを深といふ。假令我身は罪惡生死の凡夫と知るも。自力を捨ざれば深信の實義に叶はず。半途に中止するは信機の實義にあらず。又他力を信すと雖廢立の佛意に契當せざれば實の信法にあらず。廢立の佛意に契當して。捨つべきを捨て歸すべきに歸するを深信の相と云ふ。深は彌陀をたのみなり。然れば顯說要門に深信といふは。唯一往の義にして實の深信に非る故に諸機の淺心と判し玉ふものなり。

問ふ二種深信の義相如何。答ふ一の深信を二種に分て行者の信相を審にせし
手左七行

なり。二種は一心中の義別にして捨自歸他の疑蓋無雜の信心を顯はすの釋なり。其捨自は機の深信にして他力に全托するを法の深信とす。決定自身現是は信機なり。機を見限て自力を捨るを信機とす。文に無有出離之縁とは自力の堪ゆることを知る相。乘彼願力とは信法なり。願力に全托するを乘といふ。捨自歸他を二種とす。二種と分てども實は二種同時なり。明來闍去闍去明來の如し。闍去て明來るとは唯だ説必次第のみ。闍去の外に明來なし明來の外に闍去の相なし。去來は同時相應せり。自力淨盡の外に他力全托の相なし他力全托の外に自力淨盡の相なし。二種相離れざるを他力深信と名く。假令自ら無出離縁と信機して自方は速に捨てたりとも。他力に全托されば。實の信機にあらず。明來らずして闍去るべき理なきが故に。問ふ二種一具同時相應なると聞こへたり。然るに之を機法二種と分て各深信の言を置てあり。其機の方に就て信機と云へる信の字義は如何解すや。法相に就て信の義を云は、信は忍許愛樂の義ならん。然れば捨自の方に忍許愛樂の義如何解すや。答ふ古來異説あり。一義に信の字義は所難の如く忍許愛樂なり。其一の

無疑心を機法に約して分別す。其信の向ふ處は共に招喚の勅命に於て立つ。彼の勅命に汝は無用離縁なり自力を捨てよと教ゆ。其勅命を忍許して疑はざるが信機の相なり。又法に就ては願力攝取なりと勅命す。其勅命の儘に忍許愛樂するを信法といふ。二種の信は共に勅命に向ふて立つ字なり。又一義に信の義は固より忍許愛樂なるが故に。願力攝取の法に向ふて立つ。法を離れて機を信するといふ義なし。然るに今は機法一具にして信法の外に信機なし。信機の外に信法なし。自力を捨る處に則ち他力全托の義を有する佛習を了解したが自力淨盡の相なり。故に共に信の字を施して機法一具を顯はす。斯二義取捨任情。問ふ信とタノムとは一体の異名なるべし。然らば信機の信とタノムといふて差隔なきや。答ふ法理に就て云はゞ機をタノムといふも妨なし。然れども教語に於て大に宗義を濫る所ある故に。機をタノムの語を嚴禁す。例せば欲生正因の語を禁するが如し。三心即一の義あるが故に。法理に於ては其義あれども。教語に於ては許さざるが今家の規則なり。三業異義に濫するの恐あるが故なり。

問上來の所辨觀經の深信。願顯に通ずるものとす。隨て其善導の疏釋も願顯五丁左六行兩釋ありとするや。答ふ深信の眞假を論するに古來二義あり。一義には經の上は一往願顯に通ずれども。疏釋は經の正意に約して深信の一は弘願に取切て釋す。七深信は共に弘願中の義別なりといふ。高祖の傍註に自力々他の言あるも。之は自力他力の義には非す。別解別行の他に對して自身の信を建立するが故に自利信と註す。又信機信法の處に自利の言あれども。是亦た自身を信機するが故に自利信といふ。元來深信の正意は本願の信樂と十九の三心の心の中に入れて。自力心を廢する爲に深信と説く。故に化卷に深信者對諸機淺信と説き玉へり。此れ實義に就て釋するが善導なりとの説なれども。此義頗る多難なり今之を取らず。一義に疏釋の上は固より願顯二途に亘る。故に高祖自力々他の指令を付け玉ふ。上の至心釋に準すれば自力々他は自力他力の分別なると勿論なり。如何が眞假に通ずる哉といふに。廣く七深信六決定を明せども。初め機法二種の深信釋は隨意弘願の釋にして假に通せず。故に今鈔にも具に疏文を引き。而て之を辨定して今斯深信他力至極等との玉ふ

。其假に通ずるは。正く第七深信の初より就人立信の中場ちゆうまに至るまで。要門の深信を明す。故に初の票に建立自心とあり。所明の文に専心念佛及修餘善の言再度迄もあれば弘願に非ると可知。依て此一段の文化卷に引て信卷に引かず。釋迦指勸已下の文正く弘願深信を明す。故に信卷本ほんに引用せり。備又第三の觀經深信は隱顯二途に通して全く一文兩向なり。故に信化卷共に之を引く。此觀經に三福九品定散二善を説て。人をして忻慕せしむと深信すと訓點せば。定散二善は所廢の法なりと顯はす。又人をして忻慕せしむと深信すと訓點せば。要門の深信となる。是は兩途に亘る。如此疏文眞假に通すと雖二種一具としたる深信は。決して假に通せず。問ふ二種深信の釋意。弘願にして假に通せずといふ。然るに今鈔の布列を伺ふに第一深信は自利信心とあり。然れば信機のしんき一は眞假に通ずるに非ずや。答ふ第一の深信と自利信心と釋するに就て。古來多説なり。一義には此二利は二力の異名に非ず。我機を信するが故に自利といひ。他の願力を信する故に利他といふと。此說祖意に當らず。前後の指令に相違するが故に。自利を他の目。前後文に照すに二

力の別を顯はす目なると明なり。今謂く。善導の二種一具の深信と。高祖信機を自利とし信法を利他と分釋し玉ふと。深意の巧説なり。上辨の如く。疏の二種深信は決して要門に亘らず。故に他力至極金剛心と辨定してあり。然るに七深信を列する所に。分釋して二利とするものは。信機の假なるものと擧て。眞假の別を知らしめ。其相似の信機を簡ふ爲なり。要門の行者假令何程の信機をなすとも。第二の弘願の信法に相應せざる信機ならば。爾是れ自力にして他力の信機に非ず。乘彼願力の弘願の信法に相應せざる相似のものを簡んで。眞假或ひ勿らしめんが爲に。一具の信を二利二力に分て顯はすなり。是れ實に巧妙の御手段なり。

問ふ七深信六決定の一段。如何が分別するや。答ふ按文意已下は二廣布ろくはふ名相なうしやう分ぶん拆ちやく眞假。此中三。初ニ總票二に別列三に正明。七深信六決定とは深信に七種あり。而て第六の依此經深信に決定の言なし故に六決定といふ。別列の七は初の一は信機次の六は信法中の差別なり。問ふ善導の釋義七深信の中。信法は眞假に通じ。信機は弘願に局て要門に通せずといふ。然れば要門には信

機なしとするや。若しありといは、要門の信機は何の處にて明すや。答ふ要門の信機は要門の信法の處に攝して明す。信法が通すれば信機も通すると理在絶言なり。問ふ別列の文を解せ。答ふ此七種深信は疏文の字眼を擧て。略して七種の目を作るなり。此中二あり初に深信を列ね次に決定を出す。七深信の中第一は信機。高祖之に自利信心と加釋することは。疏文は殊に二種深信と別取して一具の他力信を顯はし。今は信機といへども弘願の信法に相應せざるものならば。假にして實にあらず故に自利信心也と。加釋して相似を簡ふ爲の巧説なると上論の如し。第二の深信は具さに之を云は。四十八願攝受衆生の願力を信するの信にして。弘願の信法なり。之を利他信海と註し玉ふ。第三の觀經深信は古來二説あり。一義の意には觀經顯説の深信に約す。第六の此經深信は隱意に約す。今は要門の深信なり。如何となれば。疏文^{左丁}に深信説此觀經乃至使人忻慕とあり。定散三福を信すとは顯説の信に相違なし。隱意の深信は第六に明すが故に。依て之を化巻に引證し玉ふ。尤も信卷に引用するものは對簡の爲にして。正く眞實の深信とするには非ず。又一

義には上辨の如く第三深信は眞假に通ず。全く一文兩向なり。定散二善を説て忻慕せしめ玉ふと讀む時は要門の信となる。又人をして忻慕せしめ玉ふと讀めは。定散三福は方便忻慕の善にして。所廢の法なることを信するの義なり。此時は弘願の深信なり。即ち廢立を了解するの義たり。是故に信化兩卷に再引し玉ふ。取捨任情。第四に彌陀經深信は弘願の深信なり。諸佛証誠を信するの信なるが故に。終南は小經を以て廢權立實の經とす。小經に於て隱顯を論せず。諸佛証誠を以て他力念佛の信心を證するとするなり。故に眞實にして假に通せず。然るに化巻眞門下に引用し玉ふは如何と云ふに。之を教頓機漸の意に約して。眞門の行者諸佛証誠の眞實を顯て。自己の善根とするが故に大に宗意を誤り。故に法に約せば諸佛証誠の眞實法なりと教頓を顯はす爲に。眞門下に之を用ゆ。則ち法を欺して機失を誡むる意なり。第五に唯信佛語とは三經の眞實を合釋して。佛願佛教佛語に契ふと顯はす。依行とは選擇本願の行に依るなり。依て信卷に引て化巻に引かず。第六の深信は觀經の隱意に約す。此經とは觀經を指す今所釋の經といふ意なるが故に此經

といふ。此文信巻に引て化巻に引かざるは隱意弘願の釋なればなり。第七の深信を隱顯に通ず。初は專心念佛及修餘善の言を再出し。又は此觀經定散等と諸行を修して往生を願する相を明せり。是れ弘願に非ると可知。即ち從假入眞の次第にして顯説の深信の釋なり。而て第四重の難破を答ふる中。糝令釋迦指勸已下は隱意弘願の深信を明す。如斯眞假に通ずるを以て票に決定建立自心とあるなり。偕此票文自ら二義に亘るべし。一には自心とは自力心のこと。即ち要門の自力心とす。二には別解別行の人の難破に逢ふて。益々自の心堅固にして破壊せざるを顯す。即ち弘願の信なり。此義下に至て具辨せん。二に六決定とは決定は決斷安定の義。是非を決斷して心を安立するなり。第六深信を除て六種を得る。之を如次可知といふ。

問ふ正明の所顯如何。答ふ就第五唯信等は上に別列を舉て三に正明なり。即ち上列の深信釋の文に就て。具さに其釋意を辨す。而て前四種に別釋なきは釋文簡易短少にして文義解し易ければなり。已下三種は釋文廣長なると以て別釋す。問ふ此文の解釋如何。答ふ傍註に利他信心とは。他力信心の異名

にして假の深信に簡ふ。唯信とは唯佛語を信じて自力を雜へざる故なり。佛語とは彌陀釋迦諸佛に通ず。此中票釋あり可知。票に三遺等とは釋義の字眼を舉て其要を示す。文義を解すること下に至て可知。遺捨者とは雜行雜修を廢捨すると。遺行者とは專修正行を指す。遺去者とは去は絶去の義。異學異見等の處を去りて交らざるなり。遺とは佛の指令なり。捨行去の三に於て佛の指令に信順して違せざるが三遺なり。三隨順者は彌陀釋迦諸佛の願教意に契當するに名く。佛教とは釋迦佛願は彌陀なり。佛意は三佛に通ずる目なれども。願教の二より准知するに。諸佛に約したるものなり。三是名者とは三隨順の下に二是名あり今一是名あり合して三となる。眞佛弟子とは信巻に眞言者對僞對假等とあり。他力行者は三佛の正意に隨順する故に。餘の僞者假者に簡異して眞佛弟子と名く。

問ふ第六深信の文如何が分別するや。答ふ此中二あり一に票二に別列。初票七左三行に依觀經の傍註あるは。本文に依此經とあるのみにては。何經たるやを分ち難ければなり。偕上の第三は顯説を主とし此第六は隱彰の實義に約す。依て

信卷に之を引て弘願の信業を證す。疏文に依此經深信行とある行は。他力念佛なり。觀經では下輩の十聲稱佛を指す。他師は攝論に依て別時意方便の念佛とせる。其誤謬を破して善導六字釋を明して。此念佛は自力少善に非ず他力回向願行具足の念佛なりと顯はし。觀經一部の正意は此念佛を宗とすと指し玉ふ。故に此釋相専ら立義分別時意門の釋意を掲げて釋す。彼文に照して知るべし。問ふ別列の文如何が釋するや。答ふ此一段は疏の釋義。他師の謬解に對して觀經所說の念佛は。別時意方便語に非ることを明す爲に。菩薩說と佛說と其價值月隨當ならず。攝論は菩薩說觀小二經は釋迦諸佛の說なれば勝劣明白なりと。判決するに就て六即三印等の名目を擧ぐ。六即とは前四は因語を辨し後二は佛說を歎す。菩薩因人の語は佛の正意に契へば。佛即ち印可して如是との玉ふ。印可とは許可に同じ。可なることを許す義。如是は非にあらざる義。若し佛意に契はされは不如是と判し玉ふ。無記等とは無記はシルシナキこと事の徒に屬するをいふ。無利無益は言說書籍の利益なきといふ。正教は能證の言教。了教は所證の義理に約す。三印は解し易し。六正の

中。正教は能證の言說。正義は所證の義理に約す。正行正解等の四は行信の二法なり。就中正行と正業とは行に約す。行は修行の義にして能修に約す。業は業因の義にして行の徳用に名く。正解と正智とは心中の義別共に信心の異名なり。正は邪に對す佛意に順するをいふ。佛智を了解するを解といひ。願力を照了するを智といふ。二了とは了は明了の義。佛說は智惠無上証果無上の故に所說を了教と名く。菩薩は極果を究竟せざるが故に。所說尙不了教と名くべし。問ふ就第七又深心等の文。如何が料簡するや。答ふ此中二。一に就人立信二九丁右三行に就行立信。初中三。一總票二に二別者の下は別列。三に此名就人の下は結示。初票に建立自心とある其次に。疏文には順教修行永除疑錯とあり。今鈔之を略す。此文に就て二義あり。一義には自とは他の難破に對する言。異學別解の輩念佛を誹るに就て却て自己の信心堅固なることを顯はして。建立自心といふ。建立とは建て、倒れざるとなり。之は弘願に約する義なり。又一義には自心とは自力心の異名にして願力に對する言。佛願に托せず自己の心を

アテにするを建立自心といふ。之は要門に約する義なり。此第七深信の釋義隱顯に通ず。初は要門に約す。即ち第四重の難破を擧るにも。矢張要門に約して専心念佛及修餘善とありて。問答共に顯說に就て明す。次に第四重の難破に答ふる中に。縱令釋迦指勸以下正く弘願を明す。此中には専心専修と謂て餘善を論せず。殊に諸佛證誠を以て眞證を證せり。證誠なるものは廢權立實にして。方便隨他の法を證するの理なし。故に信卷にも第七深信の初を除て後半の文を引き玉ふ。此深信の隱顯に亘るものは從假入眞の次第に約したるなり。故に此票二義を含む。就中自利信心と傍註せるは初要門を明す方に約す。問ふ別列の文を解せ。答ふ此中三。二別三異一問答是なり。先づ二別とは解と行となり。解は智解にして能修の心に約す。意見の別なるを別解といふ。行は所修の行法を指す。別解別行は聖道の人のとなり。一の佛法内に於て所修の行法と能修の意見とが別なるのみ。一家の別れを別家といふが如し。次の異學異見とは大に異なり。彼は元來佛法と性質を異にする外道を指したるものなり。然るに黒谷は別と異とを同一に扱ひ玉ふとあり。和語燈一に

解行異なる人と申すは。天台法相等の諸宗の學者これなり。乃至みなこれ聖道門の解行淨土門の解行に異なるが故なりとあり。別異共に聖道門の人に名く。高祖は之を分て別は淨土の僻解者に名け異は聖道門の人に名く。證文に別とは一つとを二つに分つことなり。解はさるといふ。念佛を行しながら。自力にさとりなす故に別解と名く。異學といふは聖道外道に越て。余行を修し餘佛を念す。吉日良辰を擇び占相祭祀をのそむもの。これ外道なりとあり。此意では別と異を分て別は淨土門内の十九廿の人を指す。同じ彌陀法に分派なるが故に別といふ。異とは廣く聖道外道の人を指す。如此二祖相違あるは隨時の意樂にして唯廣狹の異なるのみ。共に念佛を誦るものを別解異學の人といふ。三異者とは學法の異なるを異學といひ。意見の異なるを異見といふ。見は推求に名く義と計り求めるが見の義なり。教義の異なるものに執著するを異執といふ。

問ふ一問答中等の文如何が分別するや。答ふ此中二。一總票二別列。唯鐵根九十一行要上本四丁發問に五種を明す。一に不解の問二に疑惑の問三に試験の問。四に

輕觸の問輕觸とは奥深きことに非ざるをいふ。五に有情利益の爲に問ふ。今は正しく有情利益の問なり。種々に發問して他方信の堅固を顯はし以て衆生を勸進せん爲に。自ら問を立て、之を答釋し玉ふ。涅槃經迦葉品に答に四種を明す。一に定答二に分別答三に隨問答四に置答。此中今は分別答にして而も實定答に當る。即ち一切の疑難を總て受けざるなり。二に別列。此中二。一に四別二に四信。四別とは四重の破人を擧ぐる中。第一は凡夫の疑難なり。解行不同の人來て經論を引て。末代重障の凡夫界外の淨土へ往生を得べからずといふに。答へて四別を擧て聖道と淨土と法門別なることを明す。一に處別時別とは諸經も觀經も同時同處に説くと雖。各有緣の機に對して法を與ふるものにして。諸經は諸經にして觀經の時處に非ず。觀經は觀經の時處にして諸經の時處に關係せず。法門の所顯別なるが故なり。例せば一の教條にて同時同處に學科を授くと雖。所對の課業別なるが故に。初年は初年にして二年の時處にあらず。二年は二年にして初年の時處にあらざるが如し。次に對機別とは一は深位の聖者を所對とし。一は女人凡夫を對機とす。利益別とは

諸教は回心起行の法にして此土現身の証を求め。此は彌陀の願力に乗じて順次の往生を期す。此故に聖道の教義を以て淨土門を疑難すべからずといふにあり。問ふ四信の分齊如何。答ふ四信者等此中二。一通列二就上々等は別顯なり。偕て四信中第一の疑難は實事にして。法事談に五濁増時多疑勝といへるこれなり。元祖高祖の如き可知。餘三は假設なり。二乘の人と雖も共に佛弟子なれば。佛説を誹難する理曾てなし。今は假設して堅固深信を顯はす。故に縱使地前等と云へり。第一に往生信心とは凡夫疑難して。專心念佛及修餘善不可得往生といへるに對して。必得往生と答へて退心を生ぜざるを往生信心と云ふ。二に清淨信心とは信は大善地法の一なり。疑は妄染の法なり。不淨の疑に對する故に清淨信心といふ。此は菩薩二乘の問に答ふる中に此言あり。故に地前菩薩等と註す。彼人等は無漏清淨心より難するが故に清淨信心といふ。三に上々信心とは。初地已上大菩薩の問に答ふる中に此言あり。彼菩薩各無漏心あり彼の信に對するが故に上々と簡ぶ。四に畢竟等とは畢竟は究竟の義。總して以上の信を結する意にて。斯信心は凡夫虛妄の信にあら

す。至極究竟して更に一念疑退の心なしと顯す。一念は時刻の極促なれば妙
しも疑なきをいふ。此言第四難中にあり故に報化等と註す。上三信は要門に
通し第四信は正しく弘願の信心なり。

問ふ就上々信心等の文を解せ。答ふ此文は二に別顯。此中二。初は第三重と
明し。二に就報化等の下は第四重を明す。疏文に四重の難破を明して。要弘
眞假を論せず彌陀を所依とし願力を深信するが故に。凡夫は勿論菩薩佛が來
て疑難すとも摧けざる深信なりと顯す。其中第三重迄は要門の深信に約して
論ず。要門は權假の法と雖一分願力を所依とする故に。假令菩薩來るとも因
人の難破にては中々倒れぬ。然るに果人の諸佛が難破し玉はい覺束なし。假
令報化佛が現れて疑難しても。更に退失驚動せざるは獨り弘願の深信なりと
明すが第四の答釋なり。依て釋迦指勸己下諸佛の証誠を引て答釋し。信卷に
之を引証せり。此中に總票別列の二あり可知。五實とは疏文に由佛語眞實決
了義故佛是實知實解實見實証^ニ非^レ是疑惑心中語故と。五實皆果人の明實語なり
と顯はす。一に眞實決了とは所説の教理に約す。言說虛妄なきを眞實といひ

。正理を決判して或はざるを決了といふ。二に實知等の四は能説の智に約す
。此四を分別するに就て摸象記に實知とは一切種智をいふ。一切方法の差別
を照すを智と云ふ。解とは佛法を能説するの智にして四無尋なり。四無尋と
は一に法無碍一切法を説くに碍なし。二に義無碍方法に各々義理あり能く之
を知て説くに碍なし。三に辭無碍一切有情の種類別なるが故に言音各別なり
。其各種の言音に應じて自在に説くに碍なし。四に樂欲無碍一切衆生の樂欲
不同なり。其希望に應じて説與するに碍なし。如斯佛は能説の智に四徳あり
て決擇了了なるを解といふ。四に實見とは推求を見と名く。能く方法の理を
照して其理を考へ求めるが見なり。其見實に契當するを實見といふ。五に實
證とは證は證悟。一如を究竟するを實證といふ。此四は總じては智なり之を
開て解見證の三となる。智の障碍なく決擇明了なるを解といひ。推求して正
理に當るを見といひ。涅槃極果人の智解なることを顯はして證といふ。次に二
異とは眞實決了の見解に對する。外道の見解を異見異解といふ。

問就報化等の文を解せ。答ふ二に第四重を明す中三。一總票二別列三結示。
十^丁左^二行

初總票とは此文疏^七左^七縦合釋迦指勸已下の文を略出す。次上の問答は要門當分に約して正雜二行を混じて明す故に。専心念佛及修餘善等と念佛餘善を兼明せり。此縦合已下は觀經の正意に就て釋する故に。専心專修といふて餘善を論せず。依て信化卷共に之を引く。其化卷に引く者は觀經付屬の文を引くと同く思召のあるとなり。石泉は所迷を能迷に従へて引證すといふ。其意は眞門の行者は小經の諸佛證誠も。己が自力念佛を證誠せらるゝと惑ふて居る。其能迷の思想^{そごう}に隨へて弘願の文を引くと會してあり。今謂く抑も高祖は眞門の一種を機法と分て教頓機漸として。判し玉ふ流義なれば。今も矢張教頓の方に約して法は弘願とする思召なり。故に付屬文及び此文を引證す。如新法を是とし機を非とするものは。能迷の機失を貶斥する意なり。問ふ別列の中初に二專の義別如何。答ふ別列に各牒と釋とあり可知。偕二專に就て古義三義あり。一義に云く二專共に行なり。専念は弘願念佛なり。化卷に專修有二種一者唯稱佛名二者五專とあり。彼唯稱佛名は弘願の念佛なれば離自力之心と釋し玉ふ。之を今専念といふ。専修とは小經の顯說眞門念佛なり。五種と

註すれども其中の專名を取て餘四を取らずと云云。又一義には此二專は信行の別にして。専念は他力の信。専修は他力の行なりと云云。斯二義は纂釋撰象記に出づ。又石泉の一義には此二專は共に弘願行中の差別とす。他力信心に相應したる念佛を歎したるなり。決して自力念佛に非ると疏文に明げし。文に一切凡夫不問罪福多少時節久近但能上盡百年下至一日七日とあり。今一の他力行の中に於て二種に分つものは。専念は行体に約し専修は行者の修相に約す。法体に就て論すれば正定業は唯名號の一法なるが故に専念といふ。即ち餘行を雜じざることを顯はす。若し機の用心に依らば報謝の爲に。五種正行を修するものなれば毫も自力を雜じず故に専念といふ。五種と子註するは機の修相に約すれば五種の正行。皆報恩の行事にして共に自力を雜じざる故なり。化卷に専修者有二種一者唯稱佛名二者有五專とへる五專と今の五種とは別なり。彼は要門行者が五種の行を各一行を専修するを五專といふ。今五種は共に弘願中の行なり。次下に六一心六專修とあるを今専修専念の二とす。彼の第六種が専念に當り。一心専念彌陀名號より前の五種が専修に當る。

即ち他力信心に催されて五種正行を専修するが故なり。法体に約すれば第四稱名の一法が正定業たる物柄なれば之を専念といふ。上來三義の中今は第三義に従ふ。前二義各過失あり。第一義の如く専念を弘願とし専修を眞門としては。大に終南の釋意に違す。疏に小經の證誠を引て自力を廢し他力を顯はす證とす。眞門自力の念佛を諸佛が證誠するの理なし。依て上論の如く信卷に引てあり。若又汝解して此文を化卷に引く故に専修は眞門なりと云はし。専念も亦眞門なるべし。何故に専修のみを弘願とするや。化卷に此文を引くは付屬の文を引くと同く。高祖の思召あるとにて。此二文を以て眞門とする意にはあらず。石泉は所述を能迷に隨へて引くと云へども。今は此義を取らず。此は教頓機漸と分て彼の機失を誠むる祖意にして。其教頓を顯はす義に約して兩文を引用したるものなり。法の方は弘願なれども。悲哉機失に依て方便となると法是機非を判して機失を誠むる御手段なり。此義に約して眞門下に引き玉ふ決して終南の上の二專を眞門とする義に非ず。第二義に二專共に弘願の信行なりとす。是亦終南の釋意に准せず。終南は専念の言多く行に約

して明せり。即ち常に一心専念との玉ふ所の一心に對する専念にして念佛のとなり。故に行卷下九に専念即一心顯無二行とあり。彼義は證文を引て専念亦信心なりと會通すれども。之は疏文の當釋に非ずして轉釋なり。問ふ四同己下の文を解せ。答ふ四同とは疏文に十方諸佛悉皆同讚同勸同證何以故同體大悲故と。此中に四同あり。讚勸證の三は上卷に辨するが如く。一音聲の說法が佛に向へは讚となり。衆生に向へは勸證となる。同體大悲とは諸佛所證平等是一の故に大悲に於て差別なし。大悲別なき故に勸貶別なし。一佛の勸即一切佛の勸なり。次に一所化とは佛は能く化する故に能化といひ。衆生は佛に化せらるる故に所化といふ。所化に二を分つものは。疏文に一佛一切佛といひ。之に對して一切佛の所化即一佛の所化といひて。此二所化を以て同體大悲を釋せり。次に六惡者とは惡は善に對す物を障害するを惡といふ。此六惡は時處人の三なり。衆生と見と煩惱とは人中の差別なり。次に二同者同心と同時なり。同心は内心に約し同時は言説に約す。次に三所者は所説の法眞實なるを顯す。三中自ら總別あり。設は總にして讚と證とは説中の義別な

り。一の言説讚嘆證誠の義あるが故に。此中勸を略するは讚證即勸なるが故なり。問ふ一佛所説即等の文を解せ。答ふ三に文を引て結す。此結に就て疏の上來の文結ありて票なし。次下の就行立信の一段は票ありて結なきものは。巧に互顯したる也。一を略すと雖も票結具備の意なり。就人とは就は猶從の如し。人に從て信を建立する義。又立は安立の義あり。其人とは六要三に二義を出だす。一義には人とは四重の破人を指す。人の難破に就て益々信心堅固なるを就人立信といふ。一義には人とは佛を指す。因人不了の説を信せず。佛智決了の語を信じて信を安立するが故に。就人立信といふ。初義は和語燈の一二等に順す。若し信卷所引の文意に准せば後義を主とすべし。信卷には四重難破の文を除て。釋迦指勸の文を引て就人立信の相を明す。是れ後義の意なり。

問ふ就行立信等の文如何が分別するや。答ふ此中二。初總票。二就正行の下十一丁左八行は別列。此上就人立信の一段は真假に通す。初は要門顯説の深信。後は弘願の深信を明す。其從假入眞の次第に約したるものは。要門の行者として假と去

て眞に歸入せしむる爲なり。今此就行立信の一段は居眞箇假の釋なり。何を以て知る歟なれば二行章に此文を引釋するに。善導大師立正雜二行捨雜行歸正行之文と票して。廢立の釋を成す。然れば終南の自行安心此外になしとす。然に古來此一段の文猶要弘に通すと解す者多矣。初五正行羅列の處は要門を帶び。次の合門助正を判する處は正く弘願なり。依之信卷に初五正行の處を除て。特に合門の處のみを引く。以之可知と云云。今此義を採用せず。何となれば二行章は初に五行と開きたるを其儘。助正の二種と合したるものなればなり。若し開門は要門にして合門は弘願なりといはば。開合不齊の失あり。猶正雜二行の廢立は今家安心の規則たること。賢章改悔文の如し。二行廢立亦た假に通すとせば。今家安心の規則となり難し。況や要門中に在て正雜の廢立成し難く。要門の機も二行の衰貶を了知せば。何を要門の機と云ふべけん。信卷に此就行立信の文を引くに。開門の一段を略したる者は。引用の要に非るが故なり。高祖此文を引き玉ふは。上の就人立信の文の不問罪福多少時節久近の文を助顯する爲に。就人立信の文を引く。正く引用の主要は

。一心専念彌陀名號等の文にあり。故に開門を略して引かず。下に至て論ずべし。次に文を解さば就行の就は從の字の意。就は去に對する言にして。非を去て是に就く辭なり。自力雜行を去て正行たる他方法に從て。信を安立するを就行立信と云ふ。立は建立の義。建て、仆れざるが故に。行とは修行の義と進趣の義あり。修行の義は行ふと訓す。之は行者の修相に約す。進趣の義は行体の徳に約す。因地より果地にゆくなり。之はユクと訓す。此行を釋するに古來多説あり。傳通記に行に三義を立つ。第一に行とは正雜二行なり。二行章に往生行有二種一者正行二者雜行と云ふ。雜行も亦た往生の行なり。機の宜しきに隨ふて。正行に付て立信するあり。雜行に付て立信するあり。之を總して就行立信といふと。第二に行とは五正行なり。雜行を捨て、五正行に就て立信すといふ。第三に五正行の中第四の稱名を指す。餘他は助業にして正定業に非ざるが故に。今謂く三義の中第二を正義とすべし。第一の如きは今家の所談に非ず。上論の如く此一段居眞簡假の釋義にして。上の就人立信の文に専心念佛及修餘善とあるを。餘善を雜行と名け念佛を正行と名

く。其捨雜歸正を正意とするものなれば。何ぞ此中に就雜の事を論せんや。第三の如きは宗意に違せずと雖も。釋相の大体に違する處あらん。此一段は行體を分て而て信に配して釋した者なり。聖道の行を自力心にて修するを雜行と名け。淨土の行を他力心にて修するを正行といふ。依之捨雜歸正といふ。此中の正には五種あり雜行に對すれば五行皆正なるが故なり。正行の中に於て行體を論する時は。正助の主伴ありと雖も。雜行に對するときは五種共に正中の物たるなり。何ぞ前三後一を選ふの理あらんや。故に今は第二義を取る。

問ふ正雜の名義如何。答ふ然行有二種の文を釋するに。義疏に温故録に准じて三門を作て具辨す。今略して其義を明さん。一に釋名二に辨相三に料簡。釋名とは正とは説文に是也。又は中正の義。此訓に據るときは。正とは正直の義にして邪曲に對す。又廣韻に長也君也と。此訓に據るときは。臣屬に對する主君と正といふ。雜行に對する時は正直中正の義が主となる。又正行中に於て扱へば。前三後一は助伴となり第四は君長となる。如此正行の正は所

望に依て義の扱不同あり。次に雜行とは是に又二義あり。一に雜選の義。物の交るとなり。或は雜聚ともいふ。之は名異義同なり。選擇集七十二雜者是純非極樂之行通於人天及以三乘又通於十方淨土故曰雜也。化卷本十一雜言攝八萬行。種類雜様を雜と云。二に雜穢の義あり玉篇に厠也といふ。則は厠穢の義にしてケガレモノをいふ。二行章に雜に五番の失を明し疏の難可回向得生衆名疎雜之行也の文を引く。是れ雜穢の義なり。今私に案するに。二行の對目は影略互顯の判目なるべし。謂く正とは正直正當の義にして。其反に雜行は邪曲なることを顯はす。又雜とは雜選の義にして。其反に正行は純一極樂の行なることを顯す。然れば此は正にして純一。彼は雜にして邪曲なり。本來淨土の行に非ず回心轉向の行なるが故に。以て可知。正雜の判目は正雜邪純各二義を顯す判目なり。何故に正直あるや彌陀の本願に相應するが故に。雜行は之に反して非本願の行なるが故に邪なり。又正行は純一彌陀の行にして。諸佛の行を雜へざるが故に純なり。雜行は之に反して餘佛餘菩薩の行を雜選せるが故なり。問ふ正とは純一の義雜は雜選の義といふに就て。不審あり

。然らば聖道の行にもせよ一行專念するは。雜に非ずとするや。所謂化卷に要門の行類に五專を明すが如し。純ら一行を修して往生を願求するは。是れ雜行にも非ず雜修にも非ずとするや。答ふ然らず。假令一行專修すとも雜行中の一物なれば是又雜なりとす。喩は一人來るも雜兵來れりといふ。又一種あるも雜事物じぶつといふ。雜の名を得たる所攝なるが故に。正雜の判は彌陀の願意に基ひて建立す。願意の立て所に名號の一法を選取して往生の行とす。餘の自力諸行を以て往生の行とするは。悉く皆選捨の行とす。選取する所の行は一法。選捨する所の行は多種混雜す。故に雜行と名し。假令一行を修すとも雜中の一なるが故に雜行と判す。問ふ此目は行体に心を屬して判じたものにして。聖道門に在て此土入聖の爲に行するを。雜行と名くる理由なし。定散自力心を以て。淨土へ回向する行なるが故に雜行と名く。彌陀選捨の行は全く此行なり。單に行体にのみ約するに非ず。單に修相にのみ約するに非ず。行に依り心に約して正雜の判を成じたものなり。

問ふ二行の修相如何。答ふ義疏第二門に修相を明す。之に二あり。一に行相十二二行

二に心相。初行相とは二行の修相に種々不同あり。先づ雜行に就て云へば雜行無量。各行者の意樂に従ふて不同。一行專修の機と二行已上兼行の機とあり。散善義の初め三福正因を論ずる中。及び擇樂付屬章等の如し。又正行を修する機に於ても。要弘總じて論ずれば行者の意樂に従て不同あるべし。因に云く正雜助正の分別は。固より終吉の上弘願に居して判釋し。二力の服立を顯明する對目なれども。高祖に來て其扱一往相違あるに似たり。化卷及今鈔一往廣く要門に通じて正雜二行の修相を明して。終吉と相違するは如何といふに。是は特別の祖意あらん。委くは下の料簡門に於て辨すべし。今正く化卷要門下に正雜二行具さに釋あり。彼釋意に就て論ずるに。其釋相大分三あり。一に正行雜修二に五專修三に唯稱佛名と。五正行を修する機に如此三類あり。前の二は要門の機。第三の唯稱佛名の機が正く弘願なり。故に釋して。化卷に專修者唯稱念佛名離自力之心是名橫超他力とある。初正行と雜修する人多種あり。二行已上兼修せば皆雜修なり。詳論せば兼修の人五十人。二行兼修の人二十人。三行兼修の人十五人。四行に十人五行に五人。各一を

主として餘を兼ぬる。二に專修に五人あり。之は兼修せざるが故に知り易し。又自力の上に唯佛名のみを專修する機あれども。自力回向を捨てざるが故に。專名なれども弘願の專修とは大に別なり。又專門の專修とも別なり。修相を云へば唯一專念佛名なれども。其能修の心より論ずるに其位大に異なり。要門の專修は専ら一行を修すれども。念佛の諸行に勝るゝとを知らず。又眞門の機は偶諸善出過の念佛と知り乍ら。己が自力回向の善として。弘願の專修と大に別なり。弘願の念佛は別に選んで唯の字を置て。毫末も自力心を雜へざるを顯す。故に唯稱佛名といふ。上の要門の五專に簡ふ。又眞門の念佛に簡ふ。故に離自力之心といふ。先づ行相を分別する如此。二に心相とは二あり。一に定散自心二に非定非散。定散心は自力非定散は他力なり。何故に他力心を非定散と名かなれば。他力の如きは定に依らず散に依らず。己が自力罪福を須ゆる心を捨て。只他力を仰くのみ。依て非定非散といふ。終吉の判せる二行は能修の心に約して行体を判す。餘佛餘土の行を自力回向心を以て修する故に雜なり。他力心にして淨土の行を修すが正行なり。設

ひ正行を修するも。定散心を帶るときは却て雜中に攝す。疏に雖可回向得生衆名疎雜之行との玉ひて。回向心を帶るものは雜中の失を得ると明なり。先づ修相を分別し擧る。

問ふ二行の判目終吉の上にては弘願の所談にして。要門に在て正行の名を許さず。然に高祖の上化卷及今鈔の下の釋。要門に通じて正雜の行類を分別せり。故に高祖より終南を同へば二行の判。亦一往要門に通ずとするや。答ふ義疏の第三料簡門即ち正雜の眞假に就て。古來諸説不同なり。上に略辨する如く。一義に散善義の上一往要門に通ず。或は要眞弘三門に亘ると云ふ説もあり。二行章の如きは。終南の正意に約したるものなり。故に善導大師立正雜二行捨雜行歸正行文と正く終南の安心とするもの。是は本意に約して弘願とする釋なり等と云。今謂く然らず。就行立信の釋は上論の如く。居眞簡假の釋にして。決して假を帶ふる理なし。要門行中に於て正雜の廢立成じ難じ。若し正雜の行体勝劣を知らば要門の機に非ず。況んや五番の得失を擧ぐるかや。然るに化卷に從此要門出正助雜之三行と票じて。廣く三行を要門に通じ

て明すものは。深意あり、要門の行者折角正雜の名を聞て。彌陀の行こそ純極樂の行なりと知て。正行を修し乍ら。尙自力回向心の餘習を離るゝ能はず。唯正行の名を聞くのみにして名下の義を知らず。一步は進みながらも。悲哉雜行の巢窟を出でず。同く胎生邊地の失を感ず。機失を顯はさんが爲に。弘願の舊名を以て能迷の行類を分別した者也。所述の目に就て能迷の行を分別する者。尅する所。機失を誠むるにあり。問ふ淨土の行已に定散心を以て修するとき。之を雜修と名け。却て雜行に攝屬す。若し聖道の行を他力心にて。修する時は之を正行に攝するや。答然り三輩章に助正を論するに。同類の助業異類の助業を明す。同類の助業とは五種の正行なり。共に門内の行なるが故に。又異類の助業とは。捨家棄欲發菩提心等の一切諸行を指す。他力信心の行者が報恩行として修する所の諸行なれば。雜行に非ず之を異類の助業といふ。報恩の念佛を喜ぶ助縁となるが故に。決して往因を助成する意に非ず。助正の義は下に至て論すべし。同し報恩行の中正助の位別ありと雖。自力雜行に對すれば正行中に屬する也。問ふ化卷に眞門を明すに專修専心

專修雜心あり。要門の專修專心と同異如何。答ふ或同或異なり。或同とは二門の修相唯一名號に於てす。以て是を往生の因と回向す是同なり。或異とは能修の心相に約すれば大に別なり。要門は稱名の易を知りて未だ勝を知らず。眞門の機は諸善出過の法たることを知る。是れ異なり。

問別列の文如何が科釋するや。答ふ就正行等は二に別列。此中二。一純明正行十二行又復の下は交格列正雜。初中二一總票。二五正行者の下は別列。上辨の如く此就行立信の一段は居眞簡假の釋なり。正雜廢立は善導隨自意の所顯。正行と名くる所以彌陀の本願に順ずる。眞實行たることを顯はすにあり。故に正行に五番の得益あることを明して。雜行を廢するが終吉の釋義なり。高祖も此宗義を相承し給ひて。今初に其實義を布列し給ふ。然に又復等と正雜交格して明す者は如何といふに。是に深意あるとなり。固より要門行者の所修。其行体を論ずる時は正雜二行に過ぎず。觀經に説く十三觀は正行なり。下輩の念佛も亦然り。上六品に説く三福は雜行なり。正雜の行を修しながら。有名無實にして正雜廢立の義を知らず。之を今弘願にありて名けたる名目を以

て。要門の行類を明し。且く要門に正雜の名を貸して。眞假混雜して廣く行體を明す。何故に眞假交格して明すかなれば。邪正ならべ明して。非と去て是を取らしむる爲也。同く正行を修し乍ら自力心を捨てざれば。遂に雜中の所屬となりて方便假門となるぞと顯すにあり。六一心六專修は釋文中の主目を擧て票す。下に至て解すべし。二に別列此中亦三。初五正行二六一心三六專修。初中二。一開列二合釋。各牒と釋とあり。二行章に五正行に就て開合二様を明し。初に五種と開き後に正助の二と合す。又就此正中の下は合門なり。開は其種別を明かし。他力報恩の行に讀觀禮稱讚の五種を明す。之を合して二種とするは趣入の要を示す。五行ありと雖も衆生をして往生せしむる正定業の徳を具するものは。獨り第四の稱名なり。前三後一は之に隨從する助伴の法なりと。行体の位を判して趣入に感なからしめんとす。之が開合の所顯なり。古來の説に初開列の處は要門を帶び。五行共に正行と明す。五行均等に談するは弘願の所談に非ず。弘願なれば一向專修なるが故に。之に依て信卷にも初開列の釋を除き。合門の釋のみを引て弘願の實義を證してあり

。評して曰く。此説疑難多し。第一開合不齊の失あり。開合は一法の上に於て立つ。開若し假ならば合亦假なるべし。合若し眞ならば眞を開くの開亦假に非るべし。又一向專念といふは趣入の安心に取ての義なり。其報恩の行事にありて五行を修すれども。他力の一心より行するに。何ぞ一向專念を妨くるの理あらんや。五行皆他力行なるが故に。正助君臣の別ありと雖。其位を亂さざるが故に共に正行なり。何ぞ五行あるが故に弘願に非すと謂はんや。一一心專讀等此五正行に五の次第を論ずること指定記の如し。摸象記に讀誦を初にするは疏文に專依往生經行等とあるを稟くと云ふ。私に按ずるに此は一定の次第あるとなし。唯隨時意樂のみ。定善義増上縁の釋には稱名を先とし禮拜憶念を後にす。次第不定知るべし。偕五行に各一心專の言を置くもの。一往言句の上は要眞に通すれども。今此一心專は自力雜行に簡ふの言にして。他力心より行することを顯はす。次の合門の所に一心專念彌陀名號とある。此一心專念を開て五行へ配す。疏の上に一心專念願彼佛願故は正定業なりと釋してあり。合門已に他力心なれば開門自力心たる理なし。故に二行章に

正雜二行各五行を列ねて對辨するに。正行の所には一心專の言を引て釋せども雜行の釋に此言なし。若し自力の一心ならば雜行の處にも此言を置くべし。之に依て今他力信心より行する所の。五行なることを顯して各三字を置く。一心とは疑二の心に對す。專とは他力行を他力の儘に行するが專の義なり。此は行相に約して他力を顯はす。讀誦とは熟語にして口音に經を讀むなり。二に觀察とは論註下_五心緣其事曰觀々心分明曰察と。心を所緣の境に凝すを觀といひ。所觀の境が明了に能觀の智に現じて。境智冥合するを察といふ。末世の道俗は逆も如實に作法住心して。淨土の依正を觀察するは企及どころに非すと雖。信後味道の觀と云ふとありて。信心相續の上より心に淨土の莊嚴相を。思ひ浮べて喜ぶも一分の觀と名くべし。疏文に思想觀察憶念彼國二報莊嚴とあり。思想憶念は思惟の位。觀察は正受の位なり。思と憶とを一分觀の中に攝す。然れば今日の行者も正行の一分をば修し得べしとす。次に禮佛とは禮拜なり。此中に一切身業の行を攝す。次の稱名は可知。次に讚嘆供養とは二行章に明すが如く。讚供に開けば六種となる。今は二を合して明す

。讚嘆とは淨土依正二報をホメルこと。供養とは大乘義章十四に法供養財供養の二あり。財とは飲食衣服臥具湯藥等の物をさゝぐると云ふ。法とは讚嘆等の五種が佛に向へば悉く法供養なれども。今は別して佛の功德を讚嘆するが法供養なり。此義に約して供養を讚嘆に合して明す。

問ふ雜行に對して五正行を開く。此五行開列の一段。純粹の弘願とせば。此は安心を示すとするか行儀とするか。安心とせば安心は一向專修にして。五行の入用なし。行儀とせば報恩行の所談なるべければ。所對の雜行は生因に約して廢し。正行は報恩にて立せば相對不調の失を招く。如何が會すや。答ふ雜行に對する五正行の目は。安心報謝の兩途交錯して明したるものなれば。能く意を得て解すべきなり。先五正行の修相を云はむ。所難の如く安心に入用なし。他力信より催さるゝ報恩行なり。故に一心專といふは無疑の一心より出たる報恩行なることを明す。五行全く信後道場内の作法なり。然に雜とすて、正に歸せよと趣入に就て。廢立の去就を示し玉ふは。全く安心の所談にして生因の邪正を論ずるにあり。此時は五行あれども唯一一向專修なり。

之を化卷に唯稱佛名離自力之心と示す。五種一に合して第四の稱名に攝して明す。正定業の德義を持つは稱名のみ。前三後一は助伴となりて稱名に隨屬の法なり。雜行に對する時は君臣正助共に正行中に攝して雜行に對す。因て禮讚及要集下末^十の如く。五念の行を修すとも他力心より修するものは。共に專修と判じて雜修に對す。一向專念の稱名に隨從して往因に於て。助正兼雜せざる故に。之を正行とも專修ともいふ。如此就行立信の釋安心報恩の兩途並べ明す故に。開合の兩釋此二途を知らしむ。開て五種とするは報恩。合して二種とするは。宗に就て趣入の安心を示し玉ふ。

問ふ合門一段の文意如何。答ふ又就此正中復有二種等。上は開列今は合門也^{十二}。開合所顯別なるが故に又といふ。上の正行を稟て二種を稟す。二種とは正助二業也。二行章に一者正業二者助業と名く。偕助正の義を論ずるに古來異說あり。一義に曰く助正は眞門に於て立つ。如何といふに弘願は一向專念にして往生の業因に。助業を借るべき義なし。若又要門ならば修諸功德の誓意にして。諸善万行各機の意樂に任す故に。助正不定なり。若行体に付て助正

を判せば。觀佛爲宗の教義なるゆへ。觀を以て正業として餘は皆助業となる。何ぞ稱名を正業と謂ふべきや。故に要門の助正に非ず。是全く眞門なり。之に由て今別列の文に疏の願彼佛願故の文。及び不問時節久近等の文。弘願の要點たる文を除て唯一心專念の詞のみを出す。是れ高祖の意眞門の所談とするに明なり。下釋にも彌陀定散念佛是名淨土眞門とあり。然に眞門に助業を論するは如何といふに。助は助發の義にして念佛を修せしむる助業となるが。前三後一の行なり。一向專修の念佛を策勵するの助を成すと云云。又一義に曰く助正は要門に於て立つ。既に化卷に從此要門出正助雜三行とあり以可知。要門の機に付ていへば助正不定なれども。修諸功德の機類の中に一歩進んで稱名を正とし餘を助として。専ら極樂の行を修する機あり。此機に約して助正を判す。これ從假入眞の釋にして。遂に弘願の實義に入らしめんが爲なり。終吉の上に願彼佛願故等の弘願の義を以て釋せども。一往假を帯びて明す。若し願彼佛願の實義を知らば。遂に弘願に入ると立つ。又一義に曰く助正は正く弘願に於て立つ。願彼佛願故を以て正業の因故とするが故に。

彌陀選擇の願意に願する義を顯はすこと。決して要門に通せざるなり。又不問時節等と釋する如く。念佛の多少に依らざることを明すは。他力稱名に非らずして何ぞや。又正助二行を修する者に五番の徳を與へてあり。就中雜行は回向の行。正助二行を修するは不回向と判す。要眞二門の行に不回向の義あるべき理なし。二行の弘願たること可知。問ふ助正は弘願に於て立つと云は。安心と行儀の二種の中。孰れに於て助正を論する耶。答ふ固より安心に助正あるの理なし。一向專念信心爲本の定教なるが故に。而て報恩行儀に二行を論する者は。報恩の行儀に於ける其所修の行体に君臣主伴の別を判じたものなり。是亦能修の用心に就て判するに非ず。用心は唯忘已仰願力而已。緣に任せて五正行を修すれども報佛恩の外なし。其行体の分齊を判じて助正の目あり。問ふ助正の名義如何。答ふ正とは君也長也。助とは佐也輔也。故に此助正は君臣主伴を判する目なり。業とは業作の義業因の義に非ず。俱舍寶疏十三に作用の義と云ひ。起信義記に動作の義といふ。今は報恩經營の業といふ。此は君長の行業此は隨伴の行業と行体の位を判じたものなり。

。何故に正助を判する哉といふに。上に雜行に對して五行同く正行と判す。若し五行共に往因に擬せば五行平觀の雜修となる。正く五行の備く所は報恩行にありて。行者去就の用心と云は、唯第四の名願力を專念する斗りなり。前三後一は捨て、取らず。之を一心專念彌陀名號と釋す。故に寶章二帖目に雜行をすて、正行に歸するを本意とす。其正行に歸するといふは。何のやうもなく唯彌陀を一心一向にたのみたてまつるばかりなりと。此宗義を顯さんが爲に合門の釋をなして正助を判す。問ふ助正の判釋は安心に就て去就を示す爲といふ。然るに汝上に助正は報恩の行儀にありて論するといふ。前後矛盾の說に非ずや。答ふ正助の義相を論する處は報恩の行儀にあり。安心に助佐を用ふる義なきが故に。行儀に於て助正を立るとは終始助かすべからざる所。然るに報恩の行儀に助正を論する所顯たるや。不得意の行者ありて廢立の要を知らず。五行平觀して共に往因に擬して。君臣の序を失ふ者あり。故に正助を判して行者の趣入に惑勿らしめん爲に合門の釋をなす。今更に詳に合門の釋意に影略互顯の義を辨じて。汝が疑團を氷鎖せん。上の開門に於て

辨する如く。此一段は安心行儀を交錯して明す。五種正行の邊は行儀なり。正雜二行の去就を論して立信を明すは安心なり。此兩途あるが故に合門の釋に於て兩途を互顯して明す。先正業の方に一心專念乃至正定業と顯すは安心に約す。行者の趣入に取ては一心專念が正定業にして。前三後一は捨て、取らず。專念も正定業も共に餘を廢するの詞なり。然に次に依禮誦等爲助業と。其所廢の物に助の名を附するは。又取て扱ふの義にして。此は行儀に約して明す。前三後一が助業ならば第四は正業となり。正助となりて共に作用を成すと云は。報恩の行業を示す。第四は安心前三五一は報恩に約す。各互顯して安心行儀二途を明す。一應之を見れば二行章に一者正業二者助業とあるは。正定業の略語に似たれども。定の一字の有無に於ても大に意味あり。正定業といへば往生に向ふて業因の義を示し。正業と云へば助業に向ふて業作の義を示す。業因に於て助を借るの義なきが故に。前三後一を助業と云ふより。第四を見れば正業の義あることを顯はす。此時は正は君長の義。助に對し君長の行業を義とす。又正定業の時は正定は佛果に望りて云ふ。正く佛果

に到るの業なるが故に。是より前後を見れば所履の義を顯はす。如此兩途互顯の釋義可知。問ふ助正は行儀に於て立つこと。敢て命を聞く。而前三後一が稱名を扶助する相如何。答ふ。助の相に就て自行化他の兩途あり。自行に約せば前三後一に依て念佛を助發する緣となるが故に。化他に約せば念佛弘通の補助をなす故なり。信者の行儀を見て隨喜の想を生し。自ら歸入の因縁となる是助の相なり。問ふ高祖の上において弘願に於て助正を扱ひ玉ふ。釋意何れにありや。答ふ正しく和讃に助正ならべて修するをば云云。此讚に語面と反顯との二義あり。語は雜修の失を明し而て其反顯する所は。他力信を得て佛恩を報する爲に。正助の行を修するは雜修に非ず。他力專修の行なることを顯すにあり。依之助正の行弘願の釋なることを可知

問又就此正中等の文句を釋せは如何。答ふ此文自ら票釋あり。初に二種と票十二行す。上は開門に約し具に行相を明し。今は合門に約し行体の位を判す。所顯別なるが故に又の字を置て之を分つ。二種とは正助の二なり。次に釋中一者一心專念とは他力の信行。證文に一心とは金剛の信心專念とは一向專修なり

といふ。又略書には明知一心是信心專念則是正業とあり。他力行行たる可知疑心なきが故に一心といひ。自力を雜はさるが故に專念といふ。彌陀名號とは如來所成の嘉號。勝易の二義を具せる無作直入横超金剛の法なり。疏文には行住坐臥不問云云の言われども今之を省略す。正定業とは正定に到るの業因依主釋なり。今正定とは淨土の益にして業は業因なり。銘文に正定の業因は則是れ佛名を稱するなり。正定の因といふは必ず無上涅槃の証を開くたねと申すところなりと。摸象記に二義を出す。一には正選定の義。彌陀餘行を選捨して。正く名號を選定して往生の業とす。二には正定業に到る因の義。然に正定業は現當に通ず。現當に約すれば信心の處に正定業の益を得る。此益を得るの業因の義なり。又當當に約すれば無上涅槃の妙果を悟るを正定といふ。涅槃は廣略相入の眞土。涅槃の當體正定業となる。其正定の當體即ち涅槃なり。今正定の業といふは。廣略不二の涅槃妙果に至るの業因なりと顯す。故に上引の銘文に必無上涅槃の證を開く種と申す意なりとあり。又執持鈔には名號を正定業と名くることは。佛の不思議力をたもてば往生の業正

く定まる故なりとあるは。正定を以て解釋の言としたものなり。暫く釋相左
 右あれども其意一にして。共に必定して佛果に至ることを顯す目なり。撰擇集
 二行章に何故五正行中特に稱名を以て正定業とするやの問に答て。願彼佛願
 故等とあり。今願彼佛願故の要目を略してあれども。一心専念の詞の中に願
 彼佛願の義を盡せり。化巻に他力稱名を釋して憶念本願離自力之心といふ。
 此一心とは離自力之心なり。唯稱佛名は則ち専念なり。自力を離れたる念佛
 は他力本願に信願したること勿論なれば。一心専念の言に於て既に盡せり。
 二者若依禮誦等とは此は二に助業を明す。等とは觀察讚嘆と等す。助業とは
 正業に對する意。正業とは正定業の略語に非ず。正定業と云は、果に望めて
 業因の義。正業助業と云は、果に望むに非ずして報恩行の主伴を判するなり
 。故に業は業作の義なり。此合門は安心行儀を互顯した釋なるが故に。正定
 業といは、前三後一は捨て、取らざる義を顯はし。又前三後一を助業と判す
 るは。安心には所廢の行なれども行儀に於ては。他力の信に備されて稱名を
 相續する助緣となる義を顯はす。助業と云ふより稱名を望めば。君長の行作

たることを顯はし。正定業といふより前三後一を望まば。趣入に於て所用なき
 を顯はす。互顯の釋意知るべし。六一心者とは別列の中二に六一心と明す。
 一心の言三門に通ず。化巻に又就一心有深有淺深者利他眞實之心是也淺者定
 散自利之心是也とあるは眞門。散善義四重難破の下に我今一心伏云云は要門
 。今は他力弘願の一心也。何となれば一心専念乃至佛願故の一心を開きたる
 が。上の五行の一心なり。故に證文に一心は金剛の信心なりと釋せり。而て
 六一心といふは釋文中に。六回一心の言あればなり。六事修亦た此に同し。
 其体唯一の無疑即ち往生一定と決定したる正定業中の一心なり。此一心より
 出て、報恩の爲に修する五行なれば。五行共に他力なることを票して各一心の
 言を置けり。三六事修とは事修の言一往要眞に通ず。化巻に事修有二種一者
 五事二者唯稱佛名とある。彼五事は要門なり。又眞門を明す中に事修離心と
 いふは眞門なり。行相に約せば一往彼に通ずれども。能修の心に約せば實の
 事修は唯是弘願の別目なり。故に化巻に唯稱佛名離自力之心是名橫超他力是
 則專中之事とあり。今の六事修は弘願なり。弘願は唯一行を修するを以て專

とは云はず。離自力之心即ち他力の法体を他力の儘に修するを專修と云。
 問ふ又復就正雜二行等の文如何解すや。答ふ二に交絡レ以列レ正雜。上は終吉の
十二左五行正意純粹他力正行を明す。此一段は失意の機に約して行類を分別す。要門行
 者は正雜の行を修し乍ら其行体の義趣を知らず。曲て自力回向の行とす。其
 能迷の行を所迷の名を以て行類を分別したるもの也。化巻に從レ此要門出正助雜
 とある釋と今と同じ。此義は上論の如く。終吉の正雜廢立が要門に通すと云
 ふにはあらず。弘願の舊名に約して要門行を分別して。能迷の機失を知らし
 めんが爲なり。モト弘願にありては正行と貴むべき義を失ふて。雜行と同く
 方便假門行となると顯はしたるものなり。此中二。初明心相二又復就正雜復有
 之下明行相。初を心相と見る所以は今行有二種と票じて定行散行を列す。此
 定散といへる目下の文より伺ふに。能修の心より名けたるものなり。同一念佛
 の行を定心より行するを定行といひ。散心より行するを散行と名けて。全く
 能修の心を票するにあり。故に心相を明したるものと見る。又復とは上に簡ふ
 。上は弘願の正義已下は要門に約して明かす。故に又復といふ。有二行とは

行を以て心を票す。行二種あるに非ず。心二種なる故に心に隨て行が二種と
 なる。故に二行とは心の二種を票する意なり。問ふ弘願の行者にも機の性得
 に約せば定散心なるべし。何ぞ弘願に於ては定散心の義を明さざるや。答ふ
 今家の宗義。定散心をば自力心の異名とす。弘願にありては已が性得の心を
 論せず。専ら自力を捨て、佛回向の大信を仰ぐ而已。故に終南已來定散の言
 を以て自力心の異名とす。序題門付屬釋等別して要門に名く。高祖之を承て
 信巻序に迷定散自心。又和讃に定散自力の稱名は等可以知。定散の名は自力
 心の異名とするが。宗則なり。一者定行云云此は別列なり。
 問ふ二に行相を明す文を解せ。答ふ又復就正雜復等二に行相を明す。此中二
十二左五行一總票。二又就念佛の下は別列。初文に二種とは念觀の二行なり。全体正雜
 二行各五行あり。然に唯念觀の二行を擧げて論するものは如何といふに。此
 は正雜二行各五行ある中。正業と云はるゝ大將を擧て二行の分齊を明し。隨
 伴の餘行は各此中に攝せり。雜行に約せば觀佛の功德莫大にして。觀は入理
 の要とし。餘行は觀の助道とす。又正行に約せば稱名が正定業たる王にして

。隨伴の行なり。然れども要門にありては有名無實にして。正雜助正の名を以て明すと雖。其義は全く失亡せり唯弘願の舊名に約して分別するのみ。次に又復就正雜復有二種とは。二別列。此中二初念佛二觀佛。初念佛の中又二。一票正雜二又復就彌陀念佛有二種下は正雜を釋す。今は初。念佛に諸佛念佛彌陀念佛あること易行品の如し。廣く七段の易行を擧げてあり。諸佛念佛の下に法身報身等とあるは。諸佛念佛の體を票したるものなり。法報應化の名義は上卷に辨する如し。諸佛に各三身あり其三身に隨て名號各別なり。且く釋迦に付て云は。法華文句廿五に法身如來を毘盧沙那。此に遍一切處と翻し。報身如來を盧舍那。此に淨滿と翻す。應身如來を釋迦。此に度沃焦と翻す。佛身に隨て利益を異にす。諸佛亦如斯。彌陀は然らず三身に於て名に不同なし。俱に阿彌陀佛と名く。何故に別名なきやと云ふに。彌陀は一の名號を以て衆生を攝す。皆本願力の然らしむる所にして。其德二なし。本願に別なきが故に。唯機緣に生熟ありて。要其弘の利益差別あれども。名に於て不同なし。唯一南无阿彌陀佛なり。機緣未熟の故に名號の實義を知らざるのみ。

。法体に別なきが故に名亦一なり。諸佛は然らず。衆生隨類各得解の故に。三身の名に隨て能く衆生に利益を成すと亦不同なり。問ふ又復就彌陀念佛等の文を解せ。答ふ此は二釋正雜此中二初正行念佛二雜十三丁右四行行念佛。初正行中又票釋あり。此二種とは正行定心念佛と散心念佛となり。正行とは雜行たる諸佛念佛に簡ふ。定心とは所謂禮贊丁に獨處空閑捨諸亂意係心一佛といふが如し。散亂心を止めて只一佛に係念して行するを定心念佛と云ふ。散心念佛とは心を一境に止めず。四威儀緣に隨て稱念するを正行散心と云ふ。次に彌陀定散とは上を承て釋す。問ふ眞門の名義如何。答ふ此に是日淨土眞門とあるは略にして。化卷には方便之眞門。又は眞門之方便といへり。方便の言上下の差あれども義は別なし。上下共に持業依主の二義あり。方便の言十九廿に通ず。今は十九の方便に非ず廿願の方便なるが故に。十九の要門に簡んで方便之眞門といふ。是れ依主釋なり。又十八願に向へば眞門即方便の持業なり。又眞門といふ詞に就て義疏に。略書の回入念佛眞實門とあるを引て。依主持業の二あることを辨せり。持業にて解さば眞門とは眞

實門なり。念佛を指す諸行に簡んで眞實といふ。念佛は即ち入涅槃の門なるが故に眞實即門なり。又依主にて解せば眞實は淨土の證果を指す。念佛は證果に至るの門なる故に念佛を門といふ。如此二義共に念佛の行を眞門と名く。然るに念佛にして機に未熟なるものありて。他力の實義に了達すること能はず故に方便眞門といふ。又は眞門の方便といふ。是義疏の意なり。私に按ずるに眞門と眞實門とは。上祖の上は只具畧の異にして差別なし。而て高祖は眞門の目を以て一箇の失目即ち方便の異名とせり。是故に眞實門といふ義とは異なり。二十願の如きは法に約すれば諸善超勝の念佛なれば眞實と謂べし。若し能修の心に約せば定散自力の機執を捨てざるが故に。完全の眞實と謂ひ難し。法願機漸行専心難と機法を判し玉ふ祖意より伺へば。眞門の目は褒貶を顯はした者也。法是の故に眞といひ機失の故に實の字を缺く。例せば難思議往生と難思往生の目を以て三願宗別を顯はすが如し。文字面より見れば具畧の異のみなれども。一字褒貶を以て三往生を扱ふこと往生文類の如し。今亦然り。法は要門諸行と別ある故に眞といふ。機は自力心にして弘願と

別なり。實の一字を缺く所に要弘の中間に居することを顯はす。扱門とは通入と門別の義あり。此念佛即ち淨土に通入するの門なるが故に眞即門の持業。又要弘に別するの義あるが故に門別の義あり。是曰淨土眞門と讀く處では淨土中之眞門の依主となる。問ふ要門の上に正行定心念佛もあり。正行散心念佛もあり。化巻要門釋の下に既に專名あることを明してあり。今此前後要門中の行を分別す。然るに今鈔殊に彌陀定散念佛を以て。淨土の眞門とするは如何。答ふ上祖の上の要弘二門の廢立に於て。一種不得意の機ありて。眞門なる一種の機類此中より生ずることを明して。廢立を詳に顯さんが爲なり。眞門は終吉の上に於ては心に約して要門中に攝してあり。十九願の機類中其進歩したる者は。念佛の超勝を知て餘善を修せざる機あり。此を眞門とす。此機を開ひて眞門を建立し給ふが。高祖三門の扱なり。彼は一分法の超勝を知る邊より進めて眞門を開けども。能修の心より云はゞ五十歩百歩。猶要門の部類を出でず。此故に心より貶して之を要門中に攝して。二門廢立を成じたが終吉の扱なり。問ふ要門を明す中に於て正行念佛を淨土の眞門と名

け。要門中より眞門を出す時は。廢立を審かにするといふ義相如何。答ふ眞門の行者假令正行たる彌陀念佛を一向專修すとも。自力心を離れざる時は。皆是定散の念佛にして弘願に非ず。聊か要門に勝るゝ淨土の眞門なりと顯はす。問ふ眞門の念佛も亦一向專修と名くべきや。答ふ一向專修とは二佛を並へざる故に一向といひ。餘行を修せざるが故に專修といふ。然に一向專修の言眞あり假あり。憶念本願離自力之心と釋するが如きは眞實の專修なり。又は要眞二門にありて論するが如きは似たるものなり。今は其相似の一向專修を指す。所謂改邪鈔^{三十一}ニ正行五種ノ中ニ第四ノ稱名ヲモテ正定業トスクリトリ。餘ノ四種ヲバ助業トイヘリ。正定業タル稱名念佛ヲモテ往生淨土ノ正因ト計ヒツノルスラ猶モテ凡夫自力ノハカラヒナレバ。報土往生カナフメカラズ。乃至起行ヲモテ一向專修ノ名言ヲ尋フトイフモ。他力ノ安心決得セズンバ。祖師ノ御已証ヲ相續スルニ非ルメシ文。此は相似の專修を簡ふ。又末燈鈔に念佛往生ノ願ヲ。一向ニ信シテフタコ、ロノナキヲ一向專修トハ申スナリ文。此は眞實の專修を明す。問ふ上に一向專修に其似の二を辨す。其相似

なる眞門の一向專修の義相如何。答ふ一向は他佛他經に簡ふ。専ら一佛に歸向するが故に。專修とは前三後一の助行に簡ふ。名號一行を專念する故に。然れども弘願より望めば自力心を離るる故に。能修の心より論すれば一向專修に非らず。共に雜修の部類なり。問ふ化卷眞門下に眞門の專修に三句を出せり。一者定散心二者散專心三者定散雜心と。專修の中に三相ありとするや。答ふ行に約するときは。只一種名號の一行を稱するが故に專修と名く。若し能修の心に約せば三種となる。定心より修すると散心より修すると。又定散相雜へて修するとなり。化卷の釋初票の所は眞門當分に約して三句を票す。次釋に至て助正兼雜の心を以て名號を稱念す。行專心雜等といひ。又は罪福を信する心を以て本願力を願求す等と釋するもの。弘願より貶して專雜共に非なることを顯はしたるものなり。眞門の當分を專雜と分てども。弘願より望めば共に信罪福の自力心なる故に。眞實の專修に非ずと。票釋不齊にして互顯したるものなり。故に下文に眞知專修而雜心者不得大慶喜心等と。自力行者の過失を擧て上を總じて結するなり。

問十三行雜行念佛の文を解せ。答ふ又復就諸佛念佛等此中二。初票次釋。此二種とは是亦能修の心相に就て二種を分つ。此定散の心相を明すに就て。温故樹心等に諸文を引釋するが如し可見。諸佛の御名を稱ふるが故に雜行とす。諸佛定散等とは此は釋なり。此中雜中之專行とは専ら一佛の名を稱へて。二佛を並へざるが故に專行といふ。專は專一の義なり。摸象記に問ふ彌陀淨土を願生するもの彌陀名號を稱へざるものあるべからず。諸佛の御名さへ稱ふる人。理として彌陀名號を稱へざることをなし。然れば專行といふべからず。答ふ願生の機千差万別なるべし。偏に諸佛に因縁ありて。已が心に叶ふ佛名を專念するものなれば。固より彌陀名號も稱念すとも之を以て往生の業因とせず。然れば尙是雜行中の專行なり

問ふ又復就觀佛等の文を解せ。答ふ此は二に觀佛を明す。此中分二。一總票十三行二別列。初總票に二種とは正行觀佛と雜行觀佛となり。正の觀佛は觀經の十三觀の如く。専ら彌陀淨土の依正と觀す。雜とは他の聖道の上に明す觀法なり。問ふ此票には正雜共に定行を票し下釋には散行を出だす。此票釋不齊なり

るは如何。答ふ之は上より正雜二行を並明する中。各五行の主たる者を擧げて念觀を票せども。其君長たる所には必ず隨件の助なるものあり。雜行の方では觀佛が正となりて。餘の讀禮稱讚の四行は助行なり。又正行の方では稱名が正にして餘四行は助なるものなり。今は其正たる觀佛に隨ふ助なるものを擧げて釋するが故に。下に至て散行を出だす。雜行にも五種の行あり。正行にも亦五種あり。於中正雜に助正を分別せば。此に三句を生ず。一には正行の時は君長たるものにして。雜行の上では助となる行あり。第四の稱名是なり。二には雜行の時は君長にして。正行の方では却て助なるものあり。觀佛是なり。三には定て助なるものは。餘の讀禮讚の三なり。

問ふ又復就正觀等の文を解せ。答ふ此は二に別列此中二。初正の觀佛次雜の觀佛なり。十三行初正の觀佛に三。一正出觀佛二出正散行三上來下結示。初中真假の二種を擧ぐ。次に十三觀ありといふ是は具略の異なり。合せば真假の二觀。開けば十三觀なり。真假は所觀の境に約す。所觀に相似可見の法あり。日想水想木像等を觀するは。實物を觀するに非ざる故に假觀と名け。餘の實樹

資樓勢觀等の實物を觀するを眞觀と名く。具さに之義釋名門に明すが如し。問ふ次に又復就正散行有_レ四種等の文を解せ。答ふ二に正の散行を出だす。此中に有_レ四種とは讚嘆供養を開て二とする故なり。今念佛を除くに就て。義疏に上に彌陀定散の念佛は眞門と判するが故に。此處に念佛を除くなりと云云。評して曰く要門中に彌陀定散の念佛あり。即ち化卷に五專中に專名を明す。然れば彌陀定散念佛にして眞門に非ざる分は。除くべき理なし今も之を出だすべきに非ずや。私に謂く。此は助正を以て判するときは。念佛と觀佛とは共に君長となる義ある故に。今は定めて助行なる者而已を別列し玉ふものなり。

問ふ三に結示の文を分別せよ。答ふ上來定散六種等是なり。此中定散六種といふに就て種々の説あり。古來多くは上の正の念佛正の觀佛と。次上の正の四種散行とを合して六種とし。此を兼行するを雜修と名くと解す。又義疏には上の正の觀佛に眞假二觀あり。此に四種散行を合して六種とす。彌陀定散の念佛をば上に眞門と判する故に。稱名の一は除きて入れず。是故に是名助

業とあり。若し六種中に稱名あらば是名助業といふべからず。念佛は助業に非ざるが故にと云云。或人の一義に此助は助正相對の助に非らず。助は助道なり。弘願專修に入るの方便助道の法なるが故に助業と名くと。是れ甚不可なり。相承の釋義に違す。助は正業に對する目なること相承の義なり。助正を要弘に分て釋すること未だ曾て無し。次に兼行とは兼は遍該の如し。六種を總じて修する故に兼行といふ。次に雜とは所修純一ならざるなり。雜に二義あり。一には雜選の義二には雜穢の義。雜選は要門當分に約す。二行已上を修するを雜修といふ。專行に對するが故に。又雜穢は弘願より望めていふ。和讃に雜修ノヒトヲキラフニハ万不一生トノヘタマフと。此等は雜穢の義なり。要門當分にありては專修と名けども。弘願より望むれば自力心より修して往生を願する故に。清淨眞實の行に非らず。假令一行たりとも雜と謂ふべし。雜穢の義に約するが故なり。斯二義の中。今は雜選の義にして上の一向專修といふに對す。要門當分にて雜修と判す。問ふ高祖化卷に助正兼行故曰雜修と。又和讃に助正ナラマテ修スルヲバ等とあり。彼は助正兼行する故

に雑修といひ。今は正業を除て雑修を明かす。其相違如何。答ふ化巻和讃等は弘願より望んで顯はすを主とす。五行平視の失を顯はす。正助の位を失ひ願力の法体を知らずして修するを。雑修と貶したるものなり。故に和讃に一心ヲエザルヒトナレハ佛恩報スルコ、ロナンと示し玉へり。是弘願より雑修と判する義を主とすること可知。今は要門當分において專雜を明すと主とす。故に正助を問はず。假令助たる行なりとも兼行するものは皆雜修と判す。又彌陀の名號を稱念すとも。餘行を兼修せば亦た雜修なること義此中に具す。摸象記に雑修の目を解すに四義を明す。一には雜行を雜修す。雜行とは所修の行体。雑修とは能修の心相なり。所修の行体諸善万行なるが故に雜行と謂ひ。此を能修する故に雑修といふ。是れ禮讚選擇集の意なり。二には雜行と正行とを雜へ修するを雜修といふ。此は唯信鈔に雑修トイフハ念佛ヲムネト修ストイヘドモ。マタ餘ノ行ヲモナラヘ他ノ善ヲモカタタルナリ。又持名鈔に雑修トイフハ同ク念佛ヲ稱ストイヘドモ。カテテ他ノ佛菩薩ヲ念ジ餘ノ一切行業ヲ加フル也と云云。三には五種の正行の中に於て助正兼行するを雜修

と名く。化巻和讃の如し。今六種兼行するが故に雑修といふ。亦此義に約す。四には稱名一行といへども現世を祈るを亦雜修と判す。和讃の如しと云云。私に按ずるに此四義約めていへば。上祖の上で論ずると高祖の上で論ずるとの二なり。上祖の雑修は其義廣し。諸善萬行を修するも又淨土の行を修するも。すべて自力心にて修するものは、みな雜修中に攝屬す。高祖の上では行体を分て聖道行を修するを雜行と名け。淨土行を修するを雜修と名け。雜行と雜修とを分て顯したるものなり。上祖の上は假令淨土の行を修するとも。自力回向心を捨てざれば能修の心より判じて雜行中に攝す。此を能修するを雜修と名く。故に上祖の雑修は遍く一切行に通ず。何故に上祖と高祖と其扱を異にし玉ふ哉といふに。高祖の意唯是廢立を具さに顯はすにあり。上祖の明す所の雜行雜修を具に論ずる時は。親疎勝劣の別あることを分て。假令彌陀に親近したる淨土の行を修すとも。自力心をすてざれば雜の名を免れずと顯す。以て上祖の正雜廢立盡きて餘蘊なきことを明さんが爲なり。是名助業とは正助二業の判意に依れば。此六種の行は助なる法と顯はす。方便假門及

要門等の解釋上に既に解す。方便即假門と方便之假門との依主持業あり。依主とは方便の言要眞に通ず。於中眞門に簡んで要門を立る。故に方便中の假門といふ義なり。持業は可知。要門にも依主と持業との二種あり。是亦九上に於て解す如し。

問ふ又復就雜觀佛等の文を解せ。答ふ二明雜觀佛此中三。初正出觀佛。二出散行。三結示。初に二種とは無想離念と立相住心との觀なり。有眞假とは是亦上の正觀佛の所に眞假を明すが如く。雜觀にも所緣の境に實境と世間相似との二あるものなり。實境を眞といひ相似を假といふ。無想離念とは定善義像觀疏に或有行者將此一門之義作唯識法身之觀或作自性清淨佛性觀乃至。今此觀門等唯指方立相住心而取境總不明無想離念也とのたまふ。此中唯識法身觀或は佛性觀等とは無想離念の觀なり。觀經に説く所の觀とは別なり。無想の想字を疏文及化卷には相字に作る。無相とは所緣の境相を取らず。光明相好等の相を觀するにも非ず。眞に法身の理を觀す。離念とは分別の心慮を亡し所觀の境相を立てず。能緣の心慮と止めず能所境智泯絶す。此と無想離

念といふ。次に立相住心とは相好光明等の境相を立て。心を所緣の境に於て分別了知するなり。如此雜行の觀に二あることを明す。第二に雜の散行を出す中。票と別列とあり。三福とは世福戒福行福の九品所説の三なり。福とは富饒の義にして三善業は皆善果の富饒を得るが故に福といふ。利益に就て善行を呼ぶ。列中孝養父母とは人間の善果を得る行なる故に世福といふ。孝は敬愛の義。養は資育に名く。父母を敬愛資育するなり。奉事とは奉は承なり事は勤なり。師は人に道を教ふる者。長とは智行高き者にして此は世出世の師なり。慈心不殺とは慈心を以て生を殺さず。是亦十善業の中にあれども。不殺が最勝の故に別出す。十善は十惡を禁制して作らず。以て人天の快樂を得るの業因とす。次に戒福とは受持三歸等なり。三歸戒は佛法僧に歸するの戒なり。此は諸戒を受くるの根本なれば最初に之を授く。具足衆戒等とは戒法多端之を具足衆戒と名く。不犯威儀は破戒を戒む。三に發菩提心等は行福なり。觀經の說に准じて四種を出たす。一には發菩提心即ち上求下化の大心を起すを行といふ。二には深信因果即ち上中品に説く如く佛教所説の義趣